



ア
フォックス
ツクイル
テイと

鬼軍曹

それを見たのは、本当に偶然だった。

真っ赤な夕日の日差しを受けて、黄色から赤、朱色、橙色と色鮮やかに変化する色彩。

綺麗だった。まるで縫い付けられたかのように、そこから目が離せない。

そして色彩に覆われた、丸みの残る輪郭の中で浮かべられている表情を見たとき、自分は瞬きを忘れた。

薄く桃色に染まる頬。歓喜に細められた真紅の瞳。両の端が釣りあがった小さな唇。

その全てを視界に納めた次の瞬間には、それは自分に背を向けて去っていくところだった。

なのに視界にはチラチラと、美しいグラデーションと笑みを浮かべた表情が、何度も繰り返し映っている。

それは暫くどころか、数日間も褪せることなく視界に焼きついていて、離れなかった。

カチャカチャと鳴る心地良い金属音。ハアと息を吹きかけながら清潔な布で長い表面を撫でると、艶やかな色を見せてくれる。

彼女（・・・）は今日も美しい。リエラ、と彼女の名前を呼び、きらりとフォルムが輝く。レイムの声に応えてくれた彼女（・・・）に、思わずうっとりと思惚れた。

「今は魔法銃（ブラスター）を磨く時間ではありませんよ、レイム・リリアーゼ」

「いたあっ！」

低く機嫌の悪そうな女性の声と同時に、バシンと頭を何かで叩かれる。じんじんと痛む頭をさすりながら顔をあげると、丸く筒状にした教材を手にした教師と目が合った。

「確か今は弾丸を調合する薬剤の講座だと思いましたが、私の勘違いでしょうか？」

「す……すいません……リエラの汚れが気になってしまったものでして……」

レイムは今授業中だったことを思い出し、己の失態を心の中で呻いた。

またやってしまった。魔法銃（ブラスター）から薬莢を取り出すことのみを言われていたのに、リエラを机の上に置いたとき目についた汚れが気になってしまい、美しい彼女に相応しくないと、ついそれを忘れて磨くことに集中してしまっただ。周りをちらりと見ると、既に皆薬莢を取り出しており、取り出していないのはレイムだけのようだった。レイムは慌ててリエラから薬莢を取り出し、机の上に揃える。

「……では続けます。今回の薬剤の調合は――」

朗々とした声が響く中、レイムは顔を隠すように教材を立てながら目を通す。しかし、視線は次第にリエラへと向いてしまうのは、どうにも止めようがない。

魔法銃（ブラスター）とは、この世に跋扈している『妖魔』と呼ばれる人間以外の生物達から身を守るべく、発明された武器だ。主に特殊な薬剤を調合した弾丸を使うが、自身の魔力を注ぎこみ、それを魔丸と呼ばれる弾に変換し、撃つことも可能。これほど身を守るのに心強い武器はない。

今習っているのは、弾丸とする薬莢に詰める薬剤の調合だ。毒草から採取した花粉から、発火性のある鉱石の粉末、

『妖魔』の骨を砕いたものなどなど、材料は多岐にわたる。

そんな材料から作られる弾丸の効果は、主に神経を麻痺させたり幻覚を見せたり、猛毒を体中に行き渡らせたりと、様々だ。

一つ誤れば凶器となってしまうが、相手にかすりさえすれば動きを封じることが出来るという点において、これらは重大な役割を持つ。

つまり魔法銃（ブラスター）は老若男女関係なく、平等に妖魔を撃退できる。

しかし、調合する薬剤には危険なものが圧倒的に多いうえに、知識がなければ弾を作ることが出来ない。そのせいで、銃身の材料となる鉱石は比較的安易に採掘できるため入手自体は難しくはないのだが、普及率は高くなかった。それでも、あまり運動神経がよくなくとも、魔力の量に自信がなくても使えることから、この武器を生涯の伴侶とする者は少なくない。

だからレイムが今受講している学科がある。魔法銃（ブラスター）科という学科が。魔法銃（ブラスター）の操作・整備から弾丸の調合の仕方まで教えてくれる。

レイムは磨き終えた自身の魔法銃（ブラスター）であるリエラを恍惚の眼差しで見つめた。講義の時間も嫌いではないが、美しい彼女（・・・）のボディは、見ているだけで惚れ惚れとしてしまう。

黒や灰色などの落ち着いた色合いが、偶に見せるキラリとした光。幾つものパーツからなる複雑に組み合わされた構造。そして何より、トリガーを引いたときに鳴り響く銃声音の爽快さ！ 魔法銃（ブラスター）の全てに魅せられているといっても過言ではない。そんな彼女達（・・・）がレイムは大好きで、自身が所持している魔法銃（ブラスター）の全てに名前をつけていた。

（むむ……！ 今日の調合の材料……これ全部部屋にあるじゃん）

黒板に記されている注意事項や具体的な取り扱い方をノートに素早くまとめた。今教わった調合で使う薬剤は、学院の外ですぐ近くで自生していて、比較的安易に入手できるものばかり。この講義さえ終われば、後はもう夕食の時間まで自由な時間になるから、愛用の銃達の手入れが終わり次第、調合に取り掛かろう。しっかりと出来たかどうか、学院の外へ出て弱い妖魔で試し撃ちもしてみたい。思わずウキッと心が弾む。

カランコロンと鐘の音が響き渡った。講座終了の合図だ。

レイムはすぐさま右手の中指に嵌められている指輪を机の上に翳す。指輪の中央に据えられた翡翠色の宝石がカッと光を放つと、机の上に置かれた教材とリエラが、まるで光に溶けるように形を歪ませ、そして光の中へと吸い込まれていく。

これは魔法指輪（マジックリング）。こうして翳すことでモノを持ち運ぶことが出来る便利な道具だ。許容量は持ち主の魔力の量で左右されるが、教材やノート、魔法銃（ブラスター）達を全て持った状態で、手ぶらで動けるので助かっている。魔力さえあれば誰でも使えるため、世界中で魔法指輪（マジックリング）を使っていないものなどほとんどいないだろう。

教師へ軽く頭を下げ、すぐに教室の扉へ向かった。目指す先は自室。頭の中は既に魔法銃（ブラスター）でいっぱい。

「待ちなさいレイム・リリアーゼ！ 今日は講座終了後、生徒に話があると……！」

当然そんな言葉がレイムの耳に届くはずがなく。レイムは低い位置で結った量の多い赤みのある黄色の長い髪を揺らしながら、教室の扉を潜り抜けた。

「……相変わらずマイペースだな、『フォックステイル』は」

誰かが呟いたその言葉に、その場にいた者達が一斉に頷いていたことなんて、レイムに知る由はない。

教室を出て、廊下を走り、自室のある寮へ一直線に向かっている途中、レイムはあることに気づいた。

講座が終わったというのに、他の生徒が見当たらない。別の教室を軽く覗けば、誰も席を立っておらず、教壇に立つ教師を凝視している。鐘が鳴った後も、きりのいいところまで講座が長引くことは珍しくはないが、他の教室も同じように長引いているのだろうか。それは流石にありえない。

腑に落ちないところはあったが、だからといって他に理由も思いつかず、レイムはそっとその場を離れた。人がいないならむしろ好都合。避ける必要がなく、その分速く自室へと辿り着ける。

途中階段が見え、レイムは飛び降りるために更に勢いをつけた。教師に見つかったら説教ものだが、今はだれもいないのだから大丈夫だろう。

「うそ！」

しかしその判断が甘かった。誰もいないと判断した階段下に――まさかの人が立っていた。レイムの声に振り返り、漆黒の視線がレイムを捉えて顔を引きつらせる。

「わわわわわ！」

慌ててももう遅い。空中で軌道を修正できるわけがなく、しかも焦りで身体のバランスを崩してしまう。重力に従い、身体はまっすぐ下へと落下していった。

ドンと鈍い衝撃が全身に走る。下にいた人にぶつかったのだ。顔面から硬い胸板にぶつかったせいで額を強打したらしい。頭がぐらぐらする。

「お、おい!？」

焦り混じりの声が聞こえるが、意識は次第に朦朧としていって耳に入らない。そしてプツリと途絶えた。

――あ、きつねがいる。

――声が大きいよ、こっちみたらどうすんだよ。

本当は潜める気などないのではと疑えるほど、はっきり耳に入ったひそひそ話。それを両手を握り締めながら、聞こえないフリをする。

――色憑きのくせに魔術が使えないなんて、下級妖魔と同じだな。

――いつか俺達のこと襲ってくんじゃねーの？ なんだってあいつは『妖狐』なんだし。

――あいつが魔術使おうとすると、とんでもないことになるんだぜ？ もうあいつ人間じゃねーよ。

どんなに聞こえないフリをしても、突き刺さってしまう悪意の言葉。言葉。

わたしはきつねじゃない、妖狐でもない――人間だ。ただの力のない人間だ。本当に自分が妖魔なら、彼らに好き勝手言われて大人しくしているはずがないというのに。

悪意の言葉に背を向けて走った。暫く走って誰もいないところで、ペタリとしゃがみこむ。膝を抱えて小さく蹲っていると、突然包み込まれるように身体に腕が回された。

――ごめんな、ごめんな……お前ばかり辛い目に合わせてしまって……。

――ごめんね、ごめんね……何もできないお父さんとお母さんでごめんね……。

瞳から涙を流しながら謝罪を続ける二人の男女。回された腕は次第に力が籠り、苦しく感じる。

否、苦しく感じているのはそのせいではない。悪意の言葉以上に、謝罪の言葉が胸に突き刺さるからだ。

悪意の言葉は跳ね除ければいい。でも、ひたすら謝る二人には、何と返せばいいのだろうか？ ただ、彼らが涙を流すのは自分のせいだということだけはわかる。

強くなりたい。自信を持って前を向いていられるように。誰に何と言われても俯かないように。涙を流す二人から悲しみを取り除くために。

そして、何より自分らしくあるために。

「ん……」

目を開けると見慣れない天井が視界に映る。そして全身を包んでいる温かく柔らかな感触に気づいた。布団だ。顔を横にすると、真っ白なカーテンが引かれている。ああ、ここは医務室か。

「って、何でわたし医務室で寝てるの!？」

ガバリとレイムは飛び起きた。新たな調査を試すために、急いで自室へと向かっていたはず。なのに、何故医務室で眠るという無駄な時間を過ごしてしまったのか。レイムはハツとして窓から外を見る。日は既に傾いており、真っ赤な夕焼けが暗闇に飲み込まれようとしていた。

「あ、リリアーゼさん起きた？ 大丈夫ー」

「うわあああーん！ もう外出期限時間過ぎてるうううう！ 今日のうちに試し撃ちしたかったのにいいいいいい！」

ここアナザイル学院は、ランドル共和国にあるアナザイル樹海のだ真ん中に建てられた、実戦力を高めるための高等学院だ。実戦力とはそのままの意味で、戦闘力のことをいう。人と対峙するときの訓練も行うが、主に妖魔を倒すことを目的とした強さを身につける。

一口に妖魔と言っても、妖魔には多種多様な種族が存在した。愛玩用の大人しい種族が二割、食用として家畜にされている種族も二割、そして残りは人間に害をなす種族。

圧倒的に攻撃的な種族が多く、人間は妖魔から身を守る力をつけるため、それぞれ武器を手にとった。

剣、斧、槍などの基本的武器の扱いから、己の拳で戦う格闘術、弓や己の魔力を消費して発動する魔術などの後方支援まで、妖魔に対抗するためのあらゆる分野の学科が用意されていた。レイムが所属する魔法銃（ブラスター）科もそのうちの一つ。また、妖魔に対抗するための手段の開発も盛んでおり、魔術科では研究をメインにした学科もある。

進路は主に要人の護衛や妖魔狩り、未開の地を開拓する冒険家などが上げられる。それぞれ夢をかなえるため、生徒達は自己鍛錬の毎日だ。

そんな生徒達にとって、妖魔が潜む樹海の中に建てられた学院は、腕試しには絶好の場所だった。

妖魔と戦えるようにするためには直接戦うのが一番、という理念のもと、アナザイル学院は樹海での実戦授業が多く取り入れられている。レイムが所属する魔法銃（ブラスター）科でも、机に座って調合の知識を得るだけでなく、外に出ての実技の授業も同数行われる。

生徒の中には授業以外でも己の腕を試したいと、外出の許可を取れば外に出て妖魔と対峙することが認められている。だが、その場合身の安全は完全に自己責任であり、教師が傍にいる授業以外での外での安全を、保障してはくれない。

学院に戻れば手当てはするが、仮にその怪我が原因で身体に障害が残ったり、切断しなければならない事態になったとしても、責任は一切負ってはくれないというシビアなところもある。

しかし学院側も、生徒を無闇に危険な目に合わせることは本意ではなく、樹海への外出は日が暮れるまでと校則で決められていた。昼間でも危険なのに、視界の利かない夜では危険性が更に増してしまうからだ。

もうすぐ日が完全に暮れる。つまり、今からダッシュで外出許可をとったとしても、もう外に出ることはできない、ということ。――試し撃ちの機会を逃してしまった。

「うわああああん！」

「ちょ……リリアーゼさん落ち着いて……！」

泣き叫んでいると、横から恐る恐る声をかけてくる声が耳に入った。涙目のまま振り返ると、困ったような苦笑を浮かべている、藍色を基調とした制服の上に白衣を着た学生、赤色のタイをつけているところからして三次生（因みに一次生は緑で二次生は青）が、白のカーテンをいつのまにか開けてレイムを見ていた。

「えーと、階段から落ちて頭を打ったって聞いたけど、頭ぐらぐらしない？」

「ふえ……？ あ、大丈夫です」

そういえば寮へ向かう途中、時間を短縮するために階段を飛び降りたことを思い出す。そしてそのとき丁度下に人――今思い出すと赤いタイをつけていた三次生の男子学生だったような気がする、がいて。まさか人がいるとは思わず動転して身体のバランスを崩し、その人物にぶつかり――気づいたら医務室だった。

「特に怪我はしていないし、身体に異常を感じないのなら、もう帰っても大丈夫だよ」

「あ、ありがとうございます。えーと……」

レイムはベッドから降りて彼に頭を下げ、そして彼の名前を知らないことに気づいた。というより、同い年の一次生ですら顔と名前が一致する人物は少ないのに、普段全く関わりのない三次生の名前を知っているわけがない。

「ああ、僕はヒリング。ヒリング・マレイズだよ。治療科に所属してる三次生。リリアーゼさん、診療記録にサインしてもらっていいかな」

「あ、はい」

ヒリングに示された机の上に乗っている用紙に、自分の名前を書くためペンを手に取る。そのとき、自分が今まで寝ていたベッドとは別のベッドのカーテンが閉められていることに気づいた。

「わたし以外にも、こんな時間に寝てる人がいるんですね」

「あー、あれはえっと……身体は健康そのものなんだけど、一種の心の病を患っていてね。まあぶっちゃけ全然大したこ

とないんだけど、本人が大袈裟にするものだから仕方なくベットを提供してあげてるんだ」

「はあ……」

変な間があいたと思ったら、急に捲し立てられ、レイムは返答に窮す。ヒリングの言葉にはどこか呆れも混じっており、現在ベットを使っている人をあまり快く思っていないようでもあった。しかしそれがどうしてかなんて思っても仕方がないし、特に興味も沸かない。だからレイムの視線はすぐに診療記録へと戻る。

名前を書き終わってペンを置くと、レイムはある疑問を持った。気を失ってしまった後、一体誰が医務室まで運んでくれたのかと。ふと思いつくのは、ぶつかってしまった三次生だ。彼もまた上から人が飛び降りてくるとは思いもよらず、驚愕したことだろう。彼が医務室まで運んでくれたのだろうか。もしも違うとしても、ぶつかってしまったことは一言謝らなければならない。

だが、はっきりと顔が思い出せなかった。

「あ、あの……誰がわたしを医務室に運んでくれたんですか？」

「ん？ えーと……僕の友人なんだけどね、君が上から落ちてきたと言って連れてきたんだ」

「先輩のご友人なのですね」

ならばその人物の名前を知っているはず。顔がはっきりとわからずとも、名前が分かれば探すことができるだろう。

「その人にお礼と謝罪をしたいので、名前を教えてもらってもいいですか？」

「え、あ、うーん……」

何故かヒリングはレイムから視線を逸らし、心の病を患っている人が寝ているというベッドの方を見ている。不思議に思って首を傾げると、彼は何でもないと行ってにっこりと笑った。

「ギランっていうんだ。ギラン・フォトグリス。剣術科に所属してるよ」

「ありがとうございます」

名前さえ分かれば探すのはそう難しくはない。一学年は百人前後と少し多いが、フルネームが一致する人間が二人いるなんてことはまずない。三次生に尋ねて回れば、きっとすぐに見つかるだろう。

「今日はもう寮に戻ってしまってると思うから、お礼を言うのは明日にしたらいいんじゃないかな」

「そうですね、そうします」

アナザイル学院は全寮制だ。当然ながら、男子寮と女子寮は隔離されており、異性の進入は厳しく制限されている。よほどの大事でない限り異性の寮に入ることは出来ないため、今日のところは諦めた方がいいだろう。

「そうしてくれるとこちらも助か……いや何でもないと。あ、ああそうだ！ 君がさっき言ってた試し撃ちも、明日やればいいんじゃないかな」

「！　そうですね！」

今日中に出来なかったのは確かに悲しいことだったが、それならば明日やればいいだけの話だ。沈んでいた心がパッと浮上する。

「ありがとうございます！　それでは失礼します！」

「あ、ああうん、お大事にね」

ヒリングにもう一度頭を下げ、レイムは医務室を飛び出した。ウキウキと浮き立つ心の赴くままに、ぴょんぴょんと跳ねながら寮を目指す。

(あれ。そういえばさっきの先輩、どうしてわたしの家名知ってたんだろ?)

心と心に疑問が沸いたが、まあいいかと気にしないことにした。今の自分にはそれよりも大事なことが待っている。部屋についたときには、既に頭は魔法銃(ブラスター)のことでいっぱい、助けてくれた三次生の名前はすっかり抜け落ちていた。

楽しそうに医務室を後にしたレイムを見送った後、ヒリングはふうと大きく溜め息をついた。

「.....行ったよ。もう出てきても大丈夫」

「.....すまん」

閉まっていたカーテンをガッと荒く開く音と共に、友人が姿を現した。

「破けるからもっと丁寧に開けてくれよ.....ってそうじゃなかった。何でさっき隠れたの。隠れる必要なんてないだろ。むしろ彼女と知り合える絶好の好機だったじゃないか。そんなだから、ネストに呆れられるんだよ」

「.....るせー」

本人も一応は自覚しているらしく、立てている膝に肘をついて手で額を覆っていた。深い溜め息が聞こえてくる。

階段から落ちてきたと、そして自分にぶつかり気絶してしまったとレイムを運んできたギランは、今まで見たことないほど取り乱していた。

今日の医務室の当番が自分でよかったとヒリングはしみじみ思った。ギランは上背があり、常に鍛えていることもあって、筋肉質だ。そのうえ目つきは鋭くつりあがっており、その場に立っているだけでプレッシャーを感じる威圧感を放っている、と周囲に思われている。ギランの人となりをよく知る自分以外の者が当番であったら、取り乱しているギランを一方向的に怒鳴られていると勘違いし、萎縮してしまっていただろう。そしてすぐに彼女を診ない当番医にギランは苛立ちを募らせ、そのせいで更に当番医は萎縮してしまい.....の悪循環に陥っていた可能性がある。本当に今日の当番が自分でよかった。

彼女をベッドに寝かせ、特に外傷はないことを確認する。しかし彼はレイムが目を覚ますまで、ずっと医務室の中にいた。眠り続ける彼女のことを、ずっと心配していた。

「あれだけ心配していたのに、どうして目を覚ました途端隠れてしまうかな、君は」

彼女が目を覚まし、声をかけた瞬間大声で泣かれてしまってヒリングは呆然とした。助けを求めようとギランの方を向けば、彼は隣のベットに飛び乗り、カーテンをシャーッと閉めているところだった。その行動に、あぐりと開いた口が塞がらない。しかし泣き声は一層酷くなって行って、ギランの行動を咎めている暇はないと悟る。そして話をややこしくしないために、彼はここにはいないものとして話を進めた。

「……君の気持ちもわからなくはないから、逃げるなどとは言わないけど、それじゃあいつまで経っても『知らない人』のままだよ。彼女、本当に噂通り魔法銃（ブラスター）にしか興味がないようだったし」

今日試し撃ちが出来ないというだけでわんわんと泣き喚き、泣き止んだ後もずっと涙目のままだったのに、明日にしたらどうかと提案した途端、ペアアと表情が一変した。とてもいい笑顔だった。

「まあ、一応君の名前と所属は教えたから、そのうち彼女の方から接触してくると思うよ。――忘れられてなければ、の話だけどね」

「……わかってる」

ギランは深く息を吐くと、ベッドから降り、迷惑をかけたなと一言謝罪して医務室を後にする。体格のいい背中はいつも頼りがいがあるのに、今はとても頼りなく見えた。

「大変だな……恋の病は」

ギランが患っている心の病の病名を呟きながら、ヒリングは医務室を閉めるべく、片付けを始めた。

その日の就寝は遅かった。翌日の試し撃ちのために、延々と新しい薬莢の調合をしていたから。気づけば夜も遅い時間になっており、寝着に着替えるのが面倒くさくなったレイムは、男子制服と同じく灰色を基調としたケーブとスカートを脱ぎ、ブラウスのままベッドに横になる。

起床を告げる鐘が鳴った。重い瞼をこすり、頭を掻こうとして、髪を解くのを忘れていたことに気づく。しかし寝起きではっきりしない頭と身体には、髪を結び直すことすら億劫だ。顔に垂れてきている長い前髪だけを、顔にかからないように左右でピンで留め、後ろ髪はそのままでもいいかとずぼらなことをレイムは選んだ。

ケーブとスカートを身につけて、寝ぼけ眼のまま部屋を出る。おぼつかない足取りのまま朝食を摂るべく食堂へ向かった。

ふらりふらりと横に揺れる身体をゆっくりと動かしながら前へ進む。丁度曲がり角に差し掛かったとき、反対方向からやってきた誰かにボスンとぶつかる。いたっ！ という甲高い声があがった。

「……げ」

上がった悲鳴はとても聞き覚えのある声だった。レイムは思わず顔を顰める。

「人にぶつかっておいて、げ、とはなんだ、げ、とは！」

まだ寝ぼけ眼なレイムと違い、しゃっきりと背筋が伸び、規定通りに着こなした制服のベルトに剣を差している少女が、肩掛け鞆を片手に持ちながら、偉そうにずびしと指を差してくる。面倒な奴と出くわしてしまった。

「レイム・リリアーゼ！ 聞いているのか!？」

「あー……うん聞いている聞いている。ごめんごめん」

「それが人の話を聞いている態度か！」

正直に言えば、彼女の話は左から入って右に抜けている。朝でも昼でも夜でも制服を着崩すことなくきっちりしている彼女と違い、レイムは朝に弱いのだ。彼女と知り合ってまだ数ヶ月だが、向こうもそれを把握していてもおかしくはない程度に、時間は経っているはず。

「それになんだ、その格好は！ また脱いだものをハンガーにかけず、脱ぎっぱなしにしたらろう！ ブラウスも皺だらけではないか！ 髪も梳かさずそのままとは……ああもう、こんな髪で人前に出てくるなんて信じられん！ 一旦解(ほど)かせてもらおう！」

一方的に男口調で捲し立てた少女は、レイムの背後に回ってリボンを解く。少女の手がレイムの髪に触れ——ぐいと首が後ろに引っ張られ、頭に痛みが走った。

「いたあ！ 痛い痛い痛い！ 何すんのトーティリア！」

レイムは少女の名前を叫びながら、じたばたと暴れた。

「ええい煩い！ 髪を梳かしてやっているのだから大人しくしろ！ お前は唯でさえ毛量が多いのだから、手入れを怠るなど何度も口をすっぱくして言っているのに、全く改善されていないではないか！」

「知らないよ！ そんなこと！」

寮の男女共通スペースへ行くための女子寮の合流地点にある廊下で、二人の少女はぎゃあぎゃあと言い合った。当然

周囲には同じ女子生徒の姿があるが、彼女達は二人の少女に一瞥をくれただけで何も言わず、黙って素通りしていく。浮かべる表情はまたか、という呆れ混じりのものばかり。そう、彼女達の朝の攻防戦はこれが初めてのことでないのだ。

「もおおおお、毎朝毎朝口うるさい！ あんたはわたしの母親か！」

「煩いとは何だ煩いとは！ お前が女として、いや人としての最低限の身だしなみすら整えていないのが悪いのだろう！ わたくしとて、こうしてわざわざ手をかけてやるのは本意ではないというのに！」

「ならほっとけばいいじゃない！ わたしは整えてくれなんて頼んでないんだから！」

「見苦しいと言っているのだ！ そんなだらしのない格好で校内を歩くなど、このわたくしが許さん！」

「この学院はあんたのものじゃないでしょ!？」

「人としての常識をわきまえろと言っている！」

次第に二人の周囲に人影がほとんどいなくなり、ついにポツンと二人だけが残った。

「よし、出来た！」

その一言によりレイムの髪からトーティリアの手が離れる。レイムはすぐさまトーティリアから距離をとり、首元にある結び目を手で触れた。

硬くしっかりと結ばれたピンクのリボン。毛量が多く絡まり易い髪に通る指。言い合いながらも、手をしっかりと動かしていたことには感心する。いや、毎度毎度繰り返しているから、慣れてしまっただけだろうか。

「……トーティリア」

「ふう、流石わたくしだな。どんなにぼさぼさな髪であろうと、わたくしの手にかかれば美しく纏めることなど造作もない！」

トーティリアは鞆を持つ方の手を腰に当て、もう片方の手で、彼女の持つ腰まであるさらりと流れる艶やかな黒髪を掻きあげる。その姿に、喉まで出掛かった一応の感謝の言葉が引っ込んだ。

「このトーティリア・スウェムフォード、生まれ持った美貌だけでなく学年主席を誇る頭脳、そして男にも引けをとらない剣術の才を併せ持つ！ ああ、自分の才能が未恐ろしい……！」

髪を掻きあげ終わった手を、今度は胸に当てた。白磁のような白い顔を薄ら紅く染め、自分に酔いしれる様を見せつけられて、レイムの身体中から力が抜けた。

レイムは自分がものぐさだということは自覚している。そして何だかんだ言い合いつつも、身なりを整えてくれるトーティリアに、感謝の気持ちがないわけではなかった。

ただ、その度に自己陶醉の自画自賛を聞かされるとなると、堪ったものではない。そのせいで感謝の気持ちは萎み、そしてそれが彼女への反抗心に繋がっている。

「レイム・リリアーゼ、美貌と才能を兼ねそろえたわたくしのようになれとは言わん。だが、お前も決して見目が悪いわけではないのだから、わたくしを見習い、朝はしっかり早くに目覚め、身なりを美しく整えてだな——」

「あ、やばい！ 早く食堂に行かなきゃご飯食べる時間がなくなっちゃう！」

既に回りに人の気配はない。生徒の自主性を重んじる校風ではあるが、当然のごとく食事の時間は決められており、それを逃せば次の食事時間を待つことになる。

「わあああああ！ 間に合ってえええええ！ もおおおおお、トーティリアの話は長くなるから会いたくなかったのにいいいいいい！」

「何だその言い草は！ って待て！ 大声をあげながら廊下を走るな！」

男女共通スペースにある学生食堂へ向かうため、レイムは必死で走った。その後ろをトーティリアが続く。

「待て、レイム・リリアーゼ！ わたくしの話が長いとは何だ！ お前のものぐさが少しでもよくなればと思って言っているというのに！」

「余計なお世話だよ！ っていうかあんたはそれにかこつけて、自分の自慢を語りたいでしょーがっ！」

「わたくしがいつ自慢話をした!? 言いがかりを言うな！」

「あれを自慢話以外の何だっというの!？」

「事実だ！」

「この無自覚ナルシスト！」

再び始まった舌戦は食堂に辿り着いたあとも続いた。食堂の出入り口の前でぎゃあぎゃあと騒ぐものだから、朝食を食べ終えた生徒達は勢いに気圧されて、食堂から出られない。

「ね、ねえ……誰かあの子達の喧嘩止めてよ……！」

「俺は嫌だぞ！ 魔法銃（ブラスター）マニアのフォックステイルと、自分大好きなスウェムフォードのお嬢様になんて、絶対関わりたくねえ！」

「あたしだって嫌よ！」

お前がいけ、あんたが行けば？ と生徒達は仲裁役を押し付けあうばかりで、誰も止めに入ろうとはしない。そんな中、一つのすらりとしたシルエットが彼らの前を通り過ぎた。

「やめないかお前達。公共の場で大声を張り上げて喧嘩など、淑女のすることではないぞ」

「！」

レイムとトーティリアは、突然割り込んできた人物の方を同時にバツと向いた。そこにいたのは、呆れが多分に含まれた顰め顔をしている、三次生の男子生徒。頭の高い位置で結われている紫がかかった長い黒髪は、痛みとは無縁のしっとりとした艶を放ち、切れ長の闇色の瞳を縁取る睫はとても長い。ほっそりとした輪郭に、真珠を思わせる白い肌。男子制服と低い声を聞かなければ、女性ではないかと思紛うほどの、美しい容姿を携えている。

「はえ？ えっと……あなた誰——」

「こ、これはネストラート・ロインゲル先輩！ し、失礼いたしました！」

この学生に全く見覚えのないレイムと違い、トーティリアは彼の姿を目に留めると、素早く彼に向かって頭を下げる。そんなトーティリアにレイムはぼかんと口を開けた。

「お、おい、レイム・リリアーゼ！ お前も頭を下げる！ 先輩だぞ！」

「トーティリアはこの先輩のこと知ってるの？」

「当たり前だろう！ というより、お前はロインゲル先輩のことを知らないのか……？ 有名な方だぞ」

「そうなの？」

人の顔と名前を覚えるのが苦手、いや、覚える気のないレイムは、顔と名前が一致する人間はほとんどいない。トーティリアは顔と名前が一致する数少ない人間の一人だが、こんなインパクトの大きい人間が印象に残らないわけがない、と自分を棚に上げてレイムは思っている。

「ロインゲル先輩は、両立が難しいとされる魔剣術科に所属している、先生方が揃ってもて囃す優秀な先輩だ。持ち前の美貌と伴い、学院内で知らない者はいないと言われているほど有名な方のだ。まあ、わたくしのように明晰な頭脳を持ち主ならば、ロインゲル先輩だけでなく、アナザイル学院に所属している者全てを把握しているものだがな」

「へー」

トーティリアの自分自慢は聞き流しながら、レイムが知らない時点で『知らない者はいないと言われている』ことにはならないのではとふと思った。しかしそれよりも、トーティリアがしきりに頭を下げろと言って来るのが少々うっとおしい。

「わたし別に淑女じゃないもん。何で頭を下げないといけないの」

「開き直るな！ それ以前に、目上の方に敬意を払うのは、人として当たり前だろう!？」

「.....それでは言い直そう。お前達がそこで騒ぐものだから、皆が通れなくて困っている。喧嘩をするなら、よそでやってほしい」

「あ」

レイムはネストラートの後ろからこちらを伺っている生徒達の存在に気づいた。自分達が喧嘩をしていたせいで出入り口を塞いでいたということに、漸く気づく。

「それは申しわけありませんでした。すいません」

自分の行動が他人に迷惑をかけていたのなら、謝るのが道理。レイムは素直にネストラートに向かって頭を下げる。

「分かればいい。ほら、お前達、通るなら今のうちだ」

ネストラートは後ろにいる生徒に声をかけると、彼らは我先にと出入り口に押しかける。レイムは人の流れを避けるために扉の横へと移動した。暫くして人の波が落ち着くと、レイムは朝食を食べるべく中へと急ぐ。カウンターへ行き、給仕の女性からコーンスープとパン、サラダの乗ったオボンを受け取り、適当に開いている席へと座る。

食堂にいた大半が外へ出たと思ったが、それでもまだ残っている生徒は数多くいた。食事自体は終わったらしく、会話に花を咲かせている。レイムはパチンと両手を合わせていただきますと呟き、サラダを口に運んだ。

「ねえねえ、十日後のオリエンテーリングって参加する？」

「あたしパスー。一次生は三次生と組むことになるんでしょ？ 知り合いなんていないから、ペアになったところできまらずいだけじゃない」

「あたしは絶対参加する！ だって三次生と組むってことは、運がよければ、ネストラート先輩とペアになれるかもしれないってことじゃない！」

「一体何人参加すると思ってんのよ。ネストラート先輩が当たる確立なんて、あつてないようなものよ」

「でもでも、もしもってことがあるじゃない！ オリエンテーリングをきっかけに交際を始めたっていう人多いって聞いてるし、ちょっと近づき難いネストラート先輩の可愛い恋人になれるかもしれないなら、僅かな可能性でも試してみるべきだよ！」

「だったらわたしはヒリング先輩と組みたいなあ。この間医務室行ったときのことなんだけどね。大丈夫？ って心配してくれた、あのふわりとした笑顔！ 色素が薄い茶色のふわふわした髪と穏やかな顔立ちも相俟って、もう最っ高！ 体調不良も思わずふっとなじったわ！ あんな人が恋人になってくれるなんてもう.....キヤー！」

「確かにヒリング先輩もかっこいいけど、でも私は――」

近くの席から聞こえてくる、同期の少女達の黄色い声。どこか聞き覚えのある名前がちらほら出た気がするが、自分に

は関係のないことかとレイムは聞き流す。

レイムは基本的に他人に興味がない。人見知りではないから話しかけられたら受け答えするが、自分からは滅多なことがない限り人に話しかけるなんてしなかった。このアナザイル学院に入学したのは魔法銃（ブラスター）について学ぶためであり、他の生徒と交流をするためではない。だからこうして一人であることを苦とは思ったことは、一度もなかった。

「ごちそうさまでした」

皿の中身を空にして、再び両手を合わせる。オボンを返却口へ持っていくため、席を立った。

「あ……でももし運が悪かったら……ギラン先輩にも当たる可能性があるってこと……だよな……？」

「！ そ、それだけのご遠慮したいなあ……顔はよく見ればかっこいい方だし、遠目から見分には悪くないんだけど……『鬼軍曹』って呼ばれてるような怖い先輩と組むことになるなんて……もうオリエンテーリングどころじゃないわ……」

耳に入る少女達の会話の固有名詞に、ふと何か忘れていたような気がした。うーんとその場に立ち止まって考えるが、思い出せない。それに彼女達の話を知っていると、十日後に学院内で何かが始まるみたいだが、そんな話をレイムは聞いた記憶はなかった。

「……立ったまま喰って、お前は一体何をしているんだ」

「あ、トーティリア」

同じく食べ終わったらしい空の食器を持ったトーティリアが呆れ顔をしている。丁度いい、いろいろ聞きたいことがあった。

「ねえ、トーティリア。オリエンテーリングってなに？」

「は……？ 何だ、お前昨日の話を聞いてなかったのか？」

「昨日？」

「全ての講義が終わった後、講座の先生が説明して下さっただろうが」

「あー……」

講義が終わって外に出たとき、人気（ひとけ）がほとんどなかったことを思い出す。あれは講義の後に残って説明を聞いていたから、誰も廊下に出ていなかったのか。

「わたし、試し撃ちすることしか頭になくて講義が終わったらすぐに教室から出たから、その話聞いてないや」

「お前な……まあいい、それなら特別にこのわたしが教えてやろう。感謝するがいい」

トーティリアは得意げに胸をそらしながら、上手に片手だけでオボンを持ち、空いた手で髪をさらりと掻きあげる。やはりこいつに聞くんじゃなかったと後悔するが、時既に遅く、ベラベラとトーティリアは語りだした。

「オリエンテーリングとは、アナザイル学院で年に一度、春（しゅん）学期の半ばに行われる一大イベントの一つだ。二人一組でペアになり、先生方が決められたコースを出された課題をこなしながら地図を頼りにゴールを目指し、誰が一番速くゴールに辿り着けるかを競う。樹海に潜む妖魔を相手にしながら課題をこなさなければならないから、己の力量や知恵、実践力が試される。三次生や二次生は今までの成果を発揮する機会、一次生は今の己がどこまで通用するかを把握するためという目的があるらしい」

「へー」

それを聞いてとことん自分には無縁の話だとレイムは思った。特に興味は湧かないし、そんなイベントに参加している暇があるのなら、魔法銃（ブラスター）を磨いたり薬莢の調合をしたり、試し撃ちをしたりしたい。それに、知らない人間と協力しなければならないというのも面倒くさい。

「優勝したペアには賞金が出るのだとか。まあ、わたくしは賞金などには興味はないが、この学年一優秀なトーティリア・スウェムフォードの実力を活かす絶好の機会を、ふいにするわけにはいきまい。――もちろんレイム・リリアーゼ、お前も参加するのだろうか？」

「え？ しないよ、面倒だもん」

「んな!？」

あっけらかんと、トーティリアの言葉を否定すると、彼女はカッと赤茶色の瞳を大きく見開く。そのただならぬ様子にレイムは一步後退するが、トーティリアはずいっとレイムの眼前に身を乗り出してきた。

「オリエンテーリングは年に一度の一大イベントだと言っただろう！ 学院の行事に参加するということは、各々に学院の一員という自覚を促し、他（た）の生徒との交流を深め、自己の成長へと繋げるという大事な役割を担っているのだ！ それをただ面倒くさいの一言で参加を拒むなどと、言語道断！」

「え……参加って別に強制じゃないんでしょ？ ならするもしないもわたしの自由じゃない」

「う、そ、それは……」

レイムの思ったことは正論だったらしく、珍しくトーティリアが言葉を詰まらせた。これ幸いと、レイムはトーティリアの横をすり抜け、空になった食器を返却口へと持っていく。

食堂の中は既に閑散としてきていた。あと数分もすれば講座の開始のベルが鳴るのだから、いつまでも食堂にいるわけにはいかない。レイムもそろそろ自分の講座が開かれる教室へ向かうために、食堂を後にしようとする。

「レイム・リリアーゼ！」

あと一步で食堂から出られるというところで、後ろから思い切り名前を呼ばれた。誰かなんて問いは愚問。この学院で、教師以外にレイムのことを常にフルネームで呼ぶのは、あいつしかいない。

「何……？」

自身の持つ紅い瞳を細め、うんざりした様子を隠すことをせず、レイムは仕方なしに振り返る。目が合った赤茶色の瞳は、爛々と光輝いていた。

「お前がオリエンテーリングに参加しないというのは仕方がない。お前の言うとおり強制ではないのだから、するしないは個々の自由だ。だか参加を渋るのもわからなくはない。なぜなら、頭脳明晰、剣術においては他の追隨を許さないこのトーティリアが参加するのだから！ 負けるとわかりきっている勝負事ほど、つまらないことはないだろう」

「はああ!？」

いきなり何を言い出すのかと思いきや、わざわざこいつは、自分の自慢話を聞かせるためにレイムを引き止めたのか。いやそれよりも、オリエンテーリングに参加しない理由が何故そうなる。誰がお前に負けるのがわかりきってるからなどと言ったか。そんな風に解釈されたことがとても腹立たしい。

「いつ！ 誰が！ あんたに負けるから参加しないって言った!? わたしは面倒だからしないって言ったの！ 勝手に都

夕食の時間が過ぎてから大分経つというのに、食堂は未だガヤガヤと賑わいを見せている。胸元に赤い色のタイ、もしくはリボンをつけた生徒達は、心持ちそわそわと落ち着きがない。皆、頬がうっすらと紅く染まっており、湧き上がる興奮を抑えているかのようだった。

「やっぱり今年が最後だからか、三次生はほぼ皆出るみたいだね」

ヒリングがまるで食堂に初めて案内されたばかりの一次生のように、周囲をきょろきょろと見回している。

「これはまだペアを決める段階だっていうのに、皆気合い入ってるなあ」

「そりゃあそうだろう。なんたって俺達にとっては最後のオリエンテーリングだ。今回は先輩に先導されるでもなく、気の合う同輩と組むでもなく、後輩と組む最後の年だ。今まで培ってきた腕の見せ所だぜ？ 気合が入らないわけがねえ。お前もそう思うだろ？ ギラン」

「……あ、ああ、そうだな」

ギランは熱く語るつり目の友人から突然話を振られ、返事に不自然な間が開いてしまった。

いつもの自分ならば、彼の言葉に素早く同意できただろう。何故なら自分も同じことを思っているのだから。

「どうしたのギラン。いつもなら君も同じように熱くなっているだろうに」

「なんか変なモンでも拾って食ったんじゃねーの？」

「何だって!? それは大変だ！ ギラン、今すぐ医務室に……！」

「誰が拾い食いして腹痛など起こすか！ 馬鹿にしてるのかお前ら！」

あらぬ方向の心配をする二人に、ギランは肩をいからせる。分別のつかない子供ではあるまいに、拾い食いなど十八を過ぎた男がするわけがない。

「ごめんごめん、つい職業病が」

「つーか腹痛じゃなかったら、なんだってんだよ」

「……別に、何だっていいだろ」

確固とした理由ならあるが、それを言うのは躊躇われた。もしも口に出したなら、こいつらは腹を抱えて笑い出すに決まっている。誰が好き好んで笑いものになりたいと思うだろうか。

「なんだよ、珍しくはっきりしねえな。らしくねえ」

「体調が悪いのなら、はっきり言うんだぞ！ 僕達は身体が資本なんだから！」

曖昧な返事は逆効果だったようで、二人はぐいっと顔を近づけてくる。ヒヤリと背中に冷たい汗が流れた。

「……三人とも、落ち着こう。先生がいらっしゃった」

寡黙な友人が食堂の出入り口を徐に指差すと、『教員』と書かれた腕章を嵌めた中年の男性が入ってくる。教師だ。

「お、やっときたか！」

ギランに詰め寄っていた二人の意識がそちらに逸れた。思わぬ助け舟に、ギランは軽く胸を撫で下ろす。

教師の登場にざわめきがピタリと収まり、生徒達の視線が一点に集中した。

「えー、参加者はこれで全員だな？　今ここにいない奴は失格とする。今回は一次生の参加人数は多いから、慌てず騒がず、落ち着いて一列に並べ」

教師が直径五十センチ四方の箱を両手で掲げる。あの中に、今年参加する一次生の名前が書かれた籤が入っているのだろう。それを視界に納めた生徒達は、視線だけで火をつけそうな勢いで、食い入るように箱を見つめながら動き始めた。

「ハハハハハ！　わたしが一番乗りだー！」

「コラア！　早速走ってくる奴があるか！　セズ・ラッカーノ！」

皆歩きながら並ぼうとしているのに、言いつけを破り、走って教師の前へ並ぼうとする生徒が一人飛び出した。

「うわあ。セズ、一人先に行っちゃったよ……」

「俺達も早く行こうぜ！」

走っていったのは、同じく友人であるセズだった。前方で教師の怒鳴る声と呑気な笑い声が聞こえてくる。

ギランは脱力しそうになるのを堪え、列に加わるべく足を運んだ。

これは年に一度行われるオリエンテーリングのペア決め。最上級の三次生は、入学したばかりの一次生とペアを組むことになる。公平を期すのと、入学したばかりの一次生に三次生の知り合いがいる者の方が少ないということで、『籤引き』という手段がとられていた。

今年が最後だから、今までここで学んできたことを最大限に活かせる場だから、と考えている生徒は、残念ながら少数だろう。彼らが興奮を露にしているのは、別に理由がある。

実力重視のアナザイル学院は、己の腕で身を立てたいという願望を持つ男子生徒が大半を占め、女子生徒の数は圧倒的に少ない。

運よく女子生徒の名前を引き当てさえすれば、その日は常にペアで行動するため二人っきり。それに不慣れな一次生をリードするのだから、自身のいいところを見せることもできる。

つまりはそういうことだ。自分達はまだ十八であり、色恋の感心が強いのもわからなくもない。それに、このオリエンテーリングを通して実際恋仲になったペアも多く、オリエンテーリングそのものよりも、それを目的にしている輩は多い。大変嘆かわしいことではあるが。

「スムーズに進めるため、籤を引いた者は離れてから確認するように！　その場では決して開くなよ！」

教師の釘刺しが効いたのか、列はどんどん進んでいく。食堂の隅には、既に引き終わった生徒が籤を開いていた。頭を抱えて落ち込んでいるのは、外れを引いた生徒だろう。三次生とペアを組むことに気後れする一次生は少なくはなく、どうしても人数的に三次生の方が多くなってしまふのだ。

反対に頭に花を咲かせたように狂喜乱舞しているのは、女子生徒の名前が当たったに違いない。なんともわかりやすい反応に、思わず溜め息が漏れた。

「羨ましいからとじっと見てやるな。お前にその気がなくとも、相手はお前に睨まれると勘違いして竦んでしまう。せっかく喜んでいるところに、水を差したくはないだろう？」

「……お前、本当に一言二言余計だな、ネストラート」

茶々を入れてくる友人に、嫌味を込めて普段は呼ばない長い名前を呼んだ。自分の前に並ぶネストラートは、高い位置で結い上げている紫がかかった黒髪を、これみよがしに揺らしながらこちらを振り向き、楽しげに闇色の瞳を細め

て口の端を上げる。

「羨ましいと思っているのは本当だろう？ 彼女（・・・）の名前を引くことができたなら——と思っていないとは言わせないぞ、ギラン」

「うぐ……」

ネストラートが指摘したことは、友人達の話に乗れなかった理由そのものだった。

オリエンテーリングは、数多の妖魔が潜む樹海の中で行われる。自分の身を守れるのは自分だけ。己の力量や判断力、適応力だけでなく、一次生を導く指導力も試される。いつもの自分ならば、腕試しが出来るとはりきっていたはずだ。

いや、はりきっていないわけではない。だがそれ以上に、ある人物の存在が脳裏を掠めて離れないだけだ。

オリエンテーリングそのものよりも、女子生徒と組むことを望む同級生のことを、ギランにあだこうだという資格はない。ギランもまた、それを望んでいないと言えは嘘になってしまうから。

「しかし彼らと違って、お前は見目のいい女子なら誰でもというわけではない分、引き当てるのが厳しいな。仕方のないことではあるが」

「……」

一学年は大体百人前後。今年は何人参加したかは知らないが、その中からたった一人を引き当てる確率など、途方もない数字だろう。

「期待するだけ無駄だってことはわかってる……」

しかしそれでも心の奥底で、万が一という可能性を期待している自分がある。そのことに気をとられていたため、先ほどの友人達の言葉に反応するのが遅れたのだ。

「そうだな。万が一を期待するよりも、まずお前は知り合いになるところから始めなければなるまい。ヒリングから聞いたぞ、知り合う絶好のチャンス逃したとな」

「げ……」

ヒリングの奴余計なことを、よりもよって一番聞かれない奴に話すとは。先ほど詰め寄ってきたふわりとした茶色の髪を持つ友人に舌打したくなる。同時に数日前の苦い記憶が様々と甦り、ギランはげんなりとした。あの日のことを思い出すたび、自分の情けなさを痛感する。

あの日は野外授業の最中、担当の教師から使った道具を片付けてこいと命じられ、片付け終わった後のことだった。授業が終わっても自己鍛錬を続けようと思い戻ろうとしたところ、階段の上から突然彼女が降ってきた。不意をつかれてしまったため、彼女を上手く受け止めることができず、彼女は打ち所が悪くて気絶してしまった。

医務室へ連れて行き、偶々当番をしていたヒリングから大丈夫だというお墨付きをもらっても、目を覚ますまでギランはずっと彼女のことを心配していた。なのに、目を覚ました途端体中がブワッと熱くなり、心臓がドクドクと大きく鳴り始める。頭が真っ白になったかと思ったら、身体は勝手にその場から逃げるように隣のベットへ飛び乗ってカーテンを開けていた。自分でも本当に、情けないと思う。

「シャキッとしろ。でないと、周りの者達が苛立っていると勘違いして怯えてしまう」

「お前は本当に一言余計だな」

そんなこんなで列は進み、ついに籬の入った箱がギランの目の前にやってきた。ポツカリと開いている大きめの穴に手を入ると、まだたくさん残った紙の感触がある。こんなに多ければ迷うことに何の意味もないなど、特に選ぶことなく適当な一枚を引いた。箱を持つ教師に引いたことを確認させ、その場を離れる。

丁度一箇所に集まっていた友人達の元へネストラートと共に行くと、ズーンと背中を丸めて落ち込んでいるつり目の友人と寡黙な友人、そしてその二人を何とか励まそうとしているヒリングがいる。

「ふ、二人とも……外れ籤を引いたからってそんな落ち込むこと……」

「うるせー！ 普通に当たりを引いたお前に、俺達の気持ちがわかるかぁ！」

「……」

どうやら落ち込んでいる二人は外れを引いたらしい。外れ籤には名前が記載されておらず、今度のオリエンテーリングに参加することができないことを意味している。ほぼ必ず参加できる昨年度までとは違い、人数の関係上、三次生は出場したくてもできないという事態が発生する。三次生同士ペアを組むことは禁じられているため、外れを引いた時点でオリエンテーリングへの出場権を失ったことと同義になるのだ。

「お、ギランにネスト！ お前達は当たったか？」

唯一底抜けに明るいセズが、ギラン達がやってきたことに気づいて大きく手を振った。彼の手には、くしゃくしゃになって可哀想なことになっている籤が握られている。

「これから確認するところだ。外れでさえなければ、私は誰であろうと構わないがな、ギランと違って」

「……俺だって別に誰であろうと構いはしねえよ」

彼女であつたらいいなと思うだけであり、彼女以外は嫌だというわけではない。

「そういえばオリエンテーリングに参加するらしいね、彼女」

「彼女、の名前が出るといいな！」

わざわざ『彼女』の部分を強調するヒリングとセズに、ギランは顔を引きつらせる。

「お前ら……あの大量の籤の中から一人を引き当てるって、どんだけ確率低いと思ってんだ……」

呆れ混じりに三角に折られている籤を見据えた。指で軽く開くだけ、それだけだというのに、まるで指が針金になってしまったかのように動かない。

「誰であろうと構わないのではなかったのか？ 私はもう開けたぞ」

「う、うるせえ！」

口の端をつり上げてニヤニヤとした笑みを浮かべるネストラート。どうやら当たりを引いたらしい。つり目の友人が羨まげな視線をネストラートに向けている。

「開けないならわたしが開けてやろう。えい！」

「なっ！ セズ、何をしやがる！」

ギランの手にあった籤を、パッとセズが奪い取った。咄嗟に取り返そうとセズの腕を掴むが、それよりも彼が籤を開く方が早かった。

「あ」

籤の中身を見たセズは、たった一言を呟いただけでピタリと動かなくなった。その隙に彼の手から籤を取り返し、意を決して中を見る。

途端、ギランの身体がピシリと固まった。

「何だ、別に彼女の名前ではなかったからと、そこまで落ち込むことは――」

「いや、違うんだネスト。その逆その逆。ほら、皆も見てみろ」

固まったギランの手から再びセズに籤を掠め取られ、ネストラートだけでなく他の友人達までもが揃って籤に書かれた名前を凝視した。僅かに間を置いたあと、五つの視線が一斉にギランの方へと向く。セズがギランの手にそっと籤を戻した。

「やったじゃないか、ギラン！ この間の絶好のチャンスをふいにしてしまった君へのまたとないチャンスが、再び巡ってくるなんて……！」

「くっそおおお！ お前俺の運まで吸い取ったんじゃねえだろうな!? これはいくらなんでも都合がよすぎるだろ！ 羨ましい奴め！」

「よかったなギラン！ 何だかわたしまで嬉しくなってきたぞ！」

「おめでとう……」

「こんな幸運は二度とないだろうな。――今度こそはしくじってくれるなよ、ギラン」

途端、爆発するように激励してくれる友人達。

しかし、その言葉はギランの耳に入らない。ギランはレイム・リリアーゼと書かれた籤を持ったまま、暫くの間微動だにすることなく、固まっていた。

午前の講座終了後、レイムは早速担当の講師にオリエンテーリングに参加する旨を伝えた。思い立ったが吉日。むしろ、魔法銃（ブラスター）以外の興味のないことはすぐに忘れてしまうレイムは、このことを忘れないうちに伝えなければならなかった。もし忘れてしまったら、トーティリアに「やはりわたくしに負けることが怖くて」云々と延々聞かされるだろう。それだけは絶対に阻止しなければならない。

講師によると、一次生は三次生とペアを組むのは、まだ入学したばかりで学院に漸く慣れてきたばかりの一次生と、卒業を控えた経験豊富な三次生との戦力差を埋めるためらしい。明後日三次生の参加者が集まり、参加する一次生の名前が入ったくじを引き、ペアを決めるのだそう。そしてその翌日以降、三次生は引いた名前の一次生の元へ赴き、ペアが判明する。つまり、最低でも明々後日までいつもと変わらない生活、ということ。それを聞いて思わずレイムは脱力した。打倒トーティリアと燃えていた闘志が、みるみるうちに萎んでいく。

昼食後、教室に戻ったレイムは机の上で項垂れていた。トーティリアへの対抗意識が治まるにつれて、何故オリエンテーリングに出ると決めてしまったのだろうか、後悔の念が押し寄せる。

「あー……面倒くさいなあ……知らない人と協力しなきゃいけないなんて……」

しかも相手は三次生、絶対に礼儀を欠いてはならない相手だ。しかし当然ながら、レイムに三次生の知り合いなんていない。有名と言われる先輩すら、名前を知らなかったほどだ。

「そういえば……昨日医務室にいた人、三次生だったっけ……名前なんていったかなあ」

確か治癒術科に所属していると言っていたのを覚えている。治癒術科はアナザイル学院では珍しく戦闘に特化していない学科だが、校風柄生徒の生傷は絶えず、治癒術を試すには絶好の場なのだ。まさしく『実戦』重視のアナザイル学院と言える。

「優しそうな顔してたしなあ……ああでもわたし後衛向きだから、前線に立てる人がペアでないと厳しそう……」

魔法銃（ブラスター）は離れた位置から狙撃できる優れた武器。だが、その性質上、間近に接近されることに銃士は慣れておらず、接近戦は不向き。だから後方から援護する形が一番望ましい戦い方なのだ。

そしてくじ引きは、そういった前衛向き、後衛向きといった学科の考慮は一切ないらしい。つまり、後衛同士がペアになることも充分ありえるのだ。「どんな相手がペアになっても対処できるように」という狙いもあるらしい。しかし、実際後衛同士がペアになったら、優勝はほぼ無理だろう。その点、剣術科に身をおくトーティリアは有利だ。前衛同士は後衛同士に比べ問題は全くないし、後衛とペアなら援護してもらえる。彼女に勝つことを考えると、レイムのペアは前衛が望ましい。だが、そう都合よく考えて後衛のペアだった場合、激しく落ち込む自信があるから楽観視はしたくない。

そんなことを思いながら日々は過ぎ、あっという間に五日が経過した。

レイムは昼食後、学院にある中庭で備え付けのベンチの背凭れにもたれかかった。ペア決めのくじ引きは一昨昨日に行われ、一昨日の昼休みは、ペアになった生徒達が共に食事をしている光景がそこらじゅうにあった。レイムもその日に声をかけられると思っていたのだが、その日、三次生に声をかけられることなく終わる。この日はたまたま相手側に用事があったのだと思ったが、その次の日、昨日も声をかけられない。

（周りにはもう皆ペアが誰かわかってるみたいだし……もしかして誰かわかってないのって、わたしだけ……？）

周囲にはちらほらと二人で話し合う生徒達の姿が見える。レイムは大きく嘆息した。

トーティリアも、一昨日にはペアが誰か決まっていたようだ。昨日の昼前、休講のため好きなだけ睡眠をとってスッキリとしたレイムは、のんびりと身支度を整え（時間があれば自分でもやる。ただ朝早く起きてまでするのが億劫なだけ）、朝食を兼ねた昼食を食べるために食堂へ向かったときのことだった。いつものようにぼったりとトーティリアと鉢合わせ、条件反射で身構えるレイムとは裏腹に、彼女はどこか虚ろな目をしていた。

「ど、どうしたの……？」

自信に満ちた覇気を感じさせないトーティリアを、レイムは初めて見た。流石に心配になって恐る恐る声をかけるが、彼女はハハハと乾いた笑い声をあげるだけ。

「……すぐにわかるさ」

「へ？」

二人並んで男女共通スペースまでやってくると、それ（・・・）はやってきた。ドドドドドというまるで大型の妖魔が近づいてきているような走る音と共に。何!? と音に驚愕したレイムは、その音に顔を強張らせたトーティリアに気づくことが出来なかった。

「遅いぞトート！」

やってきたのは妖魔ではなかった。当然といえば当然だ。学院は妖魔が入れないよう、結界が張られているのだから。そこに立っているのは三次生だった。シャツのボタンやタイを緩め、指定のジャケットを羽織らず、長袖のシャツをたくましい二の腕が見えるまで捲くりあげている。青みがかった短い黒髪は手入れが全くされておらず、レイム以上にごごわだ。だらしのない格好のはずなのにそう感じないのは、その人物の浮かべる底抜けに明るい笑みのせいだろうか。どんぐりのような丸い形をした空色の瞳は、どこか愛嬌がある。

「ラ、ラッカーノ先輩……！」

「わたしのことはセズでいいと言っただろ、トート」

「わたくしの名はトーティリアですと、何度も申し上げたはずですが……」

トーティリアが両手をぎゅっと握り締めながらわなわなと震えた。生真面目な彼女のことだ、勝手に略された名前以外にも髪や服装とあれこれ注意したいのだろう。だが、何度も言ってもトート呼びを訂正できていないことを考えると、そこらへんは諦めたのかもしれない。

「だってお前の名前は長いじゃないか。トートの方が呼びやすくいいだろ？」

「だからと、人の名前を変な風に変えて呼ばないで下さい！」

「細かいことは気にするな！」

反論をたったそれだけの言葉で一蹴され、トーティリアはがくりと肩を落とした。自身をセズと呼んだ青年は、腰に手を当てハハハハハと豪快に笑う。

「よし、これからオリエンテーリングに向けて鍛錬するぞ！ ついてこいトート！」

「え、あ、あの、わたくし昼食がまだ……！」

セズはトーティリアの腕を掴み、来たときと同じようにドドドドドと激しい音を立てながら去って行く。

「ハッハッハッハ！」

「キャアアアアアアアア！」

セズの笑い声と、トーティリアの悲鳴が暫く響き渡った。

(あ、あのトーティリアを参らせる人間がいるなんて……)

トーティリアはその日から元気がない。というのも、セズという三次生がオリエンテーリングで優勝するべく、それまでに身体を鍛えようと鍛錬に付き合わされているらしい(日々の鍛錬は大事だとは思いますが、オリエンテーリングまでに筋力アップが出来るとはレイムは思えない)。いや、鍛錬に付き合うのは別に構わないらしいが、問題はあのセズという人間の、人間離れした体力にあった。

まるで硬い道の上を走るように道なき道をつき進み、鉢合わせる妖魔をかたっぱしから殴り倒して(セズは格闘術科に所属しているらしい、得物はナックル)、そしてまたひたすら進む、進む、進む。休憩はあつてないようなもので、戻ってきたトーティリアは心身共にボロボロで、医務室で寝込むことになったという。

その話しを偶々耳にしたとき、レイムの背筋に悪寒が走った。トーティリアは口を開けば自分がいかに素晴らしい人間なのかを長々と語る、自分大好きなナルシストだが、自分で優秀というだけはあり、実力は確かだ。事実、以前剣術科に所属しているであろう男子生徒が、彼女に負けて悔しがっている姿を何度か見かけたことがある。

ここは実戦重視のアナザイル学院。容易く女生徒に負けるような軟弱男はここにいない。つまり、トーティリアが剣で男を負かしたということは、まさしく本人の実力以外のなにものでもないということ。それを知ったときは、口だけではないのだと感心したものだ。

男に勝つにはそれ相応の鍛錬が必要だろう。そんなことをしている素振りはないが、積まなければ同じく鍛錬を欠かさない男達に勝てるわけがない。

そんなトーティリアがへばるような体力の持ち主――セズ・ラッカーノ。引きずられるように彼に連れて行かれた姿は未だに鮮明に焼きついている。自分のペアが彼のようなタイプの間人だったらどうしよう。レイムはぞぞぞと震える身体を落ち着けるため、腕を交差させながら摩った。

「……おい」

「にゅ？」

突如、低い声とピリリとしたどこか威圧感のある空気に振り向くと、レイムはピシリと固まった。

一人の体格のいい生徒が、ヌンとレイムの真横に立っている。タイの色は赤。上背のある背丈に広い肩幅。セズと違いしっかりと着こなされた制服の上からでもわかる、引き締まった身体。見るからに前衛を務めているらしき三次生が、眉間に皺を寄せながら漆黒の瞳を細めてレイムを見下ろしていた。

「レイム・リリアーゼだな？」

「ひっ……」

低く凄みのある声に、レイムは肩を震わせる。同時に、脳裏にある出来事が甦った。階段から飛び降りるレイムの真下にいた一人の生徒。確かその人物は――こんな顔をしてはいなかったか。それを思い出した途端、レイムの全身から血の気が引いた。そうだ、彼はあの日レイムがぶつかってしまった人物。そしてわざわざ医務室まで連れていってくれた人。名は確か、――ギラン・フォトグリス。

そこまで思い出すと今度はまた別の記憶が甦る。それは女子生徒達が交わしていた他愛ない会話。ペアとなる三次生は誰がいいかと話し合っていた中に出てきた一人の人物。周りから『鬼軍曹』と呼ばれ、できることならペアを避けたい人物として挙げられた名前も確か、ギラン。

二つの記憶が合わさり、レイムは今まですっかり忘れていた大事なことを思い出す。彼にぶつかってしまった謝罪と、

医務室まで運んでくれた礼を言っていないことを。背中からガラガラと冷たい汗が流れた。身体が戦慄く。

「ご、ごめんなさあああああああああああい！」

「!？」

ギランの人となりは知らないが、『鬼軍曹』の意味ならわかる。自他共に厳しく接する者の喩えだ。そんな人物ならば、ぶつかったくせに謝罪にこなかったレイムを「礼儀がなっていない」と判断するだろう。――恐らく彼はそれを咎めにきたのだ。

「ごめんなさあああい！ ごめんなさい！ ぶつかってしまってすみませんでした！ 謝るの忘れてて本当にごめんなさい！ もう二度と階段から飛び降りたりしません！ だからどうか許してください！」

レイムは椅子から飛び降り、彼に向かってひたすら平身低頭して謝罪の言葉を口にする。ざわりと周りがざわめく声がするが、恐怖に慄くレイムの耳には入らない。

「おい、俺は――」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいい！」

「だからな、俺は別に――」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

「……人の話を聞け！」

頭上から怒鳴り声が降ってきて、レイムは身を更に硬くする。何故こんな大事なことを自分は忘れてしまったのだろう。答えは直ぐに出た、魔法銃（ブラスター）の試し撃ちで頭がいっぱいになっていたからだ。

魔法銃（ブラスター）のことになると、他のことがすっかり頭から抜け落ちる。今まで気にしなかったその悪癖を、レイムは初めて恨んだ。オリエンテーリングの話を聞いた日に謝りに言っていたのなら、こんなことにはならなかったはず。

「……っ、だから、謝らんでいい！ 俺は別に怒ってなどない！」

「うにゅ……」

レイムは恐る恐る顔をあげた。蹲っている身体を起こすと、ハァと大きく息をつく音が聞こえた。ギランが片手で顔を覆っている。

「今日は別にあの日のことを咎めにきたんじゃない。……お前に話があってきた」

「わ、わたしに話……？」

「これだ」

そういつて彼から小さな紙きれを差し出される。おずおずと受け取ってその紙を見ると、そこには名前が記載されていた。レイム・リリアーゼという自分の名が。これは、もしや――

「オ、オリエンテーリングのペア決めの籤……ですか？」

「ああ」

「……つまり、先輩がわたしのペア」

「……そうだ」

ズガンと頭に衝撃が走った。オリエンテーリングのあるその日一日、『鬼軍曹』と呼ばれる怖い先輩と、行動を共にし

なければならないという事実。食堂で交わされていた「オリエンテーリングどころじゃない」という言葉を思い出し、レイムは心の中でそれに思い切り頷く。

「.....オリエンテーリングまであと五日だ。それまでに弾丸を十分に用意しておけ。途中での補充はできないからな」
「は、はい！」

「.....話は以上だ」

くるりとギランが背を向け、レイムの元から立ち去っていく。だんだんと姿が見えなくなった後、レイムはベンチに上半身をべったりと預けた。

「こ、怖かったよう.....」

身体がどこか軽くなったような錯覚を覚える。三次生ということは、レイムとは二つしか歳は離れていないはずなのに、何故あんなにも重苦しい空気を纏っているのだろう。肉体派の三次生は皆あなのだろうか。いや、格闘術科に所属しているセズも同じく大柄だったが、あっけらかんとしていた。つまりギランだけがあなのだろう。

(オ、オリエンテーリング辞退したくなってきた.....)

切れ長の漆黒の瞳は眼光が鋭く、じろりと睨まれてしまったら、蛇に睨まれたカエルのように動けなくなってしまうだろう。

自身の運のなさを嘆きながら、レイムはのそのそと身体を起こし、午後の講義へ行くべくその場を後にした。

本日の授業が終了し、所持していた武器を魔法指輪（マジックリング）の中へとしまう。かわりに中からタオルを取り出し、汗を拭いた。照りつける日差しは日増しに勢いを増し、夏の始まりを予感させる。

脱いでいたジャケットを手に取るが、袖を通すべきか悩んだ。大分気温が高くなっている昨今、更に動いて汗をかいて熱くなっている身体にジャケットは辛い。だが、制服を乱して着るのには抵抗がある。

結局ジャケットを着るのは諦め、武器と同じく魔法指輪（マジックリング）の中へとしまった。

一旦寮へと戻り、汗を流そう。汗ばんだ背中にシャツが張り付いている状態のままいるのは好ましくない。

寮へ向かう途中、見慣れた背中が視界に入った。特徴的な赤みのある黒髪に肘までまくられたシャツ、脱いだジャケットをしまうことなく腕に抱えている。同じく授業を終えて寮に向かっている途中なのだろうが、歩く姿にいつもの力強さがなく、背中にズーンと影を背負っていて生気がない。

ネストラートはまたかと嘆息し、前を歩く友人、ギランに向かって話しかけた。

「ギラン。今日もまたフォックステイルに声をかけることが出来なかったからとて、そこまで落ち込むことはないだろう。今更だ」

「……ネスト」

ゆらりとギランがこちらを振り向く。目許は影になって暗いのに、漆黒の双眸はキラリと鈍い光を放っている。知らない人間が見たならば、怒りを買って睨まれたと恐怖に身を竦めるだろうな、とネストラートは頭の片隅で思いつつ、慰めるためにポンとギランの肩に手を置いた。

そう、彼は落ち込んでいる。傍目には不機嫌で苛々しているようにしか見えなくても、親しい付き合いをしているネストラートには、彼が今とてつもなく落ち込んでいるとわかっている。

「オリエンテーリングまであと五日ある。フォックステイルは個人行動を好むから、機会はいくらでも――」

「……行った」

「うん？」

「言いに行った。昼休み、俺がペアになったと」

「ほう」

一昨昨日、偶然にも意中の相手の名前を引き当てたギランはとても運がいいと思ったのはほんの束の間。今まで一度も話かけられずにいた男が、果たして一日中一緒にいることができるのか。それ以前に、彼女に自分がペアであると告げることができるのか。

それは自分達以上に本人が一番身に染みてよくわかっていたらしい。

一昨日、皆がペアの元へ向かったのに対し、ギランはいつまでもまごついていて、一向に彼女のところへ行こうとせず。結局その日は仲間内で唯一ペアになった相手に話かけることができなくて、今のように激しく落ち込んでいた。

仕方なく仲間達全員で男のくせにうじうじするな、まだ時間はあるのだからしっかりしろ、とか何とか言いながら叱咤激励し、奮い立たせるように仕向けた。しかし翌日、また声をかけられなかったと、同じように落ち込む姿。これはもう自分達があれこれ言って解決することではない、とネストラートは判断した。幸い時間はまだあるし、焦るのは期間間際になってからでも遅くはない。だから長い目で見守ろうと決めたのが昨夜のこと。

てっきりギリギリまで言い出すのにかかるかと思いきや、今日伝えることができたとは大きな一歩だ。

だが、それなのに落ち込んでいるということは――もしま。

「全力で怯えられた……こっちは普通に声をかけたただけだというのに、土下座して謝られるって……」

「……それは」

近くの壁に手をついて、肩をがくりと落とす姿は哀愁が漂っている。流石に同情を禁じえない。想いを寄せる相手に一

方的に怖がられて、落ち込まないわけがなかった。

「……まあ、そこまで怯えられたのであれば、それ以上嫌われるということはないだろう。だからオリエンテーリング当日に、少しでも好感度を上げることを考えてみてはどうだ」

ギランはよく性格を誤解される。つりあがった漆黒の瞳は鋭く細く、有体（ありてい）に言えば目つきが悪い。笑うことは少なく、そのせいで普通の顔をしていても怒っているように見えるときがある。そして、日々欠かさない鍛錬のおかげで手に入れたどっしりとした肉体も相俟って、初見では威圧感を感じてしまうのだ。

更に、ギランの口調は穏やかではなく、丁寧でもない。また努力することを美德としているため、努力をせずのうのうとしている者に対していい感情を持たない。それを表面に出さなければいいのだが、生来正直な男なのだろう。すぐに表情にそれが現れてしまい、相手は睨まれたと勘違いしてしまう。

そんなことが多々あって、ギランは次第に畏れられるようになった。

人の噂というものは、尾鱈がつきものだ。一次生のときは煩い二次生をこてんぱんにのしたとか（実際は相手がつまづいて派手に転んだだけ）、二次生のときは態度が気に食わない一次生に長時間説教したのち、ボロボロになるまで森の中を延々走らせたとか（実際は注意しただけでそれを逆恨みし、嫌がらせをしようと鍛錬にこっそりついてきて勝手にボロボロになった）

そしてそんな噂が広まっても、噂されている本人が噂を否定しない、いや、訂正しようとしませんが、一人歩きしていく理由にもなっている。本人曰く、自分で訂正して回る暇があったら鍛錬に時間を費やしたい、ということらしい。周りにどう思われても関係ないと言わんばかりの態度は潔くもあり、彼らしいと仲間達は頷きあった。

しかし三次生になってから数日後、ギランは自身の持つイメージを後悔することになる。

今まで色恋沙汰にとことん無縁だったはずのギランが、まさかの一目惚れ。

いつもの鍛錬帰りに、偶然見かけた一次生の少女に思わず目が奪われた。それ以来彼女のことが頭からはなれず、気づけば視線は彼女のことを探してしまっていることに戸惑いを覚えている。

そんな相談を受けたのは、普段と変わらない日のお馴染みのメンバーで、夕食を食べているときだった。照れるでもなく、ただ理解できないといった様子で淡々と告げるギランに、ネストラートを含めた友人達の食事をする手がピタリと止まる。朴念仁であるギランは、自分が彼女に一目惚れしたのだということに気づいていなかった。

暇さえあれば鍛錬をしているギランが、ここ最近はどこか心そこにあらずと呆然としていることがあり、彼に何かあったのではないかと疑問に思っていた。だが、それがまさか恋情からくるもののだとは思ってもよらず、ネストラートは切れ長の瞳を大きく見開いてギランを凝視する。他の友人達も、全く同じ反応をしていた。セズに至っては、口まであぐりと大きく開いている。

「……それは、恋では……ないのか」

誰もが閉口する中で口を開いたのは、一番無口な友人だった。その言葉に瞳孔を開きながら驚愕するギラン。そして火蓋を切ったかのようにええええと叫びだす友人達。

「まじで!? お前が!?!」

「女の子とか、一番全然興味ないのってギランだったよな!」

「て、ててて天変地異の前触れじゃ、な、ないよね!?!」

ネストラートも仲間達と同じく大声で叫びそうになり、現在食事中だということをふと思い出して思いとどまる。気持ちを落ち着けて、騒ぐ友人達を止めるべく口を開いた。

「流石にそれは言いすぎではないか、ヒリング。気持ちはわからないでもないが。お前達も大声をあげるな、食事中だ。皆に迷惑がかかる」

「ご、ごめん……で、でもそれくらい信じられなくて……」

「なあ、ギランが好きになった子ってどんな子——うご!？」

セズが空色の瞳を爛々と輝かせながらギランをまっすぐ見ようとして、隣に座る寡黙な友人に頭を押さえつけられる。ネストラートが注意をしたのにもかかわらず、周囲に聞こえるくらい大きな声をあげたからだ。細かいことを気にしない大雑把な性根に、快活な性格も相俟って普段から声が大きいセズに、小声で話せという方が無理であろう。だから無理やり黙らせた友人にグ、と親指を立てると、彼もまた同じように親指を立てて返してくれた。

「それで、ギラン。お前が一目惚れした相手はどんな子なんだ？」

まるで金魚のように口をパクパクとさせていたギランに尋ねると、彼は自身の持つ赤みのある黒髪をがしがしと掻きながら、ポツリポツリと身体的特徴を教えてくれた。名前は知らなかったようだが、その少女の持つ特徴はたった一人にしか当てはまらなかったため、すぐに特定できる。

「フォックステイルではないか。お前が面食いだとは知らなかったな」

脳裏に浮かぶのは、毛量の多い赤みある黄色の髪を首元で結い下げている少女。それがきつねの尾を連想させるため、学院内の生徒達の間で彼女はこう呼ばれている。

彼女はまだ幼さが残りつつも、大きな紅い瞳はぱっちりとしていて、感情豊かな可愛らしい少女だ。あくまで、見た目は。

「あー、聞いたことあるなその名前。確か魔法銃（ブラスター）科の子だったよな。魔法銃（ブラスター）が大好きで、自分の魔法銃（ブラスター）に名前をつけて人間みたいに扱ってるっていう、変わった女の子だっけか」

「しかし変な名前だな、きつねのしっぽって！」

ギラン程では無いが同じく目つきが鋭い友人の言葉に、寡黙な友人の手を払いのけたセズが続ける。相変わらず声量は大きい。

「それは本名じゃなくてあだ名みたいなものだよ。名前は確か——」

「レイム・リリアーゼ……魔法銃（ブラスター）科に所属する一次生だ……」

ヒリングと寡黙な友人が、セズの素朴な疑問に答える。

レイム・リリアーゼは、割と名前が知られている一次生だ。一番の理由は、フォックステイルという名前の元となっている、毛量の多い赤みのある長い黄色の髪にある。

アナザイル学院が所属する国、ランドル共和国は、大陸から離れた位置にある島国。この国の人間の髪は一般的に黒か茶色の髪をしている。しかし時々、赤や黄色だけでなく、青や緑といった、本来ならありえない色彩を持った子供が生まれることがあった。

その子供には共通点がある。それは、普通の人間の何十倍もの魔力を持っていること。

小さな身体に膨大な魔力を持って生まれるために、生来持つはずだった色彩が変化した。その結果、髪の色が通常ではありえない色となるのである。

かつてはそんな子供達は災厄を呼ぶのではないかと怖れられ、迫害されることもあったという。だが魔術が一般にも普及している現代では、膨大な魔力を持つ少年少女達は歓迎される存在へと変わった。魔力を動力源とする道具は魔法指輪（マジックリング）だけでなく、現在は多数存在する。あまりある魔力をエネルギーとして提供する者もいれば、妖魔を退治するための新しい魔術の開発をした者もいる。昨今の文明の発展は、そんな少年少女達の活躍があってこそのものであった。

「あれ、そのあだ名がしっぽのやつは『色憑き』なんだろう？　なのに何故魔力をあまり必要としない魔法銃（ブラスター）科に所属しているんだ？」

膨大な魔力を持って生まれる子供は、鮮やかな色彩を持っているため『色憑き』と呼ばれている。レイムの赤みある黄色の髪は、まさしく『色憑き』である証拠だ。

なのにレイムは魔術に全く関心がなく、魔法銃（ブラスター）に情熱を注いでいる変わり者。無骨な魔法銃（ブラスター）に似合わぬ女性の名前をつけ、恍惚の眼差しで愛でる姿は正直近寄り難い。それが彼女の名前を更に広める理由となっている。

「その理由はわかってはいない。本人は魔法銃（ブラスター）が好きだから魔法銃（ブラスター）科に入って何が悪いとしか言わないからな。――『色憑き』として、いろいろ事情があるのだろう」

本人がそれしか言わない以上、興味本位で彼女の事情に口を挟むのはただの無作法だ。気にならないわけではないが、自分達がつっこむべきところとそうでないところの分別はつく。

「俺、前にその子魔法銃（ブラスター）にしか興味ねえって聞いたんだけどよ……そこらへんどうなんだ？　ギランの野郎に望みはあるのか？」

「私もフォックステイルを詳しく知っているわけではないが……難しいのは確かだな」

彼女はギランが一目惚れしたとおり、見た目は悪くない。しかし通り名が広まっているにも関わらず、魔法銃（ブラスター）以外の好物の話聞いたことがなかった。

つまりは、本当にそれしか興味をそそる対象がないのだろう。そうでなければ、いくら色憑きだからと短期間でここまで通り名が広まるわけがない。

「へー、人間に興味がないのか。なら無理なんじゃないか？」

「まあ、すっぱり諦めるのが一番楽な道だということはまず間違いない。だが――」

セズの言葉に頷きつつ、黙ったまま俯き続けてるギランを見た。

一に鍛錬二に鍛錬、三四も鍛錬五も鍛錬という脳筋男が、漸く目覚めた恋。普段それを揶揄して楽しむことはよくあるが、不器用なこの友人の幸せを、願っていないわけではない。その思いは、ここにいる残りの四人の仲間達も同じだろう。

――できることなら、叶えてやりたいと思う。

「もしも仮にだ。今後フォックステイルの傍らに他の男が寄り添うようになったとき、お前は心穏やかに見ていられる自信はあるか？　彼女が幸せならば、それでいいと」

ギランにそう問いかけると、彼は暫く経ってから、首を横へ振った。それを見てネストラートは、フ、と口角を上げて満足げに微笑む。

「ならば私は協力しよう。手始めに、フォックステイルについて調べなければな。相手を攻略するにはまず、相手を知らなければ何も始まるまい」

恐らく彼女は、ギランの存在すら認知していないだろう。そんな状態で想いを告げたとしても、魔法銃（ブラスター）にしか興味がないと一蹴される可能性が高い。まずは人となりや能力を充分調べた上で、知り合いになるところからはじめる。想いを告げるのはそれからでも遅くはない。

「ならわたしも協力するぞ！」

「僕も応援するよ、ギラン」

「俺も応援してやるよ。ま、お前と同じく色恋に縁がねえから協力はできねーがな」

「.....私も、できる限り協力する」

ネストラートに続き、友人達もそれぞれ笑みをギランに向ける。ギランは友人達の言葉を受け照れくさくなったのか、小さな声で「悪いな」と呟いた。

そして次の日から、ネストラートはレイムの調査を行った。彼女は目立つ存在のため、調査事態は簡単だった。好きなのは魔法銃（ブラスター）だけで、人間の事などどうでもいいと思っているのかと思っていたが、調べるうちに様々な面が見えてきた。

自分から関わろうとはしないだけで、話しかけられたらきちんとした受け答えをする。教師や二次生三次生などの目上の人間には丁寧な言葉を心がけている。など、マイペースなところはあれど、人として至って普通の面が彼女にもあった。確かに人間よりも魔法銃（ブラスター）を優先するきらいはあるが、己に過失があればそれを認め、謝る素直さもある。

特に有名なのが、スウェムフォードのお嬢様とほぼ毎日のように繰り広げられる喧嘩だった。原因は主に、レイムのだらしない身だしなみについて。毛量の多い髪を寝癖のついたまま櫛で梳かすこともなく部屋から出てくるレイムに、それを必死に整えるスウェムフォードのお嬢様。食堂などの男女共通スペースでも、偶にぎゃあぎゃああと叫んでいる姿を、ネストラートも何度か見かけたことがある。

人間に本当に興味がないのなら、係わり合いになりたくないのなら、あんな風に感情的に喧嘩をしたりしないだろう。

つまりレイムは、人との繋がりを煩わしいとは思っていない。だからきっかけさえ掴めれば、彼女と交友関係を築くことはできる。毎日のようにスウェムフォードのお嬢様と激しく喧嘩をしても、なんだかんだでお互い嫌い合っているわけではないことが、なによりの証拠だ。

彼女もまたギランと同じだった。フォックステイルという通り名が一人歩きして、人間に興味がない変わり者だと思われるだけ。

そう判断して、まずは知り合うところから始めようとするが、その「きっかけ」を作るのは容易ではなかった。

レイムは魔法銃（ブラスター）以外の話題に疎く、つまり魔法銃（ブラスター）以外で彼女と関わることは難しい。そして何より、ギランが彼女を前にするといつもの堂々とした態度はどこへやら、激しい挙動不審に陥り、なかなか一歩を踏み出せないでいるのだ。ヒリングから聞いた六日前の絶好の機会も、そのせいで不意にしまったほど。

その挙動不審になる大きな理由は、ギランがもつ一人歩きしてしまった過剰なイメージからくるコンプレックス。鬼だなんだと恐れられている自分が彼女に話しかけたら、怖がられてしまうのではないか。それを恐れるあまり、身体が竦んでしまうらしい。

しかしそれをぐだぐだと悩んでいても、一朝一夕でイメージを変えることなどできはしない。だからオリエンテーリングのペアという最高のきっかけを活かし、漸く声をかけることに成功した――と思ったら、最も怖れていたことが的中してしまった。

だが、ネストラートにとってそれは予想の範疇。レイムは感情の起伏が激しく、多少のことを大袈裟に捉えがちでもある。よくも悪くも自身の感情に素直で、表情が顔に出易い。そして物事を単純に捉えがちだ。

つまり少しでもギランを怖いと思ったら、そのまま一直線にギランは怖いと頭にインプットされる。しかし逆を言えば、少しでも優しいだとか親切だとか、プラスになる印象を与えることができたならば、彼女の思考回路が一転して、ギランの印象がプラスになる可能性は充分高い。

「彼女は単純だ。たとえ第一印象が悪くとも、少しいいところを見せればその評価を変えることができよう。だから落ち込んでないで、どうすれば好印象をもたれるか考えてみる。その方がよっぽど建設的だ」

「……すまん」

「そう思うのならばシャキっとしろ。背筋を伸ばせ。いつも堂々としているお前はどこへいった」

ギランの背中をバシッと叩いて激励すると、暗い雰囲気少し和らぐ。

「フォックステイルは漸くお前の存在を認知した。知り合いになるという段階は、一応クリアしたということだ。ならば、オリエンテーリングまでの残りの時間、彼女に対してどう対応するか、それを考えて今日怖がられたことは忘れる。――正直、同室の奴がじめじめしていると、こちらの気まで滅入ってくるのでな」

「悪かったな……」

軽口を含めながらニヤリと笑ってみせると、顔を引きつらせた顰めツラを返される。それは傍から見たら、鋭く睨みつけているようにしか見えなかった。

(好感を得られるために、まずはその形相を和らげることを第一優先する必要があるそうだな……)

そんなことを考えながらネストラートはギランを伴い、汗を流すべく寮の自室へと向かった。

時間が経つのは早い。どんなに来てほしくないと願っても、時の流れは無情にも過ぎ去っていくばかりだ。

(ついにきちゃったよ……オリエンテーリング……)

まだフラフラする身体を叱咤しながら、レイムは集合場所になっている模擬戦場へと足を運ぶ。

まだ日が完全に昇りきっていない早朝。朝のひんやりとした空気が心地良く、気を抜くと立ったまま眠ってしまいそうだが、今日ばかりはそんなことをしでかすわけにはいかない。

レイムのペアは鬼軍曹と恐れられる三次生、ギラン・フォトグリスなのだから。

少しでも彼の怒りを買わないで済むよう、いつもはぼさぼさなままにしている髪にしっかり櫛を通し、邪魔にならないよう首元で一つに括ってある。ブラウスも真新しい夏用の半袖を、この日のために引っ張り出した。第一ボタンまで閉めた上で、いつもなら適当にしておく学年を表す緑のリボンを、歪んでいないか確かめながら身につける。そしてオリエンテーリングまでの残された期間、レイムは空いた時間を全て薬莢の調合に充て、ひたすら弾を作り続けた。おかげで十分な弾数が魔法指輪（マジックリング）の中にある。準備は万全だ。

(ま、まずは先輩を探さないと……)

模擬戦場は生徒達で溢れている。参加は強制ではないが、アナザイル学術院の一大イベントとして、ほぼ全校生徒が参加しているためだ。こんなに生徒が集まっているところなど、式典や食堂以外でレイムは見たことがない。

「レイム・リリアーゼ」

「！」

名前を呼ばれて心臓が大きく跳ね上がる。身体がかきんと固まりながらそっと振り向くと、レイムは脱力した。てっきりギランに声をかけられたと思ったのに、別の人間がそこにいたから。

「なんだトーティリアかぁ。おどかさないでよ」

「人間きの悪い。わたくしがいつお前をおどかしたというのだ」

常に自慢しているさらさらの黒髪を掻きあげながら、トーティリアは偉そうに胸を逸らす。ペアの三次生の人間離れた体力に振り回されて、ボロボロになっていた姿はそこにはない。いつものトーティリアだった。

「お前もやればできるではないか。これからもわたくしの手を煩わせることなく、自身の身を整える努力を――」

「そりゃあだってペアの先輩を考えたら……流石のわたしも身支度に力をいれるよ……」

トーティリアの長くなりそうな話を途中で遮りながら、レイムは肩を落とした。そんなレイムを見て、トーティリアは訝しげにペアになった相手は誰なのかと聞いてくる。ギランの名をフルネームで言いながら顔をあげると、きょとんとした顔のトーティリアと目が合った。

「何故フォトグリス先輩が相手で不満なのだ。自己鍛錬を怠らず、常に自身の力の向上を目指して邁進している、努力家の素晴らしい先輩ではないか」

「……そうなの？」

ふとレイムは、トーティリアはギランと同じ剣術科だったということを思い出す。学年は違えど、同じ学科の先輩の話は自然と耳に入ってくるのかもしれない。

「トーティリアだって知ってるでしょ？ 先輩が……その……鬼軍曹って呼ばれて怖れられてるって」

「……なんと」

怖れている最もな理由を述べると、トーティリアは赤茶色の瞳を細め、片手を腰に当て、呆れたといわんばかりに嘆息した。

「流れる噂に惑わされ、その人の本質を理解したわけでもないのにただ怖れるとは……まだまだだな、レイム・リリアーゼ」

「はあ!？」

「本当にフォトグリス先輩が恐ろしい方なのか、オリエンテーリング中、自分の目で確かめてみるがいい。さすれば、その恐れが杞憂であることがわかるだろう。――ではわたくしは失礼する」

「あ、ちょっと……！」

言いたいことだけ言って、トーティリアは黒髪をなびかせながら、さっさとどこかへ行ってしまふ。

「あいっかわらず、人の話を聞かないんだから……！」

ベーと彼女が消えた方向へ舌を出す。あんな風を上から目線で物を言うところが、レイムは好きになれない。親が国にたくさん寄付をしている資産家と呼ばれる人間だから、あかも高圧的なのだろうか。

「……ここにいたか」

「！」

背後から聞こえた重低音。今度こそはまさにそうだろう。まるで調子の悪いトリガーのように、ガチガチと身体が固まる。

「お、おはようご、ございます、先輩」

「……ああ」

ズンと立つギランから迸る威圧感に、レイムは竦む身体を叱咤し、急いでペコリと頭を下げる。初めの挨拶は大事だ。

「ほ、本日はよろ、よろしく、お願いします！」

「ああ……こちらこそよろしく頼む」

よし言えた！ と内心ガッツポーズをとると同時に、あーあーという拡声器で大きくなった声が、宙に響きはじめた。

『あー、あー。諸君、聞こえてるかい？ 本日は待ちに待ったアナザイル学院一大イベント、オリエンテーリング当日だよー』

なんとも気が抜けるような間延びした声に、生徒達から苦笑が漏れる。

『今から地図とお昼ご飯とリタイア用の簡易転移装置（ワープシステム）を配布するから、取りにきてねー。皆の分あるから、慌てないように』

「俺が行って来る。お前はここで待っている」

「は、はい！」

いくら気が抜けるような声でも、レイムの気は抜けなかった。ギランの威圧感の方がそれよりも勝っているために。ギランが地図をとりに向かい、レイムはハアと大きく嘆息した。初めからこんな調子で、ほぼ丸一日彼と一緒にいて身がもつだろうか。緊張でがちがちに固まった身体で、外にいる妖魔と戦うことができるのか。

しょんぼりと肩を落とすレイムの脳裏によぎったのは、ハハハハと高笑いするトーティリアの姿。このままの状態でもともと身体を動かすことができなければ、トーティリアに勝つことはできない。そうなれば、彼女はこれみよがしに自分自慢をレイムの前で捲し立て続けるだろう。立て板に水のごとく、勝ち誇った表情と共に。

(そんなの、絶対嫌！)

トーティリアに自分より下だと見られたくない。彼女に勝って二度とそんなことを言わせないために、オリエンテーリングに参加したのではなかったか。いつの間にか萎んでいたレイムの闘志が、メラメラと再び燃え盛る。

「貰ってきたぞ……おい、どうした？」

「先輩！」

「!？」

戻ってきたギランを、レイムはキリっとした眼差しで見上げた。鋭い漆黒の瞳は確かに怖いけれど、今は彼のことを怖がっている場合ではないのだ。トーティリアに勝つためには。

「わたし、どうしても負けたくない相手がいるんです！ だから、一緒に頑張りましょう！」

レイムの勢いに気圧されたのか、ギランは一步後ろに後退し、顔を横に逸らす。しかしスイッチの入ったレイムには、そんなのは些細なことだった。

「打倒、トーティリア！」

えいえいおーと、レイムは一人拳を頭上に突き上げた。

少し離れたところに、赤みのある黄色の長い髪の少女が、空に向かって拳を突き上げているのが見えた。黒や茶色の髪ばかりのなかで一人異彩を放つ色彩を持つ少女は、遠くからでも他の生徒との区別が付きやすい。

先ほどはペアの相手に対する恐怖で意気消沈していたのに、すっかりいつもの気力を取り戻したようだった。自分がわざと挑発するような物言いをしたのが効いたのだろう。単純な性格だが、それが彼女の美点でもあるとトーティリアは思っている。

(あいつが大人しいなどつまらない。これでまたいつも通り張り合えー)

「待たせたな、トート！」

トーティリアの思考を、底抜けに明るい声が遮った。トーティリアのことをトートと呼ぶのは、この学園でたった一人しかいない。

「ラッカーノ先輩……何度言ったら承知してくださるのですか。わたくしはトーティリアです。トートではありません」
「細かいことは気にするな！」
「気にします」

いつものように名前の訂正を試みるが、今回もまた、たった一言でバツサリと切り捨てられて終わる。トーティリアは大きく嘆息した。

セズ・ラッカーノ。トーティリアがオリエンテーリングでペアとなった三次生で、細かいことを気にしない大雑把な性格と、人間離れした体力の持ち主だ。

そんな彼に、トーティリアはペアが決まった日からずっと振り回され続けている。挨拶をした途端に腕を捕まれ、

「鍛錬だ！ 走るぞ！」
「え？」

そして猛スピードでそのまま走り続けた。はじめは何かついていこうとしていたトーティリアだったが、次第に速さについていけなくなり、最終的にはずるずると彼に引きずられていた。セズもセズでボロボロになっていくトーティリアを気にとめず、ひたすら走り続けるものだから、トーティリアは堪ったものではない。

「せ、先輩……ちょ、ちょっと休みまー」
「何だトート？ 聞こえないぞー」
「わたくしはトーティリアです！」

声をかけても、自身の走る音が煩いのか聞き取ってくれなかったり、長いから、それだけの理由で名前を勝手に省略されたり。そして途中、ついにトーティリアは意識を失った。

気づけばそこは医務室だった。それまでの記憶がないことに青ざめると同時に、彼とペアになってオリエンテーリングをやっていけるのかと不安に陥る。

セズは強い。悔しいことだがトーティリアを遙かに上回る運動量を誇り、あまり強くはなかったとはいえ、いとも容易く妖魔を蹴散らす姿はたのもしくみえた。

だが彼には、自分より下の者に合わせるという意思がない。

押し付けてくるわけではないが、自分についてくるのが当たり前だと思っている節がある。だから途中振り返ることはしないし、ずっと前を見続けるのだろう。

前を見続けるという、人となりは尊敬できよう。だが、それについていくとなると話は変わってくる。後ろに構わず走り続けられたら、ついていく方は大変の一言では済まされない。

その次の日。あの様子からして、オリエンテーリングに向けての鍛錬は前日まで続くだろうと予想していた。だからせっかくの休日であるこの日も、セズに引きずられることを考えると気持ちがとても重かった。入学して以来、こんな重苦しい気持ちになったのは初めてで、食堂に向かう途中偶々出合ったレイムでさえも、心配そうな顔をしている程だった。

そして案の定、昼食もまだなのにセズに引っ張られ、鍛錬に駆り出されたトーティリアは、開始後数分でバテ始める。エネルギーの補給なしに、全力疾走を長時間続けられるわけがない。

「一旦休憩するか！」

セズがそう切り出したのは、太陽が真上から少し傾き始めたころだった。既に気を失う寸前だったトーティリアは、まさかの休息に驚くことも安堵することも出来ず、ただペタンとその場に座り込むだけだった。肩を大きく動かして足りなくなった酸素を身体に送り込む。次第に呼吸が安定してくると、トーティリアの眼前にずいっと何かが差し出された。

「これ旨いぞ。食べ」

「え、あ……ありがとうございます……」

セズが差し出してきたのは赤みのある黄色の楕円形の果物だった。おずおずとそれを受け取ると、セズはニカリと笑いながら、別の手に持っていたもう一つの同じ果実にかぶりつく。

「悪かったな、食事前に引っ張り出してしまって」

「え……？」

まさかセズからそんな謝罪を受けるとは思ってもなく、トーティリアは困惑した。セズはトーティリアの向かいにある木に背中を預ける。

「ギランから、剣術科の一年で、一番見込みのある奴だと聞いていたもんでな。そんな相手とペアを組めて嬉しくなって、鍛錬に引っ張り込んでしまった！ 悪いな」

悪いとか言いながらその表情はあっけらかんと明るい。

「ヒリングに昨日注意されてしまったんだ。相手は一年で女の子なんだから加減をしろと。しかしトートの姿を見たら、鍛錬することで頭がいっぱいになってしまって、その言葉をさっきまですっかり忘れてしまっていたんだ」

そんな大事なことを忘れないでほしいとか、だからトートではないとかつっこみたかったが、言葉が喉につまって出てこない。

「後輩と鍛錬すると、皆すぐに根を上げてしまうんだ。もう無理です、ついていけませんって。トートは何だかんだでもう無理だとは言わなかっただろ？ 急にバタリと倒れてしまったのには驚いたが、わたしはそれが嬉しかったぞ」
「……」

トーティリアは前日の鍛錬を振り返り、確かに休憩したいとは言ったが、もう無理だとは口にはしなかった。いや、口にできなかった。己の矜持の高さゆえに。

本当に辛いならば、彼の後輩のように言えばよかったのだ。自分には無理だからもうついていけませんと。だが、無理だなんて言葉はトーティリアが最も嫌う言葉だ。無理と思った時点で諦めるのと同義であり、自身の可能性を潰すことにもなりかねない。だから息が切れ切れになり、意識が朦朧としてもなお、自分には無理ですとは言いたくなかった。無理だと口にした時点で、負けを認めたようなものだから。常にトップでありたい自分が、いくら三次生相手とはいえ、劣っていると思われたくはない。見所があると言われた評価を、所詮こんなものかと下げるわけにはいかない。

「……それは当然ですよ。このトーティリア、剣技の実力は学年トップであり、相応に身体も鍛えているのですから。そう簡単に根をあげたりはいたしません」

口から出たのは、いつもの自分を称える言葉。自然と腹に力が籠る。

負けないための努力ならしてきた。毎朝鐘が鳴るよりも早く起き、剣の素振りと手入れは欠かさない。講座終了後も、

門限まで森の中で基礎鍛錬をしたり、妖魔相手に実戦の訓練をしている。勿論休日もだ。いくら才能に溢れているからといっても、努力を怠っての進歩はないも同じ。

トーティリアはセズから渡された果実を齧った。シャキシャキとした触感と、とれたての瑞々しさが口いっぱい広がる。ほどよい甘味と酸味があってとてもおいしい。

「よし、食べ終わったら再開だ！　ちゃんと味わって食べよ！」

「……はい！」

セズの力の全てが、トーティリアより上だ。それは素直に認める。だが、それで諦めるトーティリアではない。

力が足りないのであれば、鍛えればいい。追いつけないなら、追いつけるようになるまで、努力すればいい。

負けたくないという気力が沸いてきたと同時に脳裏に過ぎったのは、色鮮やかな髪をもつ手のかかる友人の姿。

――向こうはそうは思っていないのだろうが。

「先輩。わたくし、今回のオリエンテーリングで、絶対に負けたくない相手がいるんです。いえ……その人物だけではなく、参加する全ての生徒に負けたくはありません。目指すは優勝――ご指導の方、どうぞよろしくお願い致します」

「勿論だ！　一緒に優勝を目指すぞ！」

セズの間離れした体力についていくのは容易ではなかったが、それは持ち前の負けん気さえあれば何とかなる。むしろ、自分を高めるには絶好の相手だろう。

しかし、セズにはもう一つ問題なことがあった。

彼はよくも悪くも大雑把すぎるのだ。オリエンテーリングは、ただ身体を鍛えれば優勝できるというものではない。チェックポイントでは教師達による課題をこなさなくてはならないし、複数あるチェックポイントをどう効率的にこなしていくかが大事になってくる。知力と体力、そして時の運を味方につけたものが、オリエンテーリングの優勝を飾ることができるのだ。

なのにセズはそれを全く理解していない。そのことを進言しても「何とかなる！」「細かいことは気にするな！」の一言でぱっさりと切られてしまう始末だ。本来ならば、三次生がそこらへんを一次生に指導する立場だというのに、自分達はそれが逆転してしまっていた。

そしてトーティリアは誓った。セズに代わり、自分がしっかりしようと。

「先輩、地図を貸してください」

「おう」

トーティリアはセズから弁当を受け取った後、地図を見せてもらう。彼にコースを決めてもらおうなどは、露にも考えていない。地図をじっとみつめ、まずはチェックポイントの場所を確認する。目測でどこが一番近いか、遠いか、そして最短で全てを回るにはどうすればいいか。

『みなさーん、ちゃんと受け取りましたかー？　数分後に火属性の魔術を空に放つから、それを合図変わりに出発ねー。ずるしちゃだめだよー』

脱力しそうな間延びした声をうまく聞き流しながら、大体の検討をつける。

アナザイル学院は、丁度地図の中央に存在する。そしてぐるっと囲むように樹海があり、東西南北離れた位置にチェックポイントはあった。しかし最終的に目指すゴールの場所が地図には描かれていない。当然だ、チェックポイントで受

ける課題を達成すると、ゴールへのヒントがもらえるのだから。一つにつき一文字ずつ教えてもらい、その文字を並べ替えることによってゴールがどこか判明する。つまり五文字なわけだが、その五文字全てが本物とは限らない。四文字かもしれないし、もしくは二文字で表すかもしれない。

ゴールを探す方法は毎年変わり、去年は五つ目の課題をこなしたチェックポイントにいる教師から場所を教えてもらうという方法だった。一昨年は、暗号がかかれた紙を五つにわけ、それを一つ一つ集めて暗号を解くというもの。他の三次生・二次生から情報収集した成果だ。

謎解きは別段難しいものではない。それよりも、アナザイル学院の周りを一周するように設置されたチェックポイントを、ほぼ一日で全て回りきれるかどうかの方が問題だった。自分達のような前衛を勤める体力のある者ならば、特に大したことはないだろう。が、後衛を務めるあまり体力に自信のないものにとっては、きついものがある。

やはりか、全てのチェックポイントを回ってゴールするペアは、全体の三割程度らしい。途中体力が尽きてギブアップするペアもいれば、大怪我を負い、断念するペアもいる。特に後衛同士のペアはあまり体力がないせいか、ゴールすることはほとんどないとか。特に魔術系に特化したものは机にかじりつくことは多くても、外に出て身体を鍛えるということは少ないため、仕方がないと言えば仕方がないのかもしれない。

セズをちらりと見遣ると、先ほど貰ったばかりの転移装置（ワープシステム）と呼ばれる魔法陣が描かれた球体を、頭上に投げたり指先で回したりして遊んでいる。

転移装置（ワープシステム）とは、その名が示す通り、遠いところへ瞬時に移動するための、転移術の中からあみだされた魔術の一種だ。定められた対になる陣形を別々の場所に描くことで、その魔法陣の上に乗れば一瞬でそちらへと移動することができるすぐれもの。アナザイル学院が人里離れた森の中に建てられているのに、こうして大勢の生徒達が何不自由することなく暮らすことができるのは、この転移術のおかげだ。学院のとある部屋に街へと通じる魔法陣が刻まれていて、そこから物資を調達したり、許可を貰えば生徒達も、街へ繰り出すことができる。

配られた転移装置（ワープシステム）は、これを地面に叩きつけることで特殊なインクで描かれた魔法陣が展開し、一度だけ指定の場所へと移動させてくれるという代物だ。通常転移用魔法陣は地面や床に永遠に消えないように刻まれるため大掛かりなものだが、魔法陣の形さえあっていれば移動自体は可能なのだ。しかし形が僅かでも崩れれば二度と使えなくなってしまったため、一度きりという使い捨ての使用法になってしまうのが玉に瑕。使いどころはしっかりと見極めなければならない。

（まあ、ラッカーノ先輩とならば確実にゴールできるだろうから、これを使うこともないだろうが……）

問題は、彼がトーティリアの進言を聞き入れ、効率的な動き方をしてくれるかだ。彼も優勝を目指しているようではあるし、勝つためなら聞き入れてくれるとは思う。が、何せ相手は細かいことは気にしないが口癖の、大雑把なセズ・ラッカーノ。面倒だから近いところから行けばいいと勝手に走り出す可能性は充分ある。

「……先輩、優勝を目指すためには、効率よく動くことが大事ですよな」

「そうだな！」

「わたくしはまず、一番遠いところにある東南のポイントを先に行くのがいいと思います。体力があるうちに遠いところを先に済まし、その後比較的近場にあるところへ向かうのが最も効率的だと思うのですが、どうでしょう？」

「ふむふむ、なるほどな！」

納得してくれた、と思った刹那、ドオンと宙に鈍い音が響き渡った。オリエンテーリングの開始の合図だ。

「それでは南門へー」

「行くぞトート！」

東西南北にある門に向かって、生徒達は一斉に動き出す。セズが向かったのは――北門だった。北の方角にあるチェックポイントは、学院から一番近い所に位置している。

「先輩！ わたくし達が向かうのは南門です！ 北ではありません！」

「近い方から回れば問題ない！ 細かいことは気にするな！」

「え、ちょ、あなたさっきなるほどって……!？」

トーティリアの言葉に納得してくれたのではなかったのか。慌てて呼び止めるも、いつもの調子でぱっさりと切られてしまう。

「皆に遅れをとるな、トート！」

前方を走るセズの姿がどんどん小さくなっていく。トーティリアはああもうと苛立ちを露に彼を追いかけた。

セズはトーティリアの進言を、全く聞き入れていなかった。

「リリアーゼ、体力に自信はあるか？」

「えっと……魔法銃（ブラスター）科の中では比較的ある方だと思いますけど、前衛の方達に比べたらそうでもないと思います」

地図を貰ってきたギランに突然質問され、戸惑いつつも答えると、ギランは頷いて地図の右下にある部分を指差す。

「わかった。なら先に目指すは南東にあるチェックポイントだな」

「学院から一番遠いですね……」

「体力があるうちに一番遠いところを済ませておきたい。後回しにすればするほど、辛くなるからな」

「はあ……」

ギランの手元を覗き込むように地図を見た。レイムの身長はギランの肩辺りまでしかないため、自然と爪先立ちになる。すると突然地図の位置が下に下がった。

「あ。ありがとうございます」

「……いや」

レイムが見易いようにギランが下げてくれたのだとすぐにわかった。レイムはじっと地図を見てギランが示した道順を確認する。

チェックポイントが設置されている場所はすっぱりと別れていた。東西南北に一つずつ、そして一番遠い南東のところの一つ、計五つ。学院から一番近いのは北のところだが、どこから始めてもぐるりと回れるように配置されていた。しかし一つ一つの距離は離れていて、全てを回るためにはどんなに早くても、丸一日は必要だろう。途端、全ての場所を回れるだろうかと不安が胸中に過ぎる。

（もしかしたら……最後の方、先輩の足を引っ張ってしまうかも……）

レイムは丸一日森を散策したことなど、当然ない。門限もそうだが、森に出ても然程遠くないところであまり強くない妖魔を相手にするだけだったし、一人で奥に行って迷ってしまったら、命に関わってしまう。今まで一歩も踏み込んだことがない場所へと足を運ぶことに恐怖を覚えないわけがなかった。

もしも足を引っ張ることになってしまったらとレイムは考える。妖魔についてはギランがいるから何とかなるだろうが、途中で体力が尽きてしまうのはどうしようもない。しかし相手は鬼軍曹と怖れられているギランだ。疲れたと口にする度にだらしがない、これきしのことと一喝されたり、やる気があるのかと怒鳴られたりするかもしれない。

どっと背中が寒くなった。

（って、怯えてる場合じゃないないないないない！）

ぶんぶんとレイムは頭を振った。確かにギランは怖いけど、怖がっているのはトーティリアに勝てないのだから。

「……どうかしたか？」

「な、何でもありません！」

見下ろしてくる訝しげな瞳に背中を竦ませながら手を思い切り振ると、頭上にドオンという鈍い音が響く。オリエンテering開始の合図だ。

「始まったな。ここからだ東門より南門の方が近いな。行くぞ」

「は、はい！」

開始と共に皆一斉に走り出すと思ったが、それは僅かなペアだけでほとんどのペアは歩いてそれぞれ門の方へと向かっている。レイムもまた歩いて南門へ向かっていた。

「先輩、走らなくていいんですか？」

「始めから走っていくのは体力に自信のある奴だけだ。闇雲に走ればそれだけ体力を消耗することになる。俺はともなく、お前はずっと走ってなどいられないだろう？」

「う……」

確かに一日がかりのオリエンテーリングでずっと走り続けることは不可能だ。その時点で既に足を引っ張っているようで、レイムはしょぼんと肩を落とす。

「……俺は別に責めてないぞ。後衛に前衛並の体力を求める方が無理があるだろうが」

「それは……そう、ですね」

確かに後方で補助をする後衛が、大立ち回りをする前衛と同じ体力を持つはずがない。

レイムは一步前を歩くギランを見上げる。そのとき脳裏にトーティリアに言われた言葉が過ぎった。

『本当にフォトグリス先輩が恐ろしい方なのか、オリエンテーリング中、自分の目で確かめてみるがいい』

聞いたときは上から目線で腹が立つとしか思わなかったが、よくよく考えてみると、レイムはギランのことを鬼軍曹と呼ばれているらしいという噂を聞いただけで、彼のことを怖いと思った。だが、彼の本当の人となりを、レイムは知らない。

思えばトーティリアの言うとおりであった。ギランのことを詳しく知りもしないのに、レイムは怖がっている。高い位置から見下ろされる鋭い目つきは確かに怖い、それは外見だけのことで、彼の性格を表しているわけではない。

そういえばギランは、階段から飛び降りてぶつかって気絶したレイムを、医務室までわざわざ連れていってくれたのだ。そしてレイムはそのお礼を言うのをすっかり忘れていたにも関わらず、そのことを責めてくることもない。

もしかしたら、彼は見た目ほど怖い人ではないのかもしれない。

そんなことを思いつつ門を潜ると、一面の森がレイム達を出迎えた。森の中に作られたアナザイル学院は、一步でも外へ出ると当然森だ。見上げなければ上が見えない木々や青々とした草花が生い茂り、朝の空気と相俟ってひんやりとした雰囲気を持っている。周りを見ると、レイム達と同じように森に入っていく生徒達の姿がちらほら見えた。

「他の人達もわたし達と同じ考えなんですかね？」

「面倒なところを先に済ませたいと思うのは、誰だって同じってことだな」

森の中へ入ると、すぐに人が通れるような道はなくなっている。中にはレイムの背丈と同じぐらいの草が生えたりして、とても歩き難い。そんなレイムとは違い、ギランはまるで平地に行くのと同じような速さで進んでいる。速い。

「せ、先輩……まっ——！」

開こうとする距離を詰めようと急いだ途端、レイムの足に何かひっかかる。草が生い茂って地面を埋め尽くしているため、足元をしっかり確認する余裕がなかった。

「いったたた……」

「大丈夫か？」

ドテンと転んだ身体を起こすと、ギランが戻ってきていた。慌てて立ち上がりパンパンと膝をはたく。草がクッションになったおかげで、怪我はない。

「だ、大丈夫です！」

「……そうか」

彼はすぐにくるりと踵を返す。しかし今度は平地に行くように歩くことはなく、草叢を踏み潰し始めた。

「……俺の通った後を通るといい。少しは歩き易くなるはずだ」

「ほえ？」

一度ギランが振り向いてそういうと、彼は再び進んでいく。言われたとおりの後ろを通ると、草が踏み潰され、掻き分ける必要がなく通り易い。

「あ、ありがとうございます」

「……気にするな」

お礼を言うが、返ってきたのはそっけない言葉。そういえば彼はレイムの言葉に大体二言三言でしか答えない。必要なこと以外は話さない性格なのだろうか。

(まあ、わたしが遅くなって一番困るのは先輩になるもんね……)

レイムはトーティリアに負けたくない。言い方を変えると、トーティリアにさえ負けなければそれでいい。だから優勝したいとは思わなかった。

ギランに聞いたことといえば、オリエンテーリングについての必要最低限のことのみ。負けたくない奴がいるとか、絶対に優勝したいとか、オリエンテーリングに対する意気込みのようなものを聞いてはいなかった。

「先輩……あの、どうして先輩はオリエンテーリングに参加したのですか？」

「……ん？」

ふと気になったので聞いてみる。聞いてから答えてくれるか不安になったが、彼は歩みを止めないまま言葉を紡いだ。

「オリエンテーリングは自分の力を試せるいい機会だ。鍛錬の成果だけでなく、今まで学んだ知識、瞬時に正しく動ける状況判断力、その場その場で対応していく適応力が必要となってくる。三次生は一次生を引っ張らねばならないから尚更だ。その機会を逃す理由はないだろ？」

「はあ……」

自分から聞いたのに気のない返事をレイムは返す。そういえばトーティリアはギランを『自己鍛錬を怠らず、常に自身の力の向上を目指して邁進している、努力家の先輩』と評していた。

(つまり、自分を試すのが好きなのかな……?)

レイムが魔法銃（ブラスター）が好きなのと同じように。少し違う気もしたが、レイムはそう結論づける。

「そういえば、お前はスウェムフォードに負けたくないと言ったな？」

「すうえ？」

「トーティリア・スウェムフォードだ」

「あー……。はい、そうです」

いつも名前と呼んでいるせいで彼女の家名に馴染みがなかったために、一瞬誰のことを言っているのかわからなかった。トーティリアの名前はただでさえ長いのに、家名もまた無駄に長い。トーティリアのペアになった三次生が、トートと名前を省略したくなるのもわかる気がする。

「スウェムフォードに負けたくないのならば、優勝を目指すくらいの意気込みでないとならば勝てんぞ」

「え!？」

「彼女のペアは底なしの体力の持ち主、セズ・ラッカーノだ。こいつにとって、オリエンテーリングの範囲なんざ、庭も同然。年がら年中走り回ってるからな」

「うわあ……」

レイムは顔を引寄せながら思わず周りを見渡す。鬱蒼と広がる森、森、森。レイムにとっては進むのですら困難なこの森が、庭同然だなどと言われて驚かないはずがない。レイムは、自分のペアがセズでないことに心から安堵した。

「スウェムフォードも、一年で女ながら根性がある。セズを慕っている後輩は割と多いが、全員が全員鍛錬に付き合うのだけは断固拒否しているのにも関わらず、限られた間とはいえ、ずっとあいつに付き合い続けてたからな」

「!」

確かにトーティリアはあの日以来ずっと疲れたような顔はしていたが、セズのことを悪く言ったり鍛錬につきあいたくないとは口にしていない。大変なら無理ですとか最初からついていくのを諦めればいいのにと考えたが、彼女は決してそうはしなかった。

トーティリアは諦めが悪い。それはレイムとほぼ毎日のように繰り返してる身だしなみについての喧嘩からも言えた。

普通ならば、何度言っても正さない時点で諦めるだろう。こいつに何を言っても無駄だと。だが、トーティリアに諦める兆しは今だにない。レイムを咎める口や身だしなみを整える手が淀むことさえない。だから毎朝彼女との喧嘩が絶えないのだが。

因みにレイムの中に、自分が早く起きて身なりをきちんとするという選択肢は存在しない。

「……わたし、あいつに負けたくなくて、あいつより下だなんて思われたくなくて、オリエンテーリングに参加したんです。絶対、トーティリアのペアには負けたくありません」

トーティリアにさえ負けなければそれでいいと思ったが、その基準が優勝を目指すという高いものなら、その高みを目指すまで。

「それならば、今は無理のない程度の速さで進め。俺の歩くスピードが速いなら言ってくれ、お前に合わせる」

「あ、はい!」

ギランはそう言ったが、レイムが進み易くするように進んでいるため、レイムも充分彼についていくことができた。

その後暫くは無言だった。周りに他のペアの姿も見えないため、自分達が早いのか遅いのかもよくわからない。しかし

妖魔と鉢合わせることもなく、道のりは順調といえよう。

「あ、あの……今どの辺りかわかりますか？」

「……地図を見るから少し待ってろ」

声をかけるとギランは立ち止まり、魔法指輪（マジックリング）を光らせる。ペアアと淡い光と共に粒子が飛び出し、合わさりあって地図が形作られていく。

レイムはギランの傍に寄ろうとして――あるものが視界に過ぎた。ギランが作ってくれた道を外れ、がさごと草を掻き分ける。

「ここは――っておい、どこへ行く!？」

「あ、やっぱりそうだ！」

そこにあった見つけたものを手折り、すぐさま元のところへと引き返した。

「先輩見て下さい！ キイロツユクサです！」

「……よくわからんが、珍しい花なのか？」

「はい！ この花の花粉を吸い込むと神経が麻痺するので、弾丸の材料としてとっても役に立つんですよ！ 丁度この時期に咲くんです！」

三枚の花弁からなる一センチ程の小さな花びらが特徴的な、かわいらしい花だ。一般的なツユクサと違い、昼を過ぎてても小さな花は開いたままだが、夜になるとやはり萎んでしまうという宿命を持つ。図鑑や教科書でなら何度も見たことはあるが、実物を見るのは初めてだった。この森のどこかに咲いているとは聞いていたが、学院周辺に咲いている様子はなかったために見つけるのを諦めていた花でもある。まさかオリエンテーリング中に見つけることができるなんて思わなかった。

「……この時期のみ咲く花か、課題に出される可能性があるな」

「ほえ？ 課題？」

「お前も聞いただけ、チェックポイントで課題をこなさなければ、ゴールへは行けないと」

そういえば、とレイムは思い出す。そして『課題』と一言で纏められた言葉は、一体何をするのか全くわかっていないことも。

「当然ながら、課題は毎年違う。大抵はとある妖魔の一部分を持ってこいとか、どこかに生えているであろう薬草を探せとかが主だ。去年一昨年とその花を指定してこなかったから、今年は充分可能性がある。持っていくか」

「え、それってもしかして、課題で出されたら先生に渡さないといけないってことですか？」

「それは生徒の自由だ。生徒が持ち帰ってもいいし、いらぬのなら渡せばいい。いるならばお前がそれを持っている」

「わかりました！」

レイムは嬉々として魔法指輪（マジックリング）を花に翳す。ひゅんと短い音と共にレイムの手から消えて吸い込まれた。これが手に入っただけでも参加した甲斐があったかもしれない。

「他にも何か見つけたら――」

ギランが不意に言葉を途切れさせ、バツと後ろを振り向いた。左手の中指に収まっている魔法指輪（マジックリング）に

手を翳し、大きな太刀がまるで鞘から引き抜いているかのように形成されていく。

「よ、妖魔ですか……？」

「ああ、お前も銃を構えとけ」

「は、はい！ ルージュ！」

レイムも同じように魔法指輪（マジックリング）に手を翳し、一般的な片手でも扱える魔法銃（ブラスター）のルージュを取り出した。ギランの背中に自身の背中を合わせ、いつでも発砲できるように構える。

――ギアアアアアアア！

――グルルルルルルル……

「！ 上!？」

頭上から異様に細長い黒影がレイム達を覆った。レイムはすぐさま銃を上に向け発砲し、バックステップで大きく下がる。

ドサリと落ちてきたのは二頭の妖魔。鈍い緑色の鱗をしゅるしゅると動かし、背筋にぞっと悪寒が走った。身体はどうみても蛇のそれなのに、頸部から頭部にかけて羽毛が生え、鳥のような顔立ちと鋭い嘴を持っている。蛇型の妖魔、バニップだ。銃弾の痕から紫色の液体が流れ出し、地面を汚しながら、嘴をくわっと大きく広げた。それぞれギランとレイムに襲い掛かる。

「わわわわわ！」

レイムは慌ててバニップに向かって連続で発砲する。しかし慌てていたため外すか掠るかで致命傷を与えることができない。そして眼前に迫ってきたときには、ルージュの弾は切れていた。新しい弾を詰める余裕なんてない。

「やばっ！ ラーナ！」

レイムは鋭い嘴を何とか避けると、持っていたルージュを魔法指輪（マジックリング）に収める。そしてすぐさま連射性に優れた魔法銃（ブラスター）、ラーナを取り出した。バニップの胴に向かって狙いを定める。この距離ならば今度は絶対外さない。

ダダダダダダ！

弾が全てバニップの腹部に命中し、バニップは首を大きく振りながら地面へ倒れた。まだピクピクと痙攣しているが、再び襲ってくる気配はない。レイムはほっと安堵する。

「ありがとう、ラーナ」

銃身を撫でながら彼女を労った刹那、ザシュ、という音と共にバニップの頸部に大きな太刀が突き刺さった。いつのまにかギランがこちらへきていて、バニップに太刀を突き立てている。鋭く細められた彼の漆黒の瞳がまっすぐレイムを射抜き、ピクリと身体が震えた。

「動けなくしたからと油断するな！ 生命力の強い妖魔は、頭部を失っても襲いかかってくる！ 完全に動かなくなるまで警戒を緩めるな！」

「す、すいません……」

ギランに一喝され、レイムは身体を凍ませる。頭部を切り離されたバニップは完全に絶命していた。もうピクリとも動かない。ちらりとギランが相手をしたバニップを見遣ると、頭から尾先までまっすぐに切断され、身体が二つに別れていた。

「.....わかればそれでいい」

ギランは鋭い目を一度伏せてそういって、魔法指輪（マジックリング）を太刀に翳した。太刀の形が崩れて粒子になりながら魔法指輪（マジックリング）の中に吸い込まれていく。レイムもそれに倣い、ラーナを収めた。

「.....ここは学院の保護がない。一時の油断で妖魔から攻撃を受けたら、死ぬ可能性もある。己の身を守るために、妖魔に一切の容赦は不要だ。わかるな？」

「は、はい！」

妖魔から守ってくれる学院は、すでに遠く離れた場所にある。自分の身を守るためには、自分で妖魔を撃退するしかない。ギランの言うとおりの、わずかな油断が命取りになってしまうだろう。

（しっかりしなきゃ.....!）

いくらオリエンテーリングとはいえ、教師の目が離れているこの状況での森の外の怪我は、完全に自己責任だ。学院に戻れば治療するが、大怪我を負ったり最悪命を落としたりしても、学院はその責任の一切を負ってはくれない。

開発が進んでいない場所は、このアナザイル樹海以外にも多数存在している。そのようなところは数多の妖魔達の巣窟となり、当然一歩でも足を踏み込めば命の保障はされない。

学生の頃から命を失うかもしれないという緊張感を持たせるために、学院側は生徒全員に入学する前からそれを了承させている。勿論、レイムも。

「.....この話は以上だ。それよりも」

ギランが腰を落として絶命しているバニップを見据えた。頭部から尾の先まで順に眺める。

「バニップの皮は薬品の材料として使われる。つまり、これも課題として出される可能性があるってことだ」

「.....つまり、皮を剥ぐってことですか？」

「そうだ」

バニップは弾痕から出る紫色の体液で大分汚れている。正直いって気持ち悪くて触りたくない。レイムは顔を歪ませた。それはギランも同じなのだろう。バニップの遺骸を見つめる表情は、レイムと同じく嫌そうに歪められている。

「あ、なら、これをそのまま魔法指輪（マジックリング）の中に入れてしまおう！ それなら剥ぐ必要ないですよ！」

名案だとばかりにレイムがポンと手を打つ。しかし、途端ギランの眉間に皺がよった。レイムは内心う、と唸る。

「お前な.....こんなでかい奴を魔法指輪（マジックリング）に入れたら、すぐに許容量オーバーだろうが。他にも幾つか候補を持ち歩くことを考える」

「そ、それは.....」

バニップの体長は二メートル近くある。魔法指輪（マジックリング）の許容量は無限ではない。魔力の量により許容量

にも差が出るが、やはりそれでも体長二メートルもあるバニップは大きいといえる。オリエンテーリングのために用意した道具や武器も含めれば、残りの容量なんて僅かになってしまうだろう。――普通ならば。

「……わたしなら持てます。バニップを収めても、まだ十分な余裕があります。……色憑き、ですから」

色憑きは、膨大な魔力を身体に宿すが故に、本来持つべきである色彩が変化する。レイムの髪が赤みのある黄色をしているのも、まさしく色憑きである証。

「色憑きの魔力は膨大です。魔法指輪（マジックリング）の許容量も普通の人とは比べ物になりません。学院にある大きな大砲型の魔法銃（ブラスター）が十台全部入るくらいですから」

レイムにとって魔法指輪（マジックリング）に大量に物を詰め込むのは普通のことで、だからバニップをそのまま魔法指輪（マジックリング）に収めるという考えに至ったのだ。

「わたしなら、余裕があるから言ったんです。考えなしに言ったわけではありません」

だからこれだけはわかってほしかった。レイムにとっての普通とギランにとっての普通は違うだけなのだと。決して無責任にただ言ってみただけではないのだと。

「……そうか、そういえばそうだったな。それなら、お前が持っていてくれ。――きつい言い方をして、悪かったな」

「い、いえ……」

レイムは魔法指輪（マジックリング）をバニップに翳し、死体を中へ収めふうと息を吐く。ギランとの間にきまづい沈黙が流れた。

「……一つ聞いてもいいか？」

「は、はい！」

沈黙を先に破ったのはギランだった。レイムの身体に緊張が走る。

「確か魔法銃（ブラスター）には、薬剤を調合した弾丸だけでなく、己の魔力を弾へ変換するというものもあったよな？」

「はい……魔丸のことですね」

魔法銃（ブラスター）は弾丸のみが使えるもの、逆に魔丸のみ使えるもの、両方が使えるものと別れている。魔力を小さく凝縮された魔丸は、威力だけならば弾丸を上回る。しかし麻痺させたり眠らせたりという特殊な効果はなく、威力のみを重視されていた。

「弾が途中で切れたということは、お前が使ってたのは弾丸だな。魔丸ならば魔力が尽きるまで使うことができるんだろ？ お前は使わないのか？」

「……」

ギランのその問いかけは誰でも抱く疑問だろう。魔丸は使用者の魔力さえあれば延々撃ち続けることが可能だから。

魔法銃（ブラスター）は低い魔力でも妖魔と対峙できる武器だ。だから大抵の者は調合が面倒だと、魔丸を好む生徒が多い。が、延々撃ち続けられるということは、逆に魔力が尽きれば撃てなくなるということでもある。元々の魔力が低ければ、当然魔力切れも早い。だから少しでも多く弾数を稼ぐために、弾丸との併用が求められる。魔法銃（ブラスター

)は確かに便利ではあるが、弾が切れてしまったら戦闘力はゼロになってしまうため、使用者は常に弾数を頭に叩き込んでおく必要があった。

しかしそれは普通の人間の場合。レイムのように膨大な魔力を保持する色憑きならば、弾切れを気にする必要はない。そう、本来ならば――

「.....一応、持っではいるんですが.....ロクサンヌ」

レイムは魔法指輪（マジックリング）から再び別の魔法銃（ブラスター）、ロクサンヌを取り出す。臙脂色の光沢を放つ、ルージュやラーナ、リエラとは一風変わった雰囲気を持つ彼女を。

「.....口で説明するより、実際見た方が早いですね」

ロクサンヌを持った手をぶらりと下に下げながら、ギランから少し離れたところでまっすぐ前へ、空いている手を伸ばした。

「風よ、刃となりて切り刻め！ ウィンドー」

ドン！

全てを言い切る前に、轟音と共におきた爆発によって遮られた。それを前もって予測していたレイムは、爆発に巻き込まれる寸前に大きく後ろに下がって回避する。

「お、おい.....今詠唱してたのって風属性の魔術だよな？」

「はい、火属性ではありません」

「.....じゃあなんで爆発したんだ!？」

「.....これがわたしが魔丸を使わない.....いえ、使えない理由です」

魔術には様々な系統がある。学院を妖魔の手から守るために張られている障壁は結界系。怪我や病気の治療を施す治療術系。転移装置（ワープシステム）をみだした空間から空間の移動を行う転移系。その他にも、火、水、風、地の属性を持つ基本的な理系魔術や、妖魔を操って思うがままに動かすという操作系の魔術も存在する。

そして今レイムが使おうとしたのは風属性の最も簡単な魔術、ウィンドカッター。魔力さえあれば誰でも発動することができると言われている、初心者向けの魔術だ。成功すれば風の刃が生み出され、近くの木々を切り倒しただろう。しかし風の刃の変わりに生み出されたのは爆発。風の術だからではない。簡単な術でも難しい術でも、どんな属性でもどんな系統でも、レイムが魔術を放とうとすると、全て爆発してしまうのだ。

「幼年学校にいたときの先生は、魔力が強すぎて制御しきれないからだと言ってました。.....自分なりに何度も練習したんですけど、やっぱり爆発してしまうんです」

魔術を使う度に爆発がおきるレイムに、幼年学校の魔術を教える教師はさじを投げた。どんなに丁寧に教えても、レイムは爆発させることしかできないのだ。自分の手には負えないと肩を落とす教師を、レイムは何人も見ている。

「魔丸の魔法銃（ブラスター）は、低い魔力でも高威力が出せる武器です。威力を引き出すために、魔力を凝縮する内部構造になっています。使い手の魔力が低ければそれに何の問題もないのですが、わたしみたいに凝縮する必要のない高い魔力でも、魔法銃（ブラスター）は凝縮してしまいます。威力は当然通常の魔丸と比べ物にならない程でしょうが.....

逆に威力が高すぎて、魔法銃（ブラスター）自体が反動で壊れてしまうんです。……これも昔経験済みです」

発砲した途端、腕に走った重い衝撃と銃口の部分が砕け散った魔法銃（ブラスター）の、レティシャの無残な姿は今でも鮮明に思い出せる。渡されたばかりなのに修復不能にまで陥ってしまったレティシャを、レイムはぎゅっと抱きしめてわあわあと泣いた。レティシャを壊してしまったのは魔力のコントロールができていない自分のせい。なのにレイムは自身の魔力のコントロールの仕方がわからない。魔力のコントロールができていない以上、魔丸を使ったら他の子達も壊れてしまうかもしれず、それ以来レイムは一度も、魔丸を使ったことはなかった。

「つまり、今までずっと弾丸のみを使ってきたと……？」

「そうです……」

「……今はそれでいいのかもしれないが、学院を卒業した後のことは考えているのか？ 正直、弾丸だけでやっていけるとは思えないが……」

「う……」

まさにギランの言うとおりだ。魔法銃（ブラスター）は魔丸だけでも、弾丸だけでも弾数は心もとない。今日に限っては十分な弾丸を用意したが、毎度毎度十分な弾丸を用意できるかと問われたら、答えはノーだ。弾丸は非売品であり、自分で薬剤を調合して作らなければならないのだから。

「魔丸が使えないから、他の人よりも不利になることぐらい、わたしだってわかってます。でも……」

レイムはロクサンヌを握る手に力を込めた。

「他にやりようがないんですよ！ 何度やっても魔術は爆発するだけだし、彼女達を壊すのも嫌なんですもん！」

爆発するだけの魔術など、何の役にも立たない。そして無残に砕けた魔法銃（ブラスター）も見たくない。

「銃口や、ロッドの部分が砕けてシリンダーまで傷だらけになって……ボロボロになったレティシャがもう可哀想すぎて……ロクサンヌにまでそんな目に合わせたくないんです！」

何より辛いのは、そうしてしまったのは自分だという事実。レイム自身が魔力をコントロールできないばかりに、レティシャを壊してしまった。レティシャは出来立ての魔法銃（ブラスター）で、他の誰にも撃ってもらったことがなかったのに。

「……！」

レイムは突然我に返った。今自分が思いの丈をぶちまけた相手は、誰だ。三次生のギラン・フォトグリスだ。彼が本当に鬼軍曹のような人物かはともかく、先輩相手に一方的にわあわあと叫んでいいはずがない。さあっと身体から血の気が引いていくのを感じた。

「え、あ、あの……その……」

「――何度も魔術の練習をしたと言っていたが」

「ほえ？」

ギランの口から出たのは感情的になったレイムに対する叱責ではなく、レイムはギランが何を言い出したのか検討がつかずに首を傾げた。

「それは具体的にどのくらいしたんだ？ 千か二千か、それとも五千はやったのか？」

「ごせっ……!？」

ギランの言った途方もない数字にレイムはあぐりと口を開けた。どんなに頑張ったところで、そんな回数魔術を使うなんてありえない。五千どころか千にも満たないだろう。

「そ、そんな回数できるわけじゃないですか！」

「何故だ？ 幼年学校といえど、周囲を巻き込まない広い場所くらいあつただろう。そこなら気兼ねなく何度も練習が出来たはずだ。普通の人間ならばそんな回数はできないだろうが、お前は色憑きななのだから、練習自体は何回でもできよう？」

「……」

「まさか、ほんの数十回やっただけでできないと判断したわけじゃないだろう？」

レイムは何も言えなかった。ギランの言うとおりであったから。魔術を習い始めたとき、一体何回練習しただろう。周りの子達よりはしたとは思うが、何千回と回数をこなしてはいなかった。

「だ、だって先生たち皆、もう無理だって……」

「だからお前も諦めたのか？ それ以上修練を重ねることをせずに」

「そ、それに、わたしが爆発させる度に皆馬鹿にしてくるし……」

「そんなものは言わせておけばいいだろ。自分が気にしなければいいんだからな」

「……っ」

正論を言われ、レイムは押し黙る。心無い言葉なんて気にしなければいい。今ならそれができる。でも、あのときは――

「……っ、うるさい、うるさい、うるさい！」

気づくとレイムはギランに向かって叫んでいた。顔を上げ、高い位置にある鋭い漆黒の瞳を睨みつける。

「あんたに何がわかるの！ 色憑きだからって勝手に期待されて落胆されて！ 髪の色が狐みたいだからって、妖狐だとか妖魔だとか皆から馬鹿にされ続けて！ そんな経験があんたにはある!? ないでしょ！ 逃げてたことは認めるけど、それをあんたにずけずけ指摘される筋合いなんてない！」

相手が先輩だとか鬼軍曹とか呼ばれる怖い相手だということは、レイムの頭にはなかった。だが、レイムは悪いことを言ったとは思わない。誰しも、踏み込んでほしくない領域というものには存在する。そこを問答無用で踏み込んできたのだ。目上だからと、土足で踏み込んでいい理由になんてならない。

『妖狐だ、妖狐がいる！』

『色憑きなのに……これでは魔力がないのと同じではないか』

突如脳裏に蘇る蔑みの言葉と落胆の言葉。思わずじわりと目頭が熱くなった。泣いているのを見られたくなくて、身体ごと顔をギランから背ける。ロクサンヌを握る手に自然と力が籠った。

「……悪かった」

「え……？」

突然の謝罪にレイムは面食らった。くるりと振り返ってもう一度ギランを見上げる。眉間に皺が寄ってどこか影がある表情は、一瞬怒っているようにも見えたが、逸れて合うことのない視線がそれは違うと言っているようだった。

「俺はただ、これからまた励めばいいと……今からでも遅くはないと言いたかったんだ。言い方が悪かった。お前をその……傷つけるつもりは、なかったんだ」

その言葉が、ギランが怒っているのではないと裏付ける確固たる証拠となった。彼は先の言葉でレイムを傷つけたと、それを謝ってくれている。まるで睨みつけるように目を細めているのも、ばつの悪さからきているのだろう。

（そっか、だから鬼軍曹って誤解されてるんだ）

正直いって、彼は目つきが鋭く顔が怖い。そして言いたかったことと先の言葉を考えると、思いやりはあるのに、酷く不器用なのではないだろうか。言葉も厳かで、威圧感を放つ雰囲気は纏っているのは、その思いやり気づくのは容易ではない。先に恐怖が走る可能性がある。五日前のレイムのように。

「えと……わたしも先輩に生意気言ってすいませんでした」

先ほどまで抱いていた怒りがするすると萎んでいった。ギランは悪意があって言ったのではないとわかったから。それにちゃんと謝ってくれた。ならばレイムも無礼を詫びるべきだろう。

「いや……それで話の続きだが」

ギランは一つ咳払いする。レイムは大人しくじっとギランを見つめた。

「俺も魔術は専門外だから詳しいことはわからないが、それでも普通の人間よりも魔力が多い分、コントロールが難しいのだろうというくらいは検討がつく。だからお前にやる気があるのならば、魔力のコントロールをするための鍛錬を再びしてみたらどうだ？ 一日で千や二千をこなせとは言わん。自分のできる範囲内でだ」

「自分のできる範囲で……」

レイムは講座が終了次第、修練場や外で銃の撃ちこみや部屋で調合をしている。その時間を割くことに心苦しきはあるが、魔力をコントロールできるようになれば、魔丸を使いこなせるようになるかもしれない。

それはとても魅力的だった。

「あ、でも……もしそれでもできなかつたらどうすれば……」

教師たちに教わった精神統一だとか、一点に集中するとか、先に理論を覚えるとかは全て実践したが身を結ばなかった。やる前から諦めてどうする、と言われてしまうかもしれないが、どうしてもそのことを意識せずにはいられない。

「――それならば、暴発を利用すればいい」

「ふえ？」

「さっき魔術を使おうとしたとき、爆発を避けたろ。自分で暴発するとわかっているなら身の安全は確保できる。ならばタイミングを合わせて、妖魔にその爆発を当てるようにすれば、息の根を止めることはできずとも、攪乱することぐらいはできるだろ」

爆発は、レイムが魔力のコントロールを誤っているためおきるもの。ただの失敗だ。その失敗を逆手にとって利用しよ

うなどと、考えたこともなかった。

「上手く爆発に妖魔を巻き込み、その隙をついて急所を発砲すれば魔丸の変わりになるんじゃないか？ まあ、実際にやるとなると、口で言うほど楽じゃないとは思うが」

確かに、ただレイムの手前で爆発するだけの暴発を、上手く妖魔に当てることは難しいだろう。だが、それもまた訓練次第でタイミングを掴めばなんとかなるかもしれない。

「それ、いいですね！ 確かに難しいかもしれませんが、出来るようになれば弾数の消耗を減らせることができます！ それにもしかしたら、それをやっている途中で魔力のコントロールができるようになるかもしれません」

まるで暗雲に光が差したようだった。レイムはロクサンヌを魔法指輪（マジックリング）に戻し、両手を胸の前で絡ませる。

「その気なら、これから遭遇する妖魔で試してみるか。タイミングが計れるよう、援護しよう」
「ありがとうございます！」

レイムは興奮で頬を紅くしながら両の拳をぎゅっと握りしめた。
ギランは魔法指輪（マジックリング）から再び地図を出し、行くぞとレイムを促す。

「現在地は漸く三分の二ほどといったところか」
「うわあ、まだまだ先は長いですね」

一応今目指しているチェックポイントに近づいてはいるようだが、まだあと一息、というところではない。それでも確実に近づいてはいる。

レイム達は再び進み始めた。妖魔と対峙していた分、タイムロスしてしまったのだからそれを補うために少し早足になる。

お互い無言で進み続けると、暫くして前を進むギランの足が止まった。

「見えた、チェックポイントだ」
「あ！」

ギランの横からひょっこり顔を出すと、チェックポイントと書かれた幕が、でかでかと張られているのが見える。遠目でもよくわかるそれに、レイムは目を輝かせた。

「先輩、早く行きましょう！」
「あんまり興奮するなよ。何の課題を出されるかわかったもんじゃないからね」

レイムはバタバタとチェックポイントにまっすぐ向かう一が、顔を引きたらせる。
そこには一人の教師が、欠伸をしながらパイプ椅子にどっかりと腰を下ろす姿があった。どう見ても、暇を持て余していると思えない。

「おお、お前ら早かったな」

こちらに気づいた教師はだるそうに片手をあげる。どこからどう見てもやる気のなさそうな教師にあてられ、レイムの

力がげんなりと抜けた。

「先生、いくら暇だからと、だらけすぎではないですか？」

ギランが腰に手を当てながら、呆れた口調で言った。教師は椅子から立ちあがり、腕を大きく上へと伸ばし、首をこきこきとならす。

「そう言うなよ、ギラン・フォトグリス。この場から離れちゃいけないうえに、やることが全くねーんだ。こちとら退屈で死にそうなんだよ」

教師はそういいながらくわっと口を開けて欠伸をする。レイムは周りを見渡すが、そこにはチェックポイントと書かれた幕と、彼が座っていた椅子と、円形の装置が三つほど設置されているだけだった。因みにこれは簡易結界で、この空間内にいれば妖魔がたとえ襲ってきたとしても装置によってはじかれ安全が保障されるというもの。だからこそ、安全が確保されたなかでじっと待っているだけというのは、退屈極まりないのだろう。レイムならその場で魔法銃（ブラスター）の発砲練習か、一度解体して部品の一つ一つを整備しているかもしれない。

しかしそれを差し引いても、彼はだらけすぎだとギランと同じことを思った。

「先生、ここの課題は何ですか？ 早く教えてください」

この場はさっさと用件のみを話すに限る。彼がいくらだらけようとも、レイムには何の関係もないのだから。

「そう急くなよ、レイム・リリアーゼ。課題ならちゃーんと用意してある」

教師はごそごそと懐を漁り、一枚の紙を取り出した。目を細めてその紙に書かれたことを読み上げる。

「えー……『この付近に生息しているであろうバニップの皮を剥いで持ってこさせるべし』だ、そうだ」

「……」

「うわあ」

何と言う偶然だろう。レイムは魔法指輪（マジックリング）を地面に向けた。光の粒子が次々と飛び出し、細長い姿を形成していく。

「うげえ、気持ち悪！ 誰がバニップそのもの持ってこいって言ったよ。俺は皮持ってこいって言ったんだ、皮を」

「……この場で剥げば問題ありませんか」

「ねえな」

教師は何がおかしいのか、腰に手をあて盛大に笑い始めた。ギランは眉間に一度手を当てながらも、魔法指輪（マジックリング）から小さな短剣を取り出し、バニップの血で汚れていない部分にそっと手を触れる。レイムはギランに皮を剥ぐことを任せられなくて内心安堵した。紫色の体液で汚れた頭部のない遺骸は、直視して気持ちのいいものではない。

肉が刃物に食い込む音がするが、レイムは顔を逸らすことでそれをなんとか耐えた。

「……これでいいでしょうか」

「ほい合格。よし、一度しかヒントを言わねえから、よーく聞くように」

たった一文字をいうだけなのに、教師は胸を逸らし偉そうな顔をする。

「俺が与えるヒントは『セ』だ。以上！」

「ありがとうございます」

ギランは軽く頭を下げるとくるりと踵を返し、レイムに小さく行くぞと促して足早にその場を去ろうとする。レイムは何をそんなに急ぐのかわからなかったが、何か考えがあるのだろうとそれに従った。

「って、おいお前ら！ バニップの死体を置いてくんじゃねーよ！ 責任もって持っていけコラァ！」

教師の叫び声を背中で聞いて、レイムは漸くギランの意図を把握する。その声を聞こえなかったフリをし、そのままギランと共に走り去った。レイムとしても、バニップの遺骸を必要もないのに持ち歩きたくはない。それに暇でしようがないと言っていた彼に、バニップの遺骸処理はいい暇つぶしになるはず。おかげで体よく押し付けても、罪悪感は微塵も湧かなかった。

「ここまでくればもう大丈夫か」

チェックポイントの幕が見えないところまでやってきて、二人は漸く息をつく。少し息が乱れたが、レイムの心はすっきりとしていた。

「ギラン先輩、ありがとうございます」

「？ ……何か礼を言われるようなこと、したか？」

「はい。先輩はいろいろしてくれました。だからお礼を言いたくなっただけです」

ギランは気づいたのだろうか。今、レイムが初めて彼の名前を呼んだことに。

思い出せば、ここに来るまでギランに何回世話になっただろう。彼に厳しく指摘されたことは、レイムにとって必要なことが欠けていたから。それだけでなく、自身に悪いことがあれば逆に謝ってもくれる。それに彼は教えてくれた。誰もがレイムに魔術の指導を諦めたというのに、人よりも数をこなせばいいという諦めない心を。それでもできなかったらどうしようという不安に、爆発を逆手にとって利用すればいいという解決策を。今までそんなことを教えてくれた人はいなかった。力無き色憑きである娘でも愛してくれた両親でさえも。

「わたし、先輩の噂を聞いて、ずっと怖い人なのだと思って勝手に怯えてました。ごめんなさい」

「……別に構わん。心当たりがないわけでもないしな」

「確かに先輩は厳しい人ですね。でも、同じくらい優しい人だと思いました」

ギランはオリエンテーリング開始時から、レイムのことを気遣ってくれていた。進む速度を合わせてくれただけでなく、レイムが進み易いよう草木をわけてけてくれた。レイムがギランに対して詰ったときも、自分の言い方が悪かったと謝ってくれた。それだけではなく、レイムが階段を飛び降りて気絶してしまったとき、医務室まで運んでくれたのもギランだ。

彼はただ厳しいだけの人ではない。

「今はペアになったのがギラン先輩でよかったって思いまー先輩？」

気づくとギランはレイムから視線を外し、全く別の方向を向いている。不思議に思ってレイムはギランが向いている方へ移動し、顔を見上げようとするが、そのたびギランがレイムとは真逆の方向を向いてしまう。

訝しげに首を傾げるが、ギランの耳が赤く染まっているのを見て、レイムはあることに気づいた。

「……ギラン先輩、もしかして照れてます？」

「っ！ 照れてなどいない！」

間髪をいれずに帰ってきた否定の返答。しかし肩がびくっと震えたのをレイムは見逃さなかった。それに、相変わらずギランはこちらを見ようとしない。

「じゃあ、わたしの方見てくださいよー」

推測が確信に変わったと同時に、胸中に悪戯心が走った。思わずニヤける口元を両手で抑えながら、ギランの表情を見てやろうとちょこまかと動き回る。

「ギラン先輩って照れ屋さんなんですね。また一つ先輩のことがわかりました」

「だから、俺は照れてなどいない！」

「それはわたしの顔を見て言わないと、説得力ないですよ？」

「やかましい！」

必死になっているギランを見て、レイムは声を出しながら笑う。本当に何故自分は彼のことを怖い先輩だと思っていたのか。厳しくて不器用だけれど優しく、こんなに照れ屋な先輩なのに。

(悔しいけど、トーティリアの言った通りだった)

出発前に言われた、本当にギランが恐いのかという問いかけ。そういえば彼女は、物言いこそ高圧的だが、決して嘘は言わない。これで上から目線と立て板に水のごとく捲し立てる自己陶醉の言葉の嵐さえなければ、彼女の言葉に素直に頷いただろうにと思った。

「っ……！ そろそろ行くぞ！ 今度もまた順調に進めるとは限らないからな！」

「あ、先輩待ってー！」

少しからかいすぎたせいか、ギランがずんずんと一人先に行ってしまう。レイムはそれを慌てて追いかける。照れ隠しでどんどん先行するギランのスピードは速く、これでは置いていかれてしまうとレイムは焦った。

「か、からかってすみませんでしたああああ！ だからちょっとゆっくり歩いてくださいいいい！ おいつけませえええん！」

ひいひい言いながら叫ぶと、ギランの身体がピタリと止まった。オリエンテーリングが個人戦ではないことに気がついたのだろう。レイムはふうと息を吐いて、ギランとの距離を縮める。

「……すまん」

「あはは、これでおあいこですね」

やっとの思いで追いつくと、ギランは俯きながら眉間に皺を寄せる。睨んでいるようにしか見えないその表情に、少し前なら竦んだだろう。だが、今は彼が怒っているわけではなく、言葉通り申し訳なく思っているのだとわかっている。だから怖いとは思わなかった。

「あー……その、だな、俺はお前の言うとおりに、そういうこと言われ慣れてなくて――」

「わたしはレイムです」

レイムはギランの言葉を遮り、漆黒の瞳をまっすぐ見上げた。

「わたしにはレイム・リリアーゼという名前があります。一番初めに呼んでくれたときみたいに家名でもいいので、お前とか人称代名詞ではなくて、ちゃんと名前と呼んでください」

レイムは基本的に、他の生徒に関わろうとしないため、どう呼ばれようとも気にしたことはない。それが例えお前だろうが自身の髪を表した『フォックステイル』であろうとも。きつねのしっぽと呼ばれていい気分はしないが、妖狐だとか妖魔だとか呼ばれるよりは遙かにまだ。だが、それなりに親しくなった相手ならば話しは違う。

レイムだって人間なのだ。親しくなった人には名前でも呼んでもらいたい。親がつけてくれたレイムという名前を。

彼のことを怖いと思っていたときは、別にお前と呼ばれても気にしなかった。どうせ一日だけの付き合いなのだし、深く関わりたいとは思わなかったから。しかし今は違う。レイムはギランの人となりを知った。ただ怖い人なのではないとわかったのだ。だから、ギランのことをただ先輩と呼ぶのではなく、ギラン先輩と呼んだ。彼はもう、不特定多数の人間ではない。

ギランはレイムから視線を逸らすと、軽く嘆息しながらも小さくああという肯定の返事が聞こえてくる。レイムはそれだけで嬉しくなって、にっこりと笑った。

「……行くぞ、リリアーゼ」

「はい！」

ぶっきらぼうな声に、レイムは元気よく返事をした。

北門からチェックポイントまで、あっというまだった。道なき道を突き進み、立ち塞ぐ妖魔を片っ端から殴り倒していく様は、まるで台風のように。

「先生！ 課題を教えてください！」

「どわぁ！ セズ・ラッカーノ!?!」

そうしていよいよ一番に北側のチェックポイントに辿り着いたトーティリアは、セズの勢いに圧される教師を見て心の中で同情した。突然草叢から生徒が勢いよく飛び出したなら、誰でも驚くだろう。

トーティリアも草叢をかきわけて姿を現すと、服をはたいて身体についた葉っぱを払う。森の中に整備された道なんてないも同然だが、鬱蒼とした草叢や藪をわざわざ避けることをせずにつっきるのはどうかと思う。おかげで彼の身体には葉っぱや枝の端まみれだ。

「その方が早いだろう！」

そのたった一言により、ひたすらまっすぐ行くことが決定した。トーティリアは彼に自分の言葉が通じないとわかりきっていたため、肩を落としながらもそれに続くしかない。藪や草叢は彼が蹴散らしてくれるため、トーティリアは然程藪や茂みに苦労はしなかったのが唯一の救いか。

「トート、コボルトの尻尾って持ってるか!?!」

「はい？ ああ……課題、ですか」

「そうだ！」

いつのまにか教師から課題を聞き出したセズは、期待の眼差しでトーティリアを見下ろしている。トーティリアは肩から提げている鞆の紐を、思わず握り締めた。

「……わたくしは持ってはおりません。道中見かけはしましたが、まさか課題に出されるとは思わなかったもので」

コボルトとは、学園付近に最も多く生息している犬のような頭部をもった人型の妖魔。背丈は大きいものでも人間の子供くらいで強さも大したことはないが、臆病で残虐な思考を持つ。隙を見せれば襲い掛かってくるくせに、勝ち目がないとわかった途端に逃げ出してしまうのだ。尻尾を獲たければ油断を誘い、そして襲ってきたところを一撃で仕留めるしかない。

「なら仕方ない、今からコボルトを探しに行くぞ！」

「え、あ、ちょっと!?!」

セズはぐるりと身体を反転させ、来た道をどどどどと戻り始める。トーティリアは本日何度目の溜め息を吐いた。彼の頭には既にコボルトを倒すことしか考えていない。だが、臆病なコボルトが爆走するセズを見たら、一目散に逃げ出すだろう。実際チェックポイントまで走っていた間、何頭かの妖魔が襲ってきたがその中にコボルトの姿はなく、逆に少しでも彼から遠ざかろうと、必死に逃げる姿ならば目撃している。

(追い回すのではなく油断を誘えば向こうからやってくると、あの人は知らないのか……?)

いや、相手は仮にも三次生。そんな基礎的なことがわからないわけがない。セズはただ、走り回るのが好きなだけだ

ろう。そうに違いない、いやそうであってほしい。

「トート！」

「きゃああ！」

仕方なく追いかけてきた道に戻ると、近くの草叢から突然がさりと何かが姿を現した。自身の呼び方からすぐにそれが去っていったばかりのセズだとわかるが、不意をつかれて大きく跳ねた心臓は、なかなか平静を取り戻せない。

「せ、先輩……！ コ、コボルトを探しにいったのでは……？」

「ああ！ とってきたぞ！」

「え……？」

セズが得意げに腕をトーティリアの前に突き出すと、その手には獣のような尻尾が握られており、ぐったりした犬頭の人型の妖魔がだらりと力なくぶら下がっている。

「面倒くさいからそのまま持ってきた！」

「……そうですか」

トーティリアはどこからつかめばいいのかわからず、相槌を打つに止めた。コボルトの逃げ足よりも、セズの足の方が速かったのだと結論づける。

「……必要なのはしっぽだけです。斬り落としますので、そのまま持っていただけますか？」

「おう、わかった」

トーティリアはフウと息をはき、腰のベルトに括りつけた剣の柄に右手を添えた。腰を落とし、一度軽く目を伏せてからコボルトの尾と体躯を繋ぐ一点を見据える。

「ハッ！」

一閃。トーティリアの口から迸る気合いと同時に銀色の片刃の刃が抜き放たれる。刹那、ドサリと落ちるコボルトの体躯。セズの手に残った。

「おお、かっこいいな！」

「フ、当然です」

セズの感嘆の声に、トーティリアは剣を鞘に収めながら得意げに頬を緩めた。尾の切断面から血が一滴も滴り落ちないところから、いかに尾が綺麗に切り取られたかがわかるだろう。

「さあ、これを届けて合格をもらいましょう」

「ああ！」

教師の元へ戻り、尻尾を差し出してトーティリア達は無事に合格をもらった。そしてゴールへのヒントとなる文字を教えてもらう。

「最初の文字は『イ』ですか……これだけでは何がなんだかさっぱりですね」

たったの一文字だけで予想なんてつくわけがなかった。もう一つ別の文字が分かれば、少しは予想が立つかもしれない。

「ラッカーノ先輩、次へ行きましょう」
「おう！」

チェックポイントにいた教師にペコリとお辞儀をしてその場を去る。トーティリアは次の目的地を決めるべく、鞆の中から地図を取り出した。

「ここからだ東側よりも西側の方が近いですね」
「なら西側だな！」

言うやいなや、セズは西に向かって走り出した。彼が飛び出すことは予測できていたため、トーティリアは何も言わずに彼の後を追う。

まだ始まったばかりだというのに、こんなに速く走り続けて体力がもつのだろうかという考えがよぎったが、彼の人並み外れた体力を思い出して考えを改める。そしてトーティリア自身も、短期間だが彼の鍛錬に付き合ったおかげで、大分ついていけるようになっていた。

そこまで考えて、もしやセズはそれを見越して自分を鍛錬に付き合わせたのではと思った。オリエンテーリングでもっとも時間がかかるのは、移動だ。その移動時間を短縮できればできるほど、優勝も近くなる。セズの速さにトーティリアがついていけるようになれば、移動時間の短縮による効果は大きい。何も考えず、ただ思いのままに行動しているのだと思っていたが、その認識は間違っていたようだ。

(これでは、わたくしもレイム・リリアーゼのことを言えないな.....)

ギランに対してびくびくと怯えていた少女。自他共に厳しい努力家の先輩が、周囲に『鬼軍曹』と恐れられていることは知っていた。確かに目つきが鋭いせいで怖く見られがちだが、厳しい中に優しさを併せ持つ情に熱い人だとトーティリアは知っている。以前独りで鍛錬をしているとき、偶然出合ったギランに手合わせを請うたことがあった。彼はあっさりとして承し、トーティリアは自身の技をギランに向ける。彼はトーティリアを年下だからと、女だからと侮ることなく一人の剣士として戦ってくれた。そして今のトーティリアに欠けているところの指摘、その後技の鋭さと、相手に立ち向かう根性と度胸を褒めてくれた。このときほど、噂なんてあてにならないと思ったことはない。

そんなギランをただ恐れるとは勿体無いとトーティリアは思ったため、彼が本当に恐ろしいか確かめろと言ったが、人のふり見て我がふり直せとはこのことだ。自分もまたセズの本当の人となりを知りたいのに、全て把握したような気になっていた。お互い数日間の付き合いしかないというのに。

「お、あれは！」
「先輩？」

セズが突然かくんと曲がった。トーティリアは思わず速度を緩め、セズが向かった先を見遣る。セズはすぐに戻ってきた。手に何か植物を掴んで。

「すまんすまん、走ってる途中これが目に入ったものでな！」
「これは.....薬草、ですか？」

握っている植物に、トーティリアは見覚えがなかった。学院では専攻している学科以外にも、基礎教養としての授業がある。戦い方を学ぶだけが実戦を生き抜く術ではない。あらゆるジャンルの知識を学ぶことで、戦略に幅が生まれる

のだ。

その中に薬草について学ぶ学科がある。治癒術を使えるのは才能ある術師に限られているため、戦闘中妖魔から毒を受けたときの解毒として薬草を使わなければならない。トーティリアも当然薬草についての知識はそれなりにあると自負しているが、セズが今持つ薬草と思われる植物に心当たりがなかった。

「ああ、これは薬草だぞ。ヒリングの奴に一度見せてもらったことがあるから間違いない！」

「治癒術科の……そういえばご友人でしたね」

治癒術科に所属している三次生、ヒリング・マレイズ。アナザイル学院の数多くある学科の中で、最も少ない人数を誇る治癒術科に二年以上在席している彼は、学院の中で教師に次ぐ治癒のスペシャリストだ。治癒術はただ魔力で怪我を治すだけでなく、薬草などの植物から薬を作ることもある。魔力による治療ばかりしていると、人体の自己治癒能力が働かなくなるからだ。小さな怪我などは薬草による手当てが主流で、魔力による治療は大きな怪我や急ぎのときに限られる。他の学科でも薬草について学ぶことはあるが、当然治療専門である治癒術科ほどではない。学院の生徒の中で、薬草について彼の右に出るものはいないだろう。ならば、トーティリアが知らない薬草を扱っていてもなんらおかしくはない。

「ってちょっと待ってください。たった一回見ただけの薬草を覚えているんですか!?!」

「うん？ それがどうかしたのか？」

「失礼ですが、記憶違いなどは……ありませんよね？」

「ああ、絶対にこれは薬草だ！」

自信満々に胸を張るセズに、トーティリアは信じられない思いで目を大きく見開いた。

普通、たった一回見ただけで正確な薬草を覚えきれないわけがない。いつ見たのかはわからないが、日が経っていれば経つほど記憶とは曖昧になるもの。特に薬草など、似たような見た目でも全く違う種類のものが数多く存在する。

現に彼が手に持っている薬草も、そこらへんにある雑草と見た目がなんら変わりがない。なのに確信を持って薬草と断言するセズがどうしても信じられなかった。だが、もしそれが本当だとしたら、彼はとてつもない記憶力の持ち主ということになる。

「素晴らしい記憶力ですね……」

「いや、見たものを忘れないってただだぞ。それに教科の授業の内容はさっぱり頭に残らないからな！」

「……」

それを記憶力がいいというのだ、とか、後半は胸を張ってということではないとかつっこみたいことはたくさんあったが、トーティリアは息を大きく吸い込んで吐き出し、言葉を飲み込む。

「……その記憶力があれば、教科も覚えられそうですが」

「うーん。わたし、本を読むと眠くなってしまふんだよなー。先生にもよく叱られるが、こればかりは仕方がない！」

「……勉強が苦手なのですね」

「そうとも言うな！」

しかし、机に向かって本を読みながら熱心に勉強するセズの姿を想像することができないのもまた事実。大きな口を開けながらぐうぐうと寝息を立てている姿ならば、容易に想像できるのに。

だが、机にかじりついているよりも、外で元気よく駆け回っている方がセズらしいとトーティリアは思った。

「本当に……先輩には驚かされてばかりです」

「そうなのか？ わたしは別にトートを驚かせているつもりは全くないぞ」

「トーティリアです。……ラッカーノ先輩のような方はわたくしの周りにはいなかったの、とても新鮮に思えます」
「そうか！」

朗らかに笑う姿は、まるで太陽のように明るい。つられてトーティリアも笑みを返すと、ポンと大きな手がトーティリアの頭に乘せられた。そしてわしゃわしゃと思いつりよく撫でられる。トーティリアはポカンとした目でセズを見つめた。

両親以外に、頭を撫でてもらったという経験がトーティリアにはない。家柄から、一度は寄ってくる人間は多いが、大抵はすぐにトーティリアから離れていく。

理由は簡単、トーティリアが自分自身のことを熱く語るからだ。相手の都合などおかまなしに、一方的に捲し立てる。始めは何人が残っていても、やがてそんなトーティリアに嫌気がさし、次から次へと離れていった。

それについてトーティリアは、何とも思っていない。彼らはトーティリアがスウェムフォードのお嬢様だから声をかけてきたに過ぎなかったのだから。そんな人間を篩い落とすために、トーティリアはわざと、自身のことを熱く語るようにしている。猫を被った人間の本性を出させるために。

その点において、セズは異質だった。一言話した直後に鍛錬に連行され、意識を失うまで付き合わされて。身だしなみに気を遣うトーティリアを何度も何度もボロボロにして。でも不思議と、彼を恨む気持ちは全く沸かない。

「ち、ちょっと！ 先輩！」

「何だ？ 嬉しいか？」

「ちっ、違います！ 髪が乱れるので止めてください！」

「細かいことは気にするな！」

「細かくありません！」

段々とボサボサになっていく髪に我に返ったトーティリアは抵抗を試みるも、セズの手を払う腕に力があまり籠らず、う、と力なく唸った。

セズの言葉通りだったから。わしゃわしゃと撫でる手つきは勢いはあるが優しくもあって。羞恥心からカッと頬に朱が走るが、決して心地が悪いものではない。

そう、嬉しかったのだ。『スウェムフォードのお嬢様』ではなく、『トーティリア』という人間として接してくれることが。ぼろぼろになりながらも彼の鍛錬についていったのも、矜持の高さだけでなく、認めてくれた嬉しさもあったからこそだった。

トーティリアは、自分を一人の人間として扱ってくれる人に対して心を砕く傾向がある。だから自分と真っ向から喧嘩してくれるレイムを見かけると、本人に直す意思がないとわかっていてもくどくど説教してしまう。色憑きの特徴である鮮やかな黄色の髪は、毛量は多いがとても綺麗な髪だとも思っている。なのに彼女は自身の髪に関心がないらしく、ろくに髪の手入れをしていない。魔法銃（ブラスター）の手入れは毎日欠かさずしているくせに、面倒の一言で一向に改善の兆しがなかった。

それでも変わらず言いたくなるのは、それがレイムとのコミュニケーションのとり方になっているからだろう。実際普通に会話することなど稀なことで、彼女とは喧嘩ばかりだ。

そんな喧嘩ばかりする相手を、当然トーティリアは嫌ってなどいない。むしろ本音をぶつけてくる相手の存在は、張り合いがあって楽しいとさえ思っている。

面倒だからオリエンテーリングに参加しないと発言したレイムを挑発し、わざと参加させたのもそのためだ。張り合いのある相手がいるとないのでは、こちらのやりがいも大きく変わる。

それに、レイムもまたトーティリアのことを嫌ってはいないだろう。好かれてもいないのだろうが。

だからどんなに振り回されても、セズのことを嫌いになることはできない。屈託のない瞳を向けてくる彼を見ていると、打算と無縁の強さとはまさしくこのことではないかと思えた。彼の傍は、とても居心地がいい。

「さて、そろそろ行くか！ ついてこいトート！」

「わたくしはトーティリアです！ ああもう髪をなおさないといけないのに……！」

ぶつぶつと言いながらも、前を走るセズの姿を視界に映すと、自然と口元に笑みが浮かぶ。
トーティリアは乱れた髪のまま、あっというまに前進していったセズの後を追いかけた。

「ギラン先輩、この薬草はどんな効果があるのですか？」

「.....これは解熱作用がある薬草だ」

「ギラン先輩、この妖魔の角は何に使うのですか？」

「.....これは鉱石並に硬いから、剣などの武器の素材になる」

「ギラン先輩、今の戦い方どうでした!? いいタイミングでしたよね！」

「まだ一回成功しただけでそんなに喜ぶな。大事なのは次に繋げることなんだから、その動きを忘れるなよ」

「ギラン先輩——」

ギランは困惑していた。レイムはことあるごとにギランの名前を呼び、嬉々として話しかけてくる。

(な、何て返せばいいんだ.....!?)

声を弾ませて聞いてくるレイムへどう反応していいかわからなくて。結果的に、必要最低限の素っ気無い言葉のみを返してしまっている。その度彼女を嫌な気持ちにさせてないだろうかとヒヤリとし、変わらずにこにこと笑っているレイムを見て内心安堵するのを、一体何度繰り返しただろうか。

これがもしも口の達者なネストラートや、穏やかなヒリングだったら、優しい言葉を持って彼女に接するだろう。自分の口下手加減が忌々しい。それがこと戦闘に関することになると自然と口調も厳しくなってしまう。いや、戦いは舐めてかかってはレイムの身に関わるのだから、厳しくして当然だ。と己に言い聞かせる。

せっかく彼女の方から歩み寄ってくれたというのに、これでは怯えられていたときと何も変わらない。ギラン自身が彼女と向き合わなければ意味がないのだ。

ちらりと後ろを見遣ると、何かないかきょろきょろと見回しているレイム。そのうち彼女と目が合いそうになり、慌てて視線を前へと戻す。

彼女の口から紡がれた謝辞の言葉と、浮かべられた笑顔が脳裏に甦る。顔に熱が走るのを感じた。

自分に向けられた笑顔とありがとうという言葉が、嬉しくないわけがない。ずっと怯えられていたのが笑ってくれて、更に優しいなんて面と向かって言われて。

正直いって、満面の笑みを見せながらそんな風に女性から言われたことすら初めてだった。自他共に近づき難い外見をしていると自覚しているギランは、特に同年代から年下の少女に恐れられがちだ。目が合っただけでビクリと肩を震わせ、脱兎のごとく逃げ出されたことは一度や二度ではない。

だから初めて、しかも想いを寄せている少女にそんなことを言われ、ギランは戸惑うしかなかった。彼女を直視することもできなくなって、そのせいで覗き込んでこようとするレイムから必死に逃げまわるという醜態を晒してしまう。羞恥から周りが見えなくなって彼女を置いていきそうになったときも、相当焦った。自身の感情に振り回されたせいで彼女を危険な目にあわせてしまう可能性もあるのだから。この森に棲む妖魔の強さは千差万別。大半は弱い妖魔ばかりだが、中には三次生でもてこずる強さをもつ妖魔も存在している。個体数は圧倒的に少ないため滅多に遭遇することはないが、可能性はゼロではない。だからレイムを一人残してしまうことは絶対に避けなければならないのだ。ギランは改めて心にそれを誓う。

「.....！ 構えろ！」

殺気を感じとり、ギランは後ろにいるレイムに聞こえるように叫ぶと、息を飲む声が聞こえてきた。魔法指輪（マジックリング）から愛用の太刀を取り出す。

——シャアアアアアア！

前方の草叢から飛び出してきたのは、まるで人間のような形を持った太い根。首のようにくびれた先の頭から青々と

した葉を生やしている醜い植物、マンドレイクだ。

人間からしたら手に該当する部分から生えている髭根がこちらに向かって伸ばされ、ギランはそれを一太刀で切り落とす。すぐさまもう片方の手からも同じように伸びた根が襲ってくるが、ギランは同じように全て斬り捨てた。

「今だ！」

ギランの合図と同時にレイムがギランの横をすり抜け、マンドレイクに向かって手をまっすぐ向け、詠唱を始めた。マンドレイクが再び根を伸ばしてくる刹那、レイムは大きく後ろに跳ねて回避する。一拍遅れてドオンという爆発が巻き起こった。

——ジャアアアアアアアア！

「まあまあといったところか」

マンドレイクの絶叫を聞きながらポツリと呟く。そして爆発が収まると同時に地に蹴った。頭から生えてる葉がほとんど散り、人型をとっている根の部分だけが残ったマンドレイクの体に向かって、太刀を薙ぐ。

——ヂイイイイイイイ！

耳障りな断末魔に顔を顰めながら、胴の部分斬られて半分になった身体はがくりと崩れ、地面に横たわり動かなくなる。

「うわー……マンドレイク、初めて見ました。本当に五月蠅いですね……」

レイムが耳を手で塞ぎ、嫌そうに顔を顰めていた。そんな姿でさえ可愛らしいと思ってしまう自分はもう重傷かもしれない。仲間達に知られたら、盛大にからかわれるだろう。今ここにいないことに心から安堵する。

「確かマンドレイクの根って様々な薬効があるんですよね。持ってった方がいいですか？」

「……そうだな、頼む」

「はい！」

レイムがマンドレイクに魔法指輪（マジックリング）を翳し、粒子の粒となって吸い込まれていく。すでに数頭の妖魔をその中へと収めているが、彼女の様子から見て容量の空きはまだまだあるようだ。もしも収めている魔法指輪（マジックリング）がギランのものだったら、もうとっくに限界を迎えているだろう。色憑きの魔力の高さには舌を巻くしかない。

「リリアーゼ、魔法指輪（マジックリング）に余裕はあるか？」

「はい！ まだ全然入ります！」

尋ねると、彼女はぐっと拳を握って魔法指輪（マジックリング）をこちらに見せるように突き上げた。思わずまじまじとその手を見つめる。随分と小さい手だ。自分の無骨な手との違いを感じ、どぎまぎと心臓が音を立て始める。

「……？ 先輩どうかしました？」

「！ い、いや、何でもない！」

その小さな細い手に見惚れてたなどと言えるわけがなく。目を丸くしながらきょとんと首を傾げるレイムから、慌てて顔を背けた。

「っ、行くぞ！ そろそろ次のチェックポイントが見えてくるはずだ」

結局こんなことしか言えない自分が情けない。これが他の仲間達だったなら、彼女へ気遣う言葉だったり気の効いた言葉言ったりするだろう。セズだったら終始高いテンションで引きずりまわすだろうが。

それを想像して、レイムのペアがセズではないことにほっとした。もしもあいつのせいでレイムがボロボロになったなら、絶対殴り飛ばす自信がある。それを考えると、彼女のペアが自分でよかったと思う。怪我をする前に守ることもできるし、彼女のペースに合わせながら進むことができる。

オリエンテーリングで大事なものは、いかに効率よく進むかだ。ただ速く進めばいいという問題ではない。一定のペースを崩さず、遭遇する妖魔の相手をするのは口でいうほど簡単ではなく、しかしそれができなければすぐに体力を使い果たし、リタイアするしかなくなってしまう。

そして更に重要なのが本人のやる気だ。レイムはトーティリアに勝つという目標があり、彼女のペアに勝つには優勝するしかないと聞いてやる気に満ち溢れている。こまめな小休止は必要だが、やる気がなければ必要以上に休んで大幅なタイムロスとなってしまうだろう。

大分歩いたが、今のところレイムに休みたいという意味は見られない。しかし次のチェックポイントを超えたところが、初めの山場となるだろう。休止のタイミングもしっかりと考えておかなければ。

そんなことを考えていると、再び視界にチェックポイントと書かれた大きな幕が映る。漸くみえた二つ目に、ギランは軽く息を吐いた。

「あ、見えました！」

レイムが嬉々とした声をあげ、ギランを追い越してパタパタと駆けていく。無邪気なその姿に思わず頬が緩んだ。

「ギランせんばーい！ はやくー！」

「ああ、今行く」

レイムがこちらに向かって手を大きくぶんぶんと振っている。緩む表情をぐっと堪え、ギランも急ぎ足でチェックポイントの方へ向かった。

そこへ行くと、数組のペアがウンウンと唸りながら本を広げ、そして一枚の紙を睨みつけている光景があった。レイムが担当である教師から紙とペンを受け取り、こちらに向かって駆けてくる。

「先輩！ 今度の課題は『英雄と呼ばれる歴史上の人物を五人以上書け』だそうです！」

「ああ……だから頭唸らせてんのか……」

この世界の歴史は長い。知恵を持たなかった時代まで含めれば、数億年前から存在したのではないかとされている。それだけ長ければ、国と国同士の諍い、つまり戦の数も多く、武功を立てた軍人も多い。

しかしその全てが英雄と呼ばれたのかと聞かれるとそうではなく、ただ勝利に貢献しただけでは英雄とは呼ばれない。例えば圧制を引いていた国から民を解放するために立ち上がった指導者、突然変異で凶暴化し、多くの人間を手にかけて妖魔を討伐した者などが、それに該当する。

しかしここは実戦重視のアナザイル学院。妖魔に関する知識は攻略のためあれど、教わった歴史を把握しているものなど勉強好きな僅かな数しかいないだろう。尊敬する偉人として、一人二人は出てくるかもしれないが、五人となると歴史書なしでは少々厳しい。当然ギランも、ぱっと思い浮かぶのは二人くらいだった。

「早く書きましょう！ 他のペアが書き終わらないうちに！」

「慌てるな。歴史書で調べておくから、先にわかる範囲内で書いておいてくれるか？」

「わかりました！」

ギランは魔法指輪（マジックリング）から歴史書を取り出した。こんな学科問題もオリエンテーリングで出されるため、しっかり用意はしてある。しかし分厚い歴史書の中から人名を辿っていくのは気が滅入った。決して勉強を疎かにしたつもりはないが、実戦にあまり役に立たない知識は記憶に残り難い。それはギランだけに言えたことではなく、頭を抱えているペア達全てに言えることだろう。

「ギラン先輩、とりあえず思いつく限り書いてみたんですが、どうでしょう！」

「どれ……!？」

白い紙の三分の一を占めるところに、走り書きだが名前が書き込まれていた。その数は五つをゆうに超えている。

「えっと、英雄かどうかわからなかったので、知ってる歴史上の人物をとりあえず書いてみました！ 数撃てば当たる、です！」

「お前な……」

単純な考えに呆れながらも、しかし彼女の言うとおりにかもしれないと思いなおした。記憶にある歴史上の人物の名前をとにかく書けば、当たる可能性は上がる。

「それならこれを貸すから手当たり次第それっぽいのを書き込め。とりあえず紙埋め尽くすぐらい書くぞ」

「はい！」

レイムとペンと歴史書を交換し、紙に走らせる。まずは思いつく名前をとにかくひたすら書いた。手が止まったら交代して歴史書で名前を調べ、それを交互に繰り返す。暫くすると紙一面にぎっしりと名前が埋まった。これだけ書けば何とか五人くらい当たるかもしれない。

「こんなもんだな」

「五人当たるといいですね……！」

一面名前で埋め尽くした紙を担当教師に提出し、採点が始まった。当然違っている名前がほとんどで、紅いインクでバツ印を次々とつけられる。そんな中でも、一つ二つと丸がつくものがあった。丸の数は確実に一つずつ増えていっている。

「――正答は七つ。合格です」

「やったああああああ！」

レイムが両手をあげて喜びを露にした。瞬間、後ろから羨まじげな視線を感じ、振り返ると、その視線が一斉に下を向いた。心なしか、彼らの表情が青ざめているのは気のせいだろう。気のせいだと思いたい。

「ヒントもらいました！ さあ、どんどん行きましょう！」

「！ あ、ああ……」

レイムが早く早くとギランの腕を掴み、先を急かす。突然彼女に触れられて身体が思わず固まったギランは、彼女に引っ張られるようにチェックポイントを後にした。

「.....すげえ。フォックステイル、『鬼軍曹』って呼ばれてるギラン先輩の手綱を握ってるなんて.....！」

「もしかして、年下の女の子には優しいのか？ 『鬼軍曹』って.....」

去った後にそんなことを言われていたなんて、二人に知るよしもない。

三つ目のチェックポイントを目指す途中、流石にそろそろ足が痛くなってくるのを感じたレイムは、それをギランに言うべきか否か迷った。確かに疲れてきてはいるが、進むには充分の体力は残っている。それならば、いちいち報告する必要はないだろうか。いや、それとも自分の状況をギランに把握しておいてもらうべく、言うべきか。

心の中でさんざん考えた結果、無理をし続ける方がギランの迷惑になると結論づき、レイムは意を決して告げようとした、そのときだった。

「リリアーゼ、そろそろ昼飯にしよう」

「ふえ？」

かんでいた身体に不意に紡がれた言葉に、思わず変な声が出てしまう。ぱちくりと目を丸くするレイムに、どうした、とギランに問われ、思わず首をぶんぶん横に振って何でもないと応えた。

「そろそろ疲れてきたころだろう？ 休むついでに腹ごしらえだ」

「あ、はい」

疲れたと言っていないのにも関わらず、ギランには疲れているだろうということが見抜かれてしまったらしい。

「あ、あの……どうしてわかったんですか？ わたしが疲れているって……」

「……少し表情に陰りがあったからな。顔に出易いとよく言われるだろ」

「……言われます」

断定口調で言われた言葉に、レイムは苦々しげに頷いた。

レイムは自分の感情の起伏が激しいことを知っている。いいことがあればペアアと顔が明るくなるし、嫌なことがあればあからさまに顔を引きつらせる。表情豊かなのはいいことだが、少しは感情のコントロールができなければ学院の外ではやっていけない、と教師に注意されたこともあった。円滑な人間関係を築くには必要なことだと。

彼らの言いたいことはわかる。だから自分から話かけることはなくても、話しかけられたらその人を無視するなんてことはしないし、するつもりもない。年上や目上の人に対しては丁寧な口調を心がけている。人はお互い係わり合いながら生きていくものだから。

しかし感情のコントロールだけはなかなかできなかった。言われて納得はしたものの、気をつけていてもすぐに表情に出てしまう。図書室で表情に出にくくする方法のかかれた本がないか探したりもしたが、結局見つからなかった。

仕方なくいろいろ詳しくなトーティアに聞いてみたが、彼女の口から出るのは自身を褒め称える言葉ばかり。辟易したレイムは、表情に出さないようにすることを諦めることにした。そんなことよりも、魔法銃（ブラスター）のことを勉強した方がよほど有意義でもある。

ふと、これもまた簡単に諦めてしまっていたことを思い出した。魔法銃（ブラスター）のことに限っては魔弾以外は諦めたことはないが、興味のないことに対する諦めが早い自分に気づく。

思えば幼い頃から、何でもかんでもすぐに諦めていたような気がする。周囲の期待に応えることを諦め、魔力のコントロールをすることを諦め、妖狐という蔑みの言葉に反論することを諦め。

両親は、そんなレイムを一度も責めたことはなかった。彼らが責めていたのはレイムではなく、自分達。自分達が皆と同じように産んであげられなかったから、レイムが辛い思いをしていると。彼らはほぼ毎日のようにレイムを抱きしめながら、謝罪を繰り返した。色憑きは突然変異なのだから二人だって決して悪いわけではないのに。

両親は至って普通の人間だった。落ち込むレイムを逆に叱咤して励ますような強さはなく、また、のほほんと構えるようなお気楽な人間でもない。魔術が使えないことをひたすら責め、暴力を振るうような理不尽な人間でもなく、どうしてこんな娘が生まれてしまったのかと嘆くような薄情な人間でもない。力のない色憑きの娘にどう接すればいいのかわからず、ただ謝ることしかできない普通の人間だった。

そしてレイムは両親を安心させるために、とにかくひたすら明るく振舞った。多少のことで大袈裟に驚き、喜び、また悲しむ。両親も共に喜んだり悲しんだりして、少しずつ家の中が明るくなっていくのを感じた。それに悲しいと思ったときは、我慢するよりも盛大に泣く方がすっきりもする。

きっとそれからだ。ちょっとしたことで一喜一憂するようになったのは。家の中だけでなく外でもそんな風に振舞うようになり、次第に悪意の言葉を聞き流せるようになっていった。そんなことよりも大事なことがあると、前を向けるようになった。

「ぼうっとしてどうした？ 疲れたならば疲れたと言ってくれ。後衛は前衛より体力がないのは当然だろ？ 遠慮するな」

「え、あ、えっと、ちょっと考え事を……」

言葉を途中で途切らせながら、レイムは俯いた。感情が表に出易いのは自分が一番理解している。ならば今、自分の表情は翳っているだろう。それなのに大丈夫と言っても説得力は皆無に違いない。

「その……以前先生にも先輩と同じことを言われて、直そうとしてたのを思い出してました。……どうすればいいかわからなくて、結局途中で諦めてしまったんですが」

これもまた諦めなければ身につけることができるだろうか。もしかしたら、ギランならば何かいい案があるかもしれない。

「ギラン先輩、感情をうまくコントロールするコツって何かありますか？ わたし、思ってることがすぐに顔にでちゃうんですよ」

せめて顔に出ないようにする方法が知りたい。少し期待を込めて顔を見上げると、漆黒の瞳とぱっちり目が合う。するとギランは慌てたようにすぐさま視線を逸らした。本当に彼は照れやだなあと思った。

「か、感情のコントロールは、まず自分を抑えることが大事だ」

「それがなかなか出来ないんですよえ……自分を抑えられたらトータリアと喧嘩なんてしてませんし」

「……時と場所を考えて、自制するんだ。何もずっと感情を抑制する必要はない。今この場で感情を剥きだしにしてもいいの、自分の言った言葉に責任を持てるのかをその場その場で考えてみろ。それが無理なら、心の中で正反対のことを考えて落ち着かせるとかな」

「なるほど！」

感情をコントロールしろと言われ、レイムはずっとそうしなければならぬのかと思っていた。だがそうではなく、その場その場で考えて行動する。少し考えたら思いつきそうであったのに、一人で悩んでいるとそんなことすらも思いつくことができない。人に相談するというのは大事なことだとしみじみ思った。人選さえ誤まらなければ。

「顔にでちゃうのはどうすればいいですかね？」

レイムは自分の頬を手でぐにぐにといじる。感情をコントロールすることが顔に表情がでないことに繋がることはわかるが、それでも顔に出してしまうのは無意識だ。それを直すにはどうすればいいのだろう。

「……顔に出やすいのならば、嘘をつかなけりゃいい」

「へ？」

「感情のコントロールが出来るようになれば自然と減るだろうが、無意識のものを直すのは難しいだろ。なら、裏表な

く嘘をつかない誠実な性格という評価を得られれば、信頼されるようになる。それに……」

ギランが言葉を途切らせてこちらを向いた。先ほど逸らされたばかりの漆黒の瞳が、まっすぐレイムを見ている。

「俺は心と顔の表情が全く違う奴よりも、お前みたいに表情に出やすい奴の方が信頼できるし好感もてる」

「！」

「あ、あくまで俺の主観だがな！」

そういうと彼はそっぽを向いて近くの木の幹にどかりと腰を落とした。こちらを向かないギランの耳が真っ赤に染まっている。レイムはクスリと笑みを零した。

「ありがとうございます、ギラン先輩。大変参考になりました」

「……おお」

ぶっきらぼうな返事を受けながら、レイムはギランの近くに座った。そして魔法指輪（マジックリング）から貰った昼食の箱をとりだし、蓋を開ける。

「あ、サンドイッチだ」

入っていたのは彩り豊かなサンドイッチだ。生野菜とハムに、たまごサンド、フルーツと生クリームを使った甘いものもある。レイムは一つ手にとって口に運ぶと、それで火がついたのか空腹が一度に押し寄せ、気づくとあっという間にサンドイッチは全てなくなっていた。少し物足りないかもしれない。小柄なレイムでもそうならば、大柄なギランには殊更足りていないだろう。

「ギラン先輩、これで足りてます？」

「足りてはいないが、『外』にいるときに満腹まで食うわけにはいかないだろ。動きが鈍るからな。少し足りないくらいが丁度いい」

「ああ、そうですね」

学院も、それを見越して量を調整しているのだろう。それでももし足りなければ、森の中で生えている果実をとったりすればいい。そこは生徒達の自由だ。

「もう少し休んでから出発——」

「！」

ギランとレイムは同時にある一方を見つめた。ザザザザと何かはこちらに迫ってくる音がする。ギランは無言で太刀を取り出し、レイムも同じく弾丸を詰めなおしたルージュを取り出した。

「ギランじゃないか！」

「……セズ」

「はえ？」

がさりと音を立てて草叢から現れたのは、ごわごわとした青みがかった短い黒髪の三次生。ニカリと笑うと、ぴよんとまるで兎のように草叢から飛び出す。

一気に緊張が解け、ギランが大きく息を吐きながら太刀を魔法指輪（マジックリング）へ収め、その場に座り込む。レ

イムもルーージュに戻っていいよと呟き、軽く撫でてからしまった。

「お前かよ。驚かせるな」

「ハハハハハ、すまん！」

セズが笑いながらギランの肩をばしばしと叩いた。いて！ とギランが短い悲鳴をあげる。

(.....ちょっと待って。この先輩がいるってことはもしや.....)

「ラッカーノ先輩、そちらに何か――」

セズが飛び出した草叢から遅れて姿を現した人物に、レイムは思い切り顔を顰めた。腰まである癖のない黒髪に幾つか葉っぱが刺さりながらも、さらりと流れる度に見せる艶やかな光は失っていない。

「.....トーティリア」

「何だ、レイム・リリアーゼではないか」

彼女はレイムの姿をみとめると、偉そうに腕を組みながら片手で自慢の髪をさらりとかきあげる。それに思わずうげ、と低い声を出した。

「うげ、とはなんだ。相変わらず失礼な奴だな」

「ごめんなさいねー。わたし素直だから、思ったことがすぐに口や顔にでちゃうの！」

「それはおかしい。本当に素直ならば、わたくしの美しさに惚れ惚れとするはずだ」

「あんたどんだけ自意識過剰なの！」

「何を言う、わたくしが美しいのは事実だ！」

確かにトーティリアの顔立ちは整っており、少しつりあがり気味の赤茶色の瞳は長い睫に縁取られ、朱華（はねず）色の朱唇は小さく形がいい。しかしその外見のよさも、本人がくどくど語っては台無しになるということがわからないのだろうか。これがもしも謙虚で慎ましやかなお嬢様であったなら、レイムも素直にその容姿を誉めそやすだろうに。

「.....お前達がここにいるってことは、南部のチェックポイントを目指しているのか？」

「ああ、そうぞ！ 次で三つ目だ！」

「三つ目？学院から一番近いところから始めた割に、一番遠いところから始めた俺達と進行ペースが同じって、お前にしては遅いじゃねーか」

この位置からだと、彼らは北にあるチェックポイントから回っていることになる。彼らの進む速さはどう考えても自分達より速い。なのに丁度同じ位の進行ペースということに、レイムも思わず首を傾げた。

「ハッハッハッハ！ 実は先のチェックポイントで、薬草を探すのに手間取ってな！」

「わー！ わー！ ちょっとラッカーノ先輩！ 何他チームに情報を漏らしているんですか！」

「へー、次は薬草がいるんだ。へー.....」

豪快に笑うセズにトーティリアが口を押さえようとするが間に合わず。思わず手に入った情報に、レイムは自身の魔法指輪（マジックリング）を見遣った。進む最中それなりの数の薬草をここに収めてある。進む速さでは彼らに負けるものの、こちらの強みは大量に物を持ち運べることだ。何の薬草を持ってこいと命じられるかはわからないが、魔法指輪（マジックリング）の中に入っていたら、彼らに勝つチャンスは充分にある。

三つ目のチェックポイントを目指しているレイム達と、トーティリア達の進捗状況は今はほぼ同じ。レイムはすくっと立ち上がり、座っているギランを見据えた。

「先輩、今すぐ行きましょう！ 差をつけなくちゃ！」

「お、やる気満々だな、しっぽ！」

「は!？」

レイムは両目を見開き、同時に口もポカンと開く。セズとはほぼ初対面だ。そんな相手に真正面から勢いよく、変なあだ名で呼ばれる筋合いなどない。

「しっぽ……!？ わたしはレイム・リリアーゼです！ そんな変な名前じゃありません！」

「ハハハハハ！ 細かいことは気にするな！」

「ぜんっぜん！ 細かくなーわああああ！ 頭ぐちゃぐちゃにしないでくださいいいい！」

呼び名に対する抗議の声をあげると、突然わしゃわしゃと大きな手がレイムの頭を撫でる。セズの力は強く、撫でる動きに合わせて頭がぐらんと揺れた。

「元気いな！ しっぽ！」

「ふみゃあああああ！ や、やめてくださ……！」

「セズ。嫌がってるだろ。やめてやれ」

「うん？」

ギランの静止の声に掻き回していた手がピタリと止まる。これ幸いとレイムはセズから離れ、ギランの背中に隠れた。

「何だ、頭撫でられるの嫌いか？」

「……力加減を考えてほしい、ということだと思いますよラッカーノ先輩」

成り行きを見守っていたトーティリアが助け舟を出してくれる。彼女は額に手を当てながら、呆れたようにセズを見ていた。

そういえば彼女も、トートと勝手に名前を省略され、その度憤っていた。こんな気持ちになるのならば、トーティリアの訂正したくなる理由もわかる気がする。

「せっかく珍しく自分の力で整えた髪が滅茶苦茶ではないですか。……レイム・リリアーゼ、こちらへ来い。わたくしが結い直してやる」

「……」

相変わらずトーティリアの物言いは偉そうだったが、確かに今のレイムの髪はぐちゃぐちゃで、結んでいるリボンが解けつつある。レイムはじっとギランの後ろからセズを警戒する。そして身構えながらゆっくり動き、トーティリアの方へと移動した。彼女の言葉に素直に従うなんて、自分でも珍しいと思いながら。

「じっとしている。すぐ終わるから」

「……」

トーティリアがレイムの髪に触れる。その間も、ずっとレイムはセズをじとりと睨みながら動きを警戒し続けた。

「よしできた」

「……ありがとう」

彼女に一言礼を言いながら、再び身構えつつギランの後ろへと戻る。

「何だ、仲が悪いと聞いてたけど、仲いいじゃないかお前達」

「別によくありません！」

「彼女の髪を結うのはただの日課ですから。それだけです」

「そうなのか？」

打ったら響くかのごとく二人はセズ言葉にそっけなく返事をした。それにきょとんと首を傾げるセズ。

トーティリアのことを好いているかと聞かれたら、レイムはキツパリ好いてはいないと否定する。だが嫌いかと聞かれても、同じように否定するだろう。立て板に水のごとく捲し立てられる自慢の数々は聞くに堪えないし、上から目線はどうあがいても好きにはなれない。だが、不思議とそんな彼女を嫌いにはなれなかった。

しかし顔を合わせればほとんど喧嘩ばかりだ。まともに話すことの方が少ない。そんな自分達の仲がいいわけがないだろう。

「仲よくないのか？ 仲が悪いより仲がいいほうがいいと思うけどなあ」

「そんな簡単な問題でしたら、人間関係で悩む人はいなくなりますよ」

トーティリアが嘆息する。レイムもコクリとそれに無言で頷いた。

正直いって、セズの心証は最悪だ。フォックステイルと呼ばれていることは知っているが、自分の目の前でその名前を口にする者はまずいない。その上体がぐらぐら揺れるほどの力で頭を撫でられれば、レイムでなくとも警戒するだろう。

「でも、ギランには懐いてるみたいだな。よかったな！ ギラン！」

「いてっ！ 叩くな馬鹿力！ お前はもっと加減というものを知れ！」

セズは再びニカリと笑いながらギランの肩を叩く。ギランは叩かれた瞬間苦痛に目を細め、冗談ではなく本当に痛いのだということがわかる。鍛えられた身体を持つギランでさえ痛がるということは、それだけセズの力が強いということに他ならない。レイムは悍ましさに身体が震えた。

「オリエンテーリング開始前はめちゃくちゃ落ち込んでたから心配したぞ！ 仲良くなれてよかったな！」

「っ！ うるせえ！ 余計なことを言うな！」

それを聞いてレイムは顔を俯けた。今思うと、あのときは本当にギランに失礼なことをしてしまったと思う。ペアを組むことになった相手から一方的に怖がられて、傷つかないわけがない。

「あの、あのときは本当に申しわけありません。ギラン先輩のこと、よく知りもしないのに噂を聞いて勝手に怖がってしまって……」

その謝罪は既にしたが、申し訳なさが募って再び口にする。突然謝りだしたレイムに三次生の二人はポカンとするが、俯いているレイムにはそれがわからない。

「でも今は、ギラン先輩のこと怖いって思ってますから！ 確かに怖い顔をしていらっしやるとは思いますが、優しい先輩だってわかってますから！」

両の拳を握りながら顔をあげると、何とも微妙な顔をしたギランの表情が目に入る。引き結ばれた口の端は僅かに下を向き、漆黒の瞳もまた左下を向いている。

「？ ギラン先輩どうしました？」

「.....お前は先輩を貶したかったのか褒めたかったのか、どっちなんだ」

「はあ？ わたしがどうして先輩を貶さないといけないの!？」

呆れた口ぶりのトーティリアに、レイムはまるで毛を逆立てるかのように食って掛かる。

レイムの真紅の瞳とトーティリアの赤茶色の瞳は鋭く細められ、互いの視線の先が絡むとバチバチと火花が散った。ギランへの申しわけなさはすっかり消えうせ、トーティリアへの反抗心がむくむくと膨れ上がる。

「フォトグリス先輩のことを優しい方だと評するなら、怖い顔をしているというのは別にいらないだろう！」

「だって事実じゃない！」

「確かに事実だが、その事実が時として人を傷つけることもあるんだ！」

暫くレイムはトーティリアと睨みあう。だからレイムは、ギランが近くの木に手をつき、こちらに背を向けてどんよりと暗い空気を纏い始めたことに気づかなかった。

「俺の顔はそんなに怖いか？ 怖いのか.....？」

「今更だなー、ギラン。それにしてもー」

ぎゃあぎゃあと言い争う気配が止まない二人を見て、セズは口の端をつり上げる。

「やっぱり面白いな！ お前達！」

「はい？」

「お前.....たち？」

セズが腰に手をあてながら大きく笑うと、二人は言い争いをピタリと止めて、セズの方に身体を向けた。刹那、がしつと頭を大きな手でつかまれる。嫌な予感に冷や汗が流れ、その予感はすぐに的中した。縦横（たてよこ）斜めと、思い切り頭がぐらぐらと揺れ始める。

「きゃあああああ！」

「ふぎゃああああ！」

「喧嘩するほど仲がいいってまさにお前達のことだな！ ハッハッハ！」

「やめ、やめてくださいラッカーノ先輩！ ちか、力加減を考えてほしいと、先ほど、申したではありませんか！」

「頭がああああ！ ぐらぐらするうううう！」

「わははははは！」

ひとしきり頭を撫でると漸く満足したのか、頭から手が離れた。レイムは未だぐらぐらとする頭を抱える。

「き、気持ちわるっ.....！」

「うっ.....流石のわたくしも、気分が.....」

「ははははは！ お前達、気持ち悪がるより先にすることがあるぞ！」

誰のせいだ、誰の。と口にしても、細かいことは気にするなと返されるのがオチだろう。レイムはぐっと口を結ぶと

、セズがある方向を示した。そこには暗い雰囲気を感じたギランがいる。

「お前達が顔が怖いと言うから、ギランがすっかり落ち込んでしまった。わたしは今更だと思うが、本人が気にしているみたいだから、これからは言わないでやってくれないか？」

「！ す、すいません！」

セズの言葉にレイムははっとして頭を下げる。先ほどの言葉に何故ギランが微妙な顔をしていたのかが漸くわかった。

「まさかギラン先輩がそこまで気にしてたなんて思っていなくて……本当にごめんなさい！ 今後は絶対に言いません！」

「わたくしも彼女を諫めるつもりが、同じく失礼を働いてしまいました。フォトグリス先輩、大変申しわけありません」

レイムに続いてトーティリアも頭を下げ、深々と謝罪する。これからは絶対にギランのことを怖い顔をしていると言わないように気をつけなければ。

「あ、いや……何もそこまで——」

「よし、そろそろ出発するぞ、トート！」

ギランの言葉を途中で遮り、セズが豪快に笑いながらレイム達が来た方角をびしっと指を差す。なんてマイペースな人なんだと、レイムは自分を棚にあげて思った。

「いっくぞー！ 付いて来いトート！」

「だからわたくしはトーティリア……先輩、早いです！ お待ちください！」

茂みをものともせず突き進むセズを、トーティリアは追いかけた。ザザザザという掻き分ける音が次第に遠くなっていく。

「は！ 先輩、わたし達も行かないと！」

「そうだな……だがその前に、髪を結び直すといい。セズのせいでまた緩んでいる」

「うわああああん、馬鹿力先輩のバカあああああ！」

レイムは緩んだリボンを解いて手櫛で髪を簡単に梳く。トーティリアのように綺麗にとはいかないが、それでもぼさぼさのままよりは数段ましになった。急いで髪を纏め、結び直す。

「……悪いな。セズは大雑把な奴だが、悪い奴じゃない」

「……そうですね。ギラン先輩に謝るように促してくれましたもの。それもわたし達が悪いと責めませんでしたし」

先ほどのレイムとトーティリアの態度は先輩に向けるべきものではなかったのにも関わらず、セズは決して『謝れ』とは言わなかった。かつ、レイム達が自然と謝れるようにしてくれた。

「トーティリアの振り回されっぷりから、ずっと周りのことなんておかまいなしな先輩だと思ってましたけど……優しいところもあるんですね」

「ああ……あいつの持つ根っからの明るさも含めて、格闘術科の後輩からは慕われている」

「……鍛錬には絶対付き合いたくはないようですが」

「あの体力バカについていくのは、並大抵のことじゃないからな。それにしても……」

「にゅ？ なんですか？」

ギランがじっとレイムを見下ろす。レイムはきょとんと首を傾げた。

「お前はスウェムフォードと仲が悪いと聞いたが、別に嫌っているわけではないんだな」

「え？ あ、はい、そうですね……。仲がよくはありませんが、嫌いではないです」

本当に嫌いな相手だったら、髪に触られるのも嫌はず。だが、トーティリアに触れられても嫌悪感は湧かなかった。

「毎朝しっかり身支度をしろって口うるさいし、自慢がうっとおしいって思うこともあるんですけど……なんだかんだで、わたしのことがほっとけないのでしょうか。わたしにそんなこというの、トーティリアだけですもの」

レイムには親しく話す友人というものはいない。同学年の少女達と話したことがないわけではないが、彼女達がレイムに一番初めに尋ねることは、皆同じだった。

『どうして色憑きなのに、魔法銃（ブラスター）科に所属しているの？』

だからレイムは、彼女達と仲良くする気がおこらなかった。

確かに魔力が人よりも少ない者が使用する武器を、膨大な魔力を持つ色憑きが愛用していたら疑問に思うのは普通だ。頭では理解できる。だが、抑えきれない好奇心の光が見えたとき、レイムは失望した。蔑まれることはなくとも、ここでもまた奇異の目で見られるのかということに。現に、『魔法銃（ブラスター）が好きだから』と応えると、どこかがっかりされたような顔を返される。一体どんな大層な理由を想像していたのか知らないが、それだけでレイムには仲良くする必要はないと判断するのに充分だった。

そんな風に素っ気無く返しているうちに、レイムに関わる生徒は減っていった。魔法銃（ブラスター）にしか興味のない、変わり者のフォックステイルという名前が広がりつつあったが、奇異の目で見られることには慣れている。それに魔法銃（ブラスター）にしか興味がないのは本当のことでもあったから、訂正するつもりもなかった。

トーティリアと初めてあったのは、特に何の変哲もない朝のこと。いつものようにギリギリまで眠っていてボサボサの髪のまま部屋を出たとき、突然声をかけられた。

「レイム・リリアーゼ！」

「……ふにゅ？」

教師以外にフルネームで呼ばれることが珍しく、レイムは寝ぼけ眼のまま振り返る。そこにいたのは、さらりと音を立てそうなほど癖のない美しい黒髪を持った少女だった。整った均整のとれた顔立ちと、つりあがり気味の赤茶色の瞳を縁取る睫はとても長い。規定の制服をビシッと着こなす姿はまさしく『美少女』そのもので、レイムは思わず彼女に見惚れた。特に髪が綺麗だ。まるで夜のように黒一色であるというのに、重く暗い雰囲気はない。

レイムがどんなに望んでも手に入らない深遠の黒が、そこにあった。

しかし次の瞬間、レイムは少女に胸倉をぐいっと掴まれる。思わずぐえっという呻き声が漏れると、憤りを露にした少女と至近距離で目が合った。

「そんなだらしのない格好で外を歩くとは何事か！ きちんと髪を結うなら結え！ なんだそのぼさぼさ頭は！」

「うみゅ……だって時間なくて……」

「だってではない！ ああもう後ろを向け！ わたくしがやってやる！」

「うみゃああああ！」

有無を言わせず彼女はレイムに後ろを向かせ、がし、と髪を掴まれる。乱暴な手つきとは裏腹に、ぼさぼさの髪は綺麗に纏まっていった。そして完成すると、レイムは思わずおおと感嘆する。あつというまに整えられた髪に触れると、彼女のようにさらさらではないものの、とても指どおりが良かった。髪を梳かすとこんなに触り心地がよくなるのだと初めて知る。

「えっと、ありー」

「フ、入学してすぐに頭角を現したこのトーティリア・スウェムフォードの手にかかれれば、これきしのことぐらいどうということはない。トップの成績で入学を果たし、剣技においても他の追随を許さない腕前を持つのだから！」

「……」

整えてもらったお礼を言おうとした途端、捲し立てるように並べられた自画自賛の言葉、言葉。

トーティリアというらしい少女へ湧いた感謝の気持ちだが、一気に冷めた。得意気に逸らされた胸に鞆を持つ手を腰にあて、もう片方の手で髪をさらりと掻き揚げる姿は『ナルシスト』としか言いようがない。

変なのに絡まれてしまった。そう思ったレイムはくるりと踵を返し、急いでその場を走り去る。

「この優秀なわたくしがーって、レイム・リリアーゼ!? どこへ行った！」

離れたところからそう聞こえる声に、逃げたのは正解だったと悟る。

そしてその日からトーティリアとの奇妙な関係が始まった。時に逃げ、時に大喧嘩を繰り返す毎日。

一対一で喧嘩をしたのは始めてだった。陰口に対して怒りを返すのとは違う。トーティリアは確かに態度こそ高圧的ではあるが、決してレイムを見下してはいなかった。色憑きなのというお決まりのことも言わない。彼女はレイムを、レイム・リリアーゼという一人の人間として扱っている。だからレイムも、彼女のことをトーティリアと名前で呼んだ。個として扱ってくれる彼女に対しての礼儀として。

嫌っていないと言えるのに素直に好きだとは言えない理由について、おおよその見当がついていた。彼女の捲し立てる自慢話もそうだが、それだけではない。自分はきっとー

「羨ましいんだと思います、トーティリアが。わたしにないもの、いっぱい持ってますから」

「ないもの？」

「はい。例えば……彼女の黒髪。小さいころ、どれだけ望んだかわかりません。自分の髪の色を恨むことさえありました」

色憑きは髪の色彩が通常とは異なるから、色憑きと呼ばれる。ならばこの髪が回りと同じく黒や茶色だったなら、色憑きなどと言われずに済んだらう。

「今ではそんなこと望んでも無意味だし、この髪の色のことを恨んではいませんが……でも、やっぱり羨ましいって思うことはあります。彼女の髪を見ると特に。それに自分で言ってるように綺麗だし」

自分もこんな髪を持ちたかったと。もしもレイムの髪がトーティリアと同じように、黒く美しい髪だったなら、髪の手入れをしっかりとしようと思っただろうか。

「それと、トーティリアって絶対嘘は言わないんですよ。自己陶醉の言葉の数々も、自分に対する確固たる自信があるからこそ出てくる言葉で、ただの口だけの奴じゃないんです」

本当にただの口だけの人間だったなら、人間離れした体力の持ち主であるセズの鍛錬についていくことなどできはしないし、あんなにポロポロになるまでついていこうとなんてしないだろう。それに口ぶりからして、ギランもまたトーティリアを認めている。戦いにおいて厳しいところもある彼が、口だけの人間を評価するとは思えない。

「わたしも強くなりたいんです。誰になんと言われても、前を向き続けられるような強さが。昔よりはだいぶ強くなったなあとは思ってますが、それでもまだまだです。でも、彼女には既にそれがあります。だから羨ましくてたまらない」

トーティリアはどんなときでも背筋をまっすぐ伸ばし、堂々としている。それはまさにレイムが望んでいた強さだ。影で言われる口さがない言葉に怯まず、決して卑屈にならず、自分らしく生きている。

本人の前では、絶対言わないけれど。

「.....足りないと思えば、その分努力すればいい。全ては自分の心次第だ」

「はい。強くなることも、魔力のコントロールもがんばります！ それに、魔力を上手くコントロールできるようになれば、魔術で髪を染めることもできるようになるかもしれませんし」

自分でも自信が持てるほど心に余裕ができれば、魔術の練習も前向きに出来るようになるだろう。そして魔術が使えるようになれば、目立つこの髪の色を黒く染めることができるかもしれない。

この髪もトーティリアと同じで、嫌ってはいないが好いてもいなかった。初対面の相手が髪を見て驚くのは日常茶飯事で、正直うっとおしい。髪の色が周りと同じになれば、レイムを見て驚く人間はいなくなるはず。

「.....黒く染めたいのか？」

「できれば。それに色憑きは、普段髪を魔術で染めているそうですよ。目立ちますからね。わたしみたいに、魔術が使えなくてそのままにしてある方が珍しいと思います」

黒か茶色い髪が多い中で、赤青黄色のような髪は当然目立つ。だから外出するときなど、余計な注目を浴びるのを防ぐために、髪を黒や茶色に染めるらしい。レイムに魔術を教えようとした教師が言っていた。結局できなくてさじを投げられてしまったが。

「.....もったいないな」

「へ？」

「目立つ色彩は確かに妖魔から発見されやすいというデメリットがあるから仕方がないが.....花のように綺麗な色をしているのにな」

「ええ!？」

レイムは思わずギランを凝視した。そんなこと、初めて言われた。狐の色に喩えられることはあれど、花の色に喩えられたことなんてない。綺麗だと褒められたことだって。

「！ い、いや、その.....と、特に他意はないんだ！ わ、忘れてくれ！」

本当に言葉どおり、心と思ったことを口に出したのだろう。少し経ってから自身の発言の内容に気づいたのかカッと顔に朱が走り、バツとレイムに背を向ける。

レイムはポカンとギランの大きな背中を見つめた。次第に顔が熱くなっていくのがわかる。そっと自分の頬に触れると

、やはり熱くなっていた。

嬉しかった。髪の色彩を褒めてもらえて。レイムは背を向けてるギランの正面へと移動し、真っ直ぐ顔を見上げた。

「とても嬉しかったです、ありがとうございます！ だから忘れるなんて無理です！」

「――！」

満面の笑みを浮かべて礼を言いつつも、途端に羞恥が胸中を襲ってレイムはパッと顔を逸らした。

「さ、さあそろそろ行きましょう！ トーティリア達に負けてしまいます！」

「あ、ああ、そうだな」

多少のぎこちなさと気まずさを残しつつ、二人は西にある三つ目のチェックポイントを目指した。

焦った。まさか自分があんなことを口走るだなんて思ってもいなくて。ただ、レイムが髪を黒くしたいと言ったとき、本当にもったいないと思ってしまっただけなのだ。赤みある鮮やかな黄色の髪は、とても綺麗だから。それに初めて彼女の姿を目にしたとき、夕日を髪に映して真っ赤に染まっていた髪もまた、綺麗だった。確かに見ようによっては周りが言うように、狐のような色合いに見えなくはないが、ギランにはそのときの印象の方が強く、フォクステイルという彼女の通り名にはずっと違和感を覚えていた。それは森の中に入ってからより顕著なものとなる。

森の中は当然雑草が生い茂り緑で溢れかえっていて、そんな中で一人鮮やかな色彩を持つ彼女の髪は、まるで野に咲く花のよう。南東のチェックポイントを目指している最中彼女が見つけた、小さな黄色い花卉がついた花と同じような。

ポロっと口に出てしまった言葉を、レイムが好意的にとってくれたのは唯一の救いだろう。ここにもしズやネストラートなどの友人達がいたら、似合わないことを口にするなど顔を顰められるのが目に見える。同じようなことをレイムの口から言われたら、それだけで相当落ち込む自信があった。

「あ、先輩見えてきました！ 三つ目のチェックポイントです！」

最早お馴染みとなったでかどと張られた幕が視界に映り、ギランは内心息を吐く。セズが漏らしたため薬草が必要だということはわかっているが、一口に薬草といっても種類は豊富にある。切り傷を治すもの、熱を引かせるもの、解毒作用のあるものなどなど。それぞれ効能が違うのだ。そしてこの森の中にはいたるところにあらゆる薬草が生えている。セズ達がここで探すのに時間がかかったというのも頷けた。

少し進むと、腰を屈めながら生えている草を舐めまわすようにじろりと睨みつけているペアの姿がちらほら見える。彼らもまた、課題の薬草を求めて探しているのだろう。通りがけに見つけた薬草は余裕があるからと全てレイムが所有しているが、その中にあれば他のペアに差をつけることができる。しかしギランは軽く首を横に振った。そんな都合よくいくわけがない。

「せんせー！ 課題は何ですか!?!」

担当教師の元へ辿り着くなり、レイムはずいっと教師に顔を近づける。確か彼は薬草学を専門とする教師だ。ヒリングと一緒にいるところを何度か見かけたことがある。

薬草学の教師は勢いに多少気圧されながら、懐から一枚の紙を取り出し、それを恐る恐る開きながらレイムに見せた。気の弱い教師だ。

「か、描かれているこの薬草を持ってきてください。それが課題となります」

ギランも遅れて教師の持つ紙をレイムの後ろから見た。

そこに描かれていたのは、小さな黄色い花卉のついた花だ。どこにでもあるような茎には特に特徴がなく、花だけが唯一の見分ける方法と言える。しかし、どことなくこの花には見覚えがあった。思わず顎に手を当て目を細める。その瞬間教師がピクッと肩を震わせたのを、ギランは気づかないフリをする。彼に怯えられるのはこれが初めてではない。

「あー！ これキイロツユクサだ！ ですよ、先生!?!」

「え、は、はい。そうですね」

「わたし持ってます！ 持ってます！ 今出しますね！」

興奮するレイムを見下ろしながら、あのときの花かと漸く思い出す。魔法銃（ブラスター）の弾丸の材料になると嬉々としていた姿も同じく思い出した。花粉には痺れる成分が含まれているのだと、嬉しそうに語る姿と効能の違いが大き

ぎて、彼女から話しかけてきたにも関わらず、勝手に離れたことを咎める気が失せてしまったのも、記憶に新しい。

「その花……花粉を吸い込むと痺れるそうですが、薬になるのですか？」

「え、ええ。花粉は確かに害がありますが、花卉が反対に痺れを治す成分が含まれておりまして……煎じて使うことで効果が発揮されます」

そういえばヒリングが以前、薬となる植物と毒になる植物は紙一重だと言っていた。毒から新たな薬が生まれることもあり、毒草も毒草でただ害になるだけではないようだ。

小さく可愛い花の花粉に痺れを催す効果があることに驚きはしたものの、逆に薬草としての効能も備えていたことに、どこかほっとする自分がある。

それは恐らく、この花の色がレイムの髪と似た色をしているからだろう。知らず知らずのうちに、彼女と花を重ねてしまっていたようだ。

植物にすら、毒になったり薬になったりという二つの面がある。ならば人間である自分達は、それ以上に様々な面があるだろう。

例えば自分。周囲に『鬼軍曹』と恐れられ、仲のいい友人以外や一部の教師を除いて皆に敬遠されている。しかしその実態は、睨んだつもりはないのに睨まれたと身体を竦ませられ、普通に話しかけただけなのに威圧感を感じるかのようにならざるを得ないという、周りの勘違いからくるものだ。

そしてレイム。彼女は自身の魔法銃（ブラスター）に女性の名前をつける程の魔法銃（ブラスター）愛好家だ。人間のことを歯牙にもかけない、魔法銃（ブラスター）のみに情熱を注ぐ変人という噂が流れていると、ネストラートから聞いたことがある。だが実際は、多少マイペースなところはあれど、目上に対しての礼儀はわきまえているし、ギランの言葉にきちんと耳を傾けて聞き入れる素直な少女だ。それに人間のことを何とも思っていないのならば、ギランを恐れることもなく我が道を行くだろう。

別の一面を知るには対象に興味を持ち、知ろうとしなければ見えてこない。それが人間であろうと植物であろうと。

今日のオリエンテーリングで直接話すことで、レイムの人となり詳しく知ることができたと思う。彼女のことを調べたネストラートから大体のことは聞いていたが、人から聞くのと実際話して知るとでは、やはり印象は違った。

レイムは単純な性格とネストラートは評したが、言い換えれば、切り替えが早い。引きずることもあるのだろうが、初めて話しかけたときはあれだけ自分のことを怖がっていたのに、今はおくびにも出さない。本当にもう怖いと思っていないのだろう。浮かべる笑みに屈託はなかった。顔は怖いとは思っているようではあるが。

そして彼女は非常に感情豊かだ。怖いと思ったら盛大に怯え、嬉しいと思ったら心から喜びを露にする。怒りを覚えれば顔を顰め、悲しいと思えば震えた声をあげる。どんな表情を浮かべても、大抵が睨みつけているようにしか見えないギランにとってはすごい一言しかない。よくぞそこまでころころと表情が変わるものだ。

ギランもレイムほどは無理でも、もっとわかりやすく表情に出たのなら、『鬼軍曹』と恐れられることはなかっただろう。しかし目つきの悪さは生まれつきだ。ギランのせいではない。

それにギランの周りにはネストラートを筆頭とした友人達は、皆一癖も二癖もある者達ばかり。表情と考えていることが違うなんてことは当たり前で、何を考えているのかわからないときもある。セズとて見たままの単純馬鹿ではない。あれでもいろいろ心の中で、自分がどう動けば最も上手くいくか計算しての行動だったりする。ただ、本人にその自覚はないらしいが。

ギランとて皆と同じく腹に一物を抱えることはある。思っていることとは別のことを口に出すことも。それは生きていく上で必要なことであり、決して卑下することではない。だが、良くも悪くも正直すぎる少女には、そうなってほしくはないなとも思ってしまうのも事実だった。

「これで課題クリアですね、ね！ ヒント下さい！」

「は、はい、ですがその前に……キイロツユクサをこちらでお預かりしても——」

「え、それは駄目です！ オリエンテーリングが終わったらわたしが使うんですから！ 新しい弾丸……誰で試そうかなあ。この間はリエラだったからルージュ……ああ、でも最近ラーナで試し撃ちしてなかった。ラーナもいつもと同じ弾じゃ飽きちゃうよね。よし、ラーナで試そう！」

「.....それでは仕方ありません」

既に自分の世界へと突入したレイムは、教師の話聞いてはいなかった。

恍惚の表情を浮かべながら、取り出したキイロツユクサを再び自分の魔法指輪（マジックリング）の中へと収めている。

教師はとても残念そうにそれを見つめた。どうやら自分が必要とする薬草を課題に選んでいたらしい。持ってきたものの処分は、生徒がいなければ教師が好きにしていいため、いないといわれたキイロツユクサを薬に変えるのも教師の自由だ。煎じなければ使えない薬草など、持っていても意味がないためほとんどのペアは彼に預けるだろう。それを利用して課題の内容をキイロツユクサにしたに違いない。気が弱そうに見えてちゃっかりした教師だ。個性が強いアナザイル学院の生徒を指導する教師なのだから、それくらいでなければ勤まらないのだろうが。

うっとりとしているレイムに変わり、ギランが彼からヒントを聞くために体を向けるとピクッと肩が跳ねる。思わず顔を顰めてしまい、彼の顔が青ざめるが「ヒントをください」と一言いうと、彼は慌てながらも教えてくれた。

「ヒントを貰ったから行くぞ、リリアーゼ」

「あ、はい。わかりました！ これであと二つですね！」

あっさりとヒントを貰えた自分達に、まともや羨望の眼差しが周囲から注がれる。しかしギランがちらりとそちらを見遣るだけでそれはパッと逸らされ、慌てたようにキイロツユクサどこかなあーというわざとらしい声が聞こえてきた。自分はやはり彼らからしたら、とって食われるような恐ろしい存在なのだろうか。

「先輩はやくううう！」

「.....今行く」

レイムは既に北にあるチェックポイントを目指すべく移動している。チェックポイント付近では素早くなるのは、興奮が抑えられないからだだろう。トーティリアに勝つべく志気が上がっているに違いない。輝く真紅の瞳を見てギランは軽く目を伏せると、口元が緩むのを感じた。

他の誰に怖がられても、彼女が自分に対して普通に接してくれることが、何より嬉しかった。

「ま、また時間がかかってしまった.....」

南方面の次のチェックポイントで、英雄と呼ばれる歴史上の偉人の名を書けという課題。学問においては全く役に立たないセズに期待することはできず（実際彼は考え込んでいるうちに居眠りをはじめた）、トーティリアは今まで学んできた歴史についての記憶をできる限り呼び覚まし、何度もバツをもらいながら漸く合格がもらえた。時間がかかってしまったのは、他のペアのように歴史書を持参していなかったためだ。セズに歴史書を持っているか尋ねると、彼はあっけらかんと笑いながら、ない！ と思いつりよく言い切り、トーティリアは脱力した。そんなことをいい笑顔で言い切らないでほしい。

（三回目ともなればわざわざ言わなくても何冊か教材を持ってきてくださると思っていたのに.....！ やはり言うべきだったか.....）

そんなことを思っても後の祭り。残る二つのチェックポイントでは学科系の課題が出ないことを祈るばかりだ。

トーティリアは次なるチェックポイントへセズと向かいながら、自身の肩にかかっている鞆を見て口を引き結んだ。オリエンテーリングに参加した生徒の中で、いや、アナザイル学院に所属する生徒の中で、鞆を使っているのはトーティリアだけだろう。

手の平に剣胼はあっても、指には何も嵌められていない。

誰もが普通に使っている魔法指輪（マジックリング）を、トーティリアだけは使っていなかった。

「よし！」

前を走るセズが突然ピタリと止まった。まだ次のチェックポイントまで辿り着いていない。妖魔の気配も感じず、特に珍しい植物が回りに生えているわけでもなかった。困惑していると、セズはくるとトーティリアの方を向き、

「飯にしよう！ 腹が減った！」

「.....了解しました」

セズは地面にドカリと座り、魔法指輪（マジックリング）から配布された昼食を取り出す。トーティリアは近くに座れるようなところを探したがそんなところはなく、仕方なく鞆からハンカチを取り出して地面に広げ、その上へ座った。

昼食の入った箱を取り出し、膝の上に置く。彩り鮮やかなサンドイッチが目を楽しませるが、なかなか手が伸びない。レイムに勝つためには、休息も的確にとらなければならないのだから、今必要なのは頭ではわかる。だが、どうしても食欲が湧かなかった。

「トート、どうした？ 食わんのか？」

「その.....食欲が.....」

「それはいかんな。半分は超えたとはいえ、まだ先がある。優勝するには飯はしっかり食わないとだめぞ！」

そういうセズの昼食の入った箱は、既に空になっていた。彼の運動量と、配られた食事の量を考えると、これだけで彼の空腹が満たされたとは到底思えない。

「.....先輩、よろしければわたくしの分を召し上がりますか？」

「何言ってるんだ。それはトートの分だろう？ ーわたしは近くで少し木の実を探してくるから、お前はしっかりそれを腹につめるんだ。優勝したいんだらう？」

「.....はい」

そういうとセズは軽い足取りで、行って来る！ と木の実を探しに行ってしまった。やはり物足りなかったのだろう。だから食べてもいいと言ったのに、彼はもう探しに行ってしまった。

しかしセズの言うことは尤もだ。優勝するにはしっかり食事はとらなければならない。そのまま走り続けたら、きっとスタミナが持たず途中で倒れてしまうだろう。

身体が資本。基本中の基本だ。

トーティリアはサンドイッチを一つとり、口元へ運ぶ。気が重くて食べる気はしなかったのに、身体はやはり栄養を求めていたらしい。気づけばパクパクと次々サンドイッチを口に放り込んでいた。

「お、全部食べたか！ 偉いぞトート！」

箱の中身が空になったとき、セズが意気揚々と戻ってきた。トーティリアの前にしゃがみ、ポンと頭におかれる。

「子供扱いするのはやめてください！ それとわたくしはトーティリアです！」

「細かいことは気にするな！」

「.....はあ、もういいです」

彼のこの台詞が出たらもう理解してもらうことは無駄だと思っていい。何度言っても訂正されない呼び名がそれを証明している。頭に寄せられた手を振り払おうとしながら、トーティリアは溜め息をついた。

セズはそんなトーティリアの頭から手を離すと、鼻歌を歌いながら魔法指輪（マジックリング）から鮮やかな黄色の果実を取り出した。その色彩に思わずレイムの姿が脳裏によぎる。

彼女ならば、きっと重い教材だけでなく倒した妖魔の遺骸すら持ち運んでしまうのだろう。色憑きであるが故の膨大な魔力は、魔法指輪（マジックリング）の許容量もきっと通常の人間の何倍もある。

それがこちらの最大のネックだ。彼らは課題になりそうなものを手当たり次第持ち運ぶことができるが、自分達は課題の度に探し回らなければならない。

果実を手にするセズの手を思わずじっと見つめた。右手の中指に、当然のように嵌められた魔法指輪（マジックリング）がある。

「どうしたトート。わたしの手に何かついているか？」

「！ い、いえ、何でもありません.....！」

彼の手を凝視していたことに気づき、トーティリアは慌てて顔を逸らす。セズは特に気にした風もなく、再び果実を食べ始めた。トーティリアはほっと安堵する。このときばかりは、彼が細かいことを気にしない大雑把な性格でよかったと思う。

「何か心にひっかかることでもあるのか？」

「え!？」

「飯を食ったというのに、顔がどことなく暗いから少し気になったんだ。何かあるなら溜め込むよりも、吐き出してしまったほうがすっきりするぞー」

セズはそうやってニカリと笑った。人好きのする温かい笑み。

もしもここでトーティリアが大丈夫ですと言っても、そうか、とそれ以上聞いてくることもないだろう。どんぐりのような形をした空色の腫が、言いたくなければ言わなくてもいいと、言ってくれている気がした。

そんな彼になら、自分の今の鬱屈した思いを吐き出してもいいかもしれない。

「.....先輩、気づいていると思いますが、わたくしの手に魔法指輪（マジックリング）はありません」

「そういえばないな。だから鞆を持っているのか！」

「そうです。わたくしには.....魔法指輪（マジックリング）が使える程度の魔力すら、ありませんから.....」

魔法指輪（マジックリング）は少ない魔力でもある程度の容量が入るよう作られている。だが、ゼロに何を掛けてもゼロになるのと同じく、動力となる魔力が僅かほどもないのならば、使うことができない。

そう、トーティリアは魔力を持たずして生まれてきた。突然変異で膨大な魔力を持って生まれてくることのあるのなら、その正反対も当然ありうることだろう。

トーティリアには魔力がない。だから魔力を動力とする魔法指輪（マジックリング）のような道具を、トーティリアは使うことができないというハンデキャップを、生まれながらにして負ってきた。

魔力を動力とした道具で文明が開化している昨今、魔力を持たない自分は幼い頃、散々周囲の大人に心ない言葉を吐かれて育った。魔力がないのにちゃんと成長するのか。もし成長しても魔力を持たない娘など、誰も嫁にほしがらない

、など。

だが両親は魔力のない娘を愛してくれた。だからそんな口さがない者達を父は決して許しはしなかったが、資産家である家は仕える人間が多く、人が多ければその分口も増えるために、全てを封じることができるわけがなかった。仕方がないといえば仕方がない。

だからこそ、トーティリアは魔力がないというハンデキャップを乗り越えるため、剣を習った。家には既に兄がおり、跡目を継ぐことが決まっている。魔力を持たない女は嫁に行けないというのであれば、腕を磨き、自身の力で身を立てればいい。始めは危険だからと反対していた家族も、トーティリアの熱意に押し負け、剣を習うことを認めてくれた。そして現在、アナザイル学院に入学し、更に腕を磨く日々を過ごしている。

今ではむしろ、魔力がなくてよかったと思えることさえある。もし普通の少女と同じように魔力を持っていたのなら、剣ではなく花や刺繍針を手し、夫に仕えることを学ばさせられただろう。資産家の娘として嫁ぐために。そして、決して剣を握ることを許されることはない。実戦重視のアナザイル学院にも、入学させてもらえなかったかもしれない。

トーティリアは剣士としての己に誇りを持っている。だから今では、剣を持たない自分を想像することなどできなかった。

それでもときどき、こうして自身に魔力がないことを無力に感じてしまうときがある。もしも魔力があって魔法指輪（マジックリング）が使えるなら、歴史書などの教材を持ってこられただろう。レイムのように倒した妖魔の遺骸をそのまま持ち運んだりなどはできずとも、他のペアのように、偶々見つけた薬草や妖魔の一部を持てたかもしれない、と。

気づけば全てをセズに語っていた。セズが吐き出せと言ったからだろうか、全てを話してしまったのは、自分でも溜め込んでいることを自覚してはいたから、本当はずっと誰かに吐き出したかったのかもしれない。トーティリアは誰かに弱みを見せるようなことは矜持が許さず、今まで誰にもこんなことを言ったことはなかったから。

「だからでしょうか……時々色憑きであるレイムのことを、羨ましく思うことがあります。わたくしも、彼女のような魔力がほしかったと」

しかしそれはただのないものねだりだということを、トーティリアは理解している。そしてどんなに望んでも、手に入れることはできないものだということも。

膝の上に置いた自分の手を見下ろしていると、再びポンと頭にセズの節くれだった大きな手が乗せられる。今度は振り払う気はおきなかった。

「そうだよな。自分が持ってないものを他の奴が持っていたら、羨ましくなるよな。わたしも同じだ。ヒリングの治癒術とか、いつでも自分で怪我を治せるだろうから羨ましい。ネストはめちゃくちゃ頭がよくて、学科の成績はいつも一位をキープしてる。ギランは大きな太刀を使ってるのに、小さな妖魔でも的確に急所を斬れるんだ。わたしには振り回すことしかできないだろうに。皆すごいよな、わたしには真似できないことばかりだ」

「それは……それぞれ人には向き不向きがありますから」

治癒術に関しては素質がなければ使えないし、得物についても、その人物の人となりで変わってくる。セズもギランが持つ大きな太刀は似合いそうではあるが、刃物はただ力任せに振り回せばいいというものではない。それは同じく剣を得物とするトーティリアだからこそ理解できる。

逆に彼が得物とするナックルは、そのまま使い手の力が反映される武器だ。力が強ければそれだけ強い一撃を放つことができる。リーチは短いものの、相手が人であれ妖魔であれ、懐に入り込むことができれば、一方的に攻撃をしかけることも可能だ。これほどセズに似合いの得物もないだろう。

「うん、そうだよな。皆得意なものもあれば苦手なものもある。何でもできればそれはいいことだけど、そんな人間いるわけないだろ？ トートとしっぽも同じだ。トートは魔力がないから魔術を使うことはできないけど、その分剣術の技術は高いじゃないか。しっぽは高い魔力がある代わりに、トートみたいに剣術を使うことはできないだろう？」

「そんな簡単な問題では……いえ、その通りかもしれませんね……」

人に得手不得手があるのは当然のこと。だからといって不得手をそのままにするのはトーティリアの性分ではなく、あらゆる分野に対応できるよう知識を深めている。それでもどうしようもないこと、魔力がないのだから魔術に関しては一切使えないことは、努力で習得できるものではない。

だからこそ自分にできることを伸ばしてきた。それは決してトーティリアだけではない。誰もが自分の特技を伸ばすために、鍛錬や研鑽の日々を重ねている。

「だろう？ 自分が得意なことを頑張ればいいんだ。魔力がないことなんて気にするな！ お前はお前だ、トーティリア！」

「……！」

頭に置かれていた手が、わしゃわしゃと乱暴に撫で始めた。いつもなら髪が乱れると振り払っただろうに、頭から感じる温もりが心地いい。トーティリアは膝の上で両手を握り締めながら目をぎゅっと伏せる。そうでないと熱いものが零れてしまいそうだったから。

「……ありがとうございます、セズ先輩」

「おう！」

顔をあげると、そこにあったのは太陽のようなセズの笑顔。

本当に彼は不思議な人だ。普段は人の話なんて全く聞かずに振り回すくせに、いざというときには欲しい言葉を与えてくれる。細かいことなんて気にしなくせに、落ち込んでいると悟ると自然に励ましてくれる。だからこそどんなに彼の鍛錬に振り回されてポロポロになっても、恨む気にはなれなかった。大変だとわかっているけど、彼の期待に応えたくってしまうのだろう。

「よし！」

トーティリアの頭から手が離れるとセズは立ち上がり、拳を空に向かって突き上げた。

「休憩は終わりだ！ 次のチェックポイントへ行くぞトート！」

「……わたくしはトーティリアです！」

お決まりの台詞を言いながら、トーティリアも立ち上がりハンカチを鞆へしまう。呆れたような口ぶりながらも、口元は穏やかにつりあがっているのを自覚していた。

「イモセギ、セイギモ、ギセイモ、モギイセ……うーん……」

四つ目の北にあるチェックポイントの課題を終えたレイムは、今まで聞いたヒントの文字を並べ替えては頭を捻らせる。

「あー！ ダメダメダメダメダメ！ ぜんっぜん言葉になんない！」

「恐らく、必要としない文字も含まれているんだろうな」

四つ文字が集まったのだからこれだけでもゴールを示していると思ったが、その予想は打ち砕かれた。全ての文字を並びかえても、二文字三文字だけでも、場所を示す言葉にならない。あと一文字だということにそうなるということは、この四つの文字の中に確実にダミーがある。だが、もしもダミーを引かずにゴールへの道が判明したとしても、チェックポイントの課題をこなさないとその分減点されてしまう。

それは何故かとギランに問うたら、どうやら以前課題をクリアしたペアからヒントをうまく聞きだし、課題をクリアせずに優勝したペアがいたらしい。確かにそれならいろいろ集める必要はないだろう。しかしそれを聞いてレイムはずるい、と思った。自分達は順調に進んでいるが、中には一つの課題に何時間もかけているペアもいる。やっとの思いで課題をクリアしたのに、別のペアはそれをせずに答えを知るなんて不公平だ。

そう思ったのは学院側も同じらしい。二位のペアは、全ての課題をクリアした上でゴールしていた。もし優勝した彼らも課題をしっかりこなしていたら、このペアより速くはゴールできなかつただろうと思われるほど、この二組に差が少なかった。そのためそれを考慮し、二位のペアを優勝とした。それ以来ルールであらかじめ課題をクリアしなかつたら、その分減点されると記載するようになったのだという。

「優勝はあくまで目標だからな。賞金が出るならよりやる気がでるだろうと出しているだけで、あくまで目的は生徒の実戦を兼ねた総合力を高めることにある」

自身を高めるため、外へと出て妖魔と対峙することの多い生徒も大勢いるが、外での怪我は全て自己責任という事情により、大抵があまり遠くまでは足を延ばさない。迷ったり大怪我を負ったりして帰ってこれなくなる可能性が充分あるからだ。

よほど自分の実力に自信がある者以外、学院から遠く離れてまで鍛錬に赴いたりはないだろう。セズのようなオリエンテーリングの範囲が庭と同義という、未恐ろしい生徒の方が当然圧倒的に少ないのだ。

それと、専門分野以外の人間にはあまり興味を持たれない、妖魔の身体の一部の使い方や使用方法などを知ることができる機会でもある。卒業した後、妖魔のそういった一部を持ち帰って必要としている者に売れば稼ぎとなるだろう。三次生が一次生とペアを組むということも、それによって自分よりも弱い者を守りながら戦うということを手につけられ、学者などが生態系を調べるために、妖魔がたくさん生息する森林部に調査に行く際などの護衛をする場合の立ち回りに繋がっている。無駄がない。

「ま、オリエンテーリングをどう捉えるかは自分次第だな。ズルしたペアも、賞金獲得を目標に掲げて考えた結果がそれだったんだろう。ただズルすりゃ優勝できるほど、オリエンテーリングは甘くねえ」

「……」

まるでズルを肯定したようなギランの言葉にレイムは思わず黙るが、少し考えてみて、確かにその通りだと思った。頑張ろうとする方向性としては間違っているとは思いますが、そのペアもどうすれば優勝できるか考えた上での行動だったのかもしれない。確実に優勝を狙うには、ヒントを聞きだすだけでも手間がかかる。チェックポイントはそれぞれ距離があるうえに、それぞれ好きなところから始めることができる。待ち伏せするとしても、そのペアが全てのヒントを知って

いるかもわからない。もしくはチェックポイント近くに身を潜め、教師が口に出すヒントを聞いていたとか。しかしチェックポイントの場所を回るだけでも大変だ。現にレイムも大分足がジンジンと痛みを発してきている。

ギランはズルをすることを肯定したのではなく、努力しようとした姿勢を認めたのだろう。それがたとえ間違った方向だとしても。

「それはそうと、リリアーゼ。足は大丈夫か？」

「！ え、えっとその……まだまだいけます！」

確かに大分痛みを発してはいるが、残すチェックポイントは一つで、後はゴールを目指すのみ。ここまできたら休んなどでいられない。

「あと少しですから、大丈夫です！ どんどん行きましょう！」

ギランにはレイムが疲れていると知られているだろう。だからそのことを否定するのではなく、まだ気力が充分あるということを伝えた。

「――わかった」

ギランは特に深く追求することなく頷いてくれた。レイムはぐっと掌を握り、気合いをいれる。ギランはレイムの言葉を信じてくれた。ならばそれにしっかりと応えなければ。

「四つ目から大分歩きましたし、きつともうすぐ五つ目も見えて――」

レイムは思わず腕を抑えた。ざらりとした鳥肌が立っている。突如襲った得たいの知れない気配に言葉を途切らせたレイムは、そっとギランを見上げる。彼の漆黒の瞳が真っ直ぐ前を睨みつけるように一点を捉えており、彼もまたレイムと同じものを感じ取ったのだと気づいた。

「……急がらりと空気が変わりやがったな」

明らかに森の中の雰囲気がおかしかった。近くの植物を見てみると、鮮やかな緑色ではなく、どこか黒ずんでいたりと、茶色に枯れている草花がちらほらと目につく。それが先へ進むにつれて広がっているのだから、疑念は深まるばかりだ。

現在の季節は初夏。サンサンと降り注ぐ日差しから栄養を得るため、光合成が活発に行われる時期だというのに、変色し始めているのはどう考えてもおかしい。乱立する木々を見上げると、上にいけばいくほど酷く変色していた。葉だけでなく枝や幹が、まるで細菌に犯されたかのように気味の悪い色に変化してしまっている。

「……何あれ。一体どうなってるの……？」

「武器を出しておけ。何がおきるかわからないからな」

ギランがいつの間に魔法指輪（マジックリング）から取り出したのか、太刀を手に握っている。レイムは連射が効くラーナと使い勝手のいいルーージュ、どちらを取り出すか悩んだ末、少し重いが射程距離が一番長いリエラを取り出した。両手でしっかり抱えれば彼女もあまり重くはないし、精度が高い。

変色の原因はこれから進む先にはいるはずだ。ならば手軽だが射程距離が短いラーナやルーージュよりも、リエラの方がいい。

「チェックポイントの方角というのが気になるな……」

二人は警戒しながら進む。そして一つの気がかりをギランがポツリと漏らした。そう、チェックポイントがあるだろう東のポイントに向かえば向かうほど、変色が酷くなっていた。つまり、原因がチェックポイント付近にいるということになってしまう。

——グルルルルルルルルルル……

「！ 今の！」

低い唸り声は、妖魔のもの。そして聞こえた方角はまさしくチェックポイントの方角だった。ギランがレイムに目配せし、レイムはそれに黙って頷き、チェックポイントへ向かって走り出す。

進めば進むほど妖魔の呻き声が大きく響いてくる。これは、誰かが戦っているのだろうか？

「あれは……！」

木々の隙間から見え始めた大きな体躯。砂色のごつごつとした鱗に覆われ、離れていても重量感を感じた。更に蝙蝠のような形の翼も見え隠れしている。あんな巨大な妖魔が学院の周辺にいるなんて聞いたことがなく、レイムはただ呆然とするしかない。

「ギラン！ ギランじゃないか！」

「！ ヒリング!?!」

巨大な妖魔がいる方角とは別の方から、一人の生徒が駆け寄ってくる。見覚えのある柔らかそうな茶色の髪を持つ赤色のタイの三次生は、確か治癒術科に所属していると聞いたヒリング・マレイズ。

「ヒリング、一体何があった？ お前は何か知ってるのか？」

「ああ、まあね……それよりも、君達身体は大丈夫？ この辺り一帯は今、毒素が撒き散らされているんだ」

「毒……？」

レイムは先ほどみた、細菌がこびりついたように変色していた木の幹を思い出して納得した。毒素が撒き散らされているからこそ、植物達が枯れはじめているのだと。

「って、ええええええええええ!? 毒ううううううううう!?!」

植物への被害は広範囲に広がっている。つまり、奥地とやってきているレイム達もその毒素を吸い込んでしまったということだ。レイムはあたふたと慌てた。

「ど、どうしましょうどうしましょう!? ……げ、解毒剤を飲まなくちゃ……！」

「お、落ち着いてリリアーゼさん。僕が解毒するから」

「植物は人体に比べて毒素に耐性がないから酷い有様だが、俺達はまだ体調に変化はないだろ。だから慌てるな。落ち着け」

先輩二人に宥められ、レイムは何とか落ち着いた。ヒリングがにっこりと穏やかに笑みを浮かべながら詠唱を始める。淡い光がヒリングの手から発せられ、レイムとギランを包み込んだ。

「これでよし。体内の毒は全て解毒したよ」

「すまんなヒリング。ところで、お前今一人なのか？ ペアはどうした？」

その言葉に、彼の近くにペアらしき人物の姿が全くないことに気づく。彼のペアがどこの誰かは知らないが、ここにいるということはヒリングもまたオリエンテーリングに参加していたということだ。ペアの相手と別行動をしているのだろうか。

「ああ……それも含めて起こったことを話すよ。ここではあいつに近すぎるから少し離れよう。こっちへきてくれ」

ヒリングに手招きされ、レイムは一度リエラを魔法指輪（マジックリング）に収め、巨大な妖魔がいるところから少し距離をとった。あれは今まで見たことのない妖魔だった。だが状況から考えて、毒素を撒き散らしているのはあの妖魔に間違いはない。しかしこんな森の中に毒素を撒き散らす妖魔が、元々棲んでいたとは思えなかった。あの一頭がいるだけで、自然環境が破壊されてしまう。ああいう毒素を撒き散らす妖魔は森林地帯とは真逆の、乾いた砂の大地に主に棲息しているものだ。

「この東のチェックポイントの課題は、先生が作り出した結界を破壊、もしくは罫をいれたら合格がもらえるというものでね。数組のペアが交替交替で武器や魔術で挑んでいたんだ」

結界。チェックポイントにいる教師の周囲に配置されたそれは、結界術の応用で生み出されたもの。本来は術師が己の魔力を使って編み出すのであり、その強度は術師の魔力に比例する。

「ところがあるペアがね……転移系魔術を応用した、遠く離れた地に棲む妖魔を召喚して使役する『まねき寄せ』という術を使ったはいいんだけど……気合いが入りすぎたのか、とんでもないものを呼び寄せてしまったんだ……」

「それが『あいつ』か？」

「ああ。本来ならこんな森の中ではなくて、乾燥した岩山などを棲家としている、一流の使い手でも狩るのが難しいとされる妖魔、クエレブレだ」

「な……！」

ギランは妖魔の名前に驚愕しているが、レイムはその名前に聞き覚えがなく、首を傾げる。だが、ギランやヒリングの緊張感を貼り付けた表情を見れば、その妖魔がどれだけ強いのが伺えた。

「クエレブレつつたら、たった一頭で街を壊滅状態に陥れることができるっていう、凶悪な妖魔じゃねえか！ 未熟な学院生が呼び出せるような奴じゃねえだろ!? 何であんな奴を召喚しちまったんだ!？」

「うん……これはあくまで推測でしかないけど、何人かが魔術を使って結界を壊そうとしてたから、けっこうな魔力が、その場に滞留していたんじゃないかな……」

「……つまり、その魔力に術者の力が影響されて、普通なら召喚することができないような凶悪な奴がやってきた、と？」

「可能性としてはそれが一番高いと思う。召喚されたからには、術者の子が気を強く持っていれば操れることはできなくても大人しくさせることはできたかもしれないんだけど、予想を大きく上回りすぎたのか慌てちゃってさ……。多分誰より一番驚いただろうから、気が動転してしまうのは仕方がないと思うんだけど」

妖魔は、全身に術者の魔力を纏わせることで、意のままに操ることができる。当然妖魔からの反発があるため、術者には相当な集中力が要求された。それなのに狼狽してしまったということは――

「クエレブレは纏っていた術者の魔力を完全に振り払ってしまって、暴れだしたんだ。今は先生が結界術であいつの足を

縫い付けているおかげで、被害がこれだけです。術者の子を責めるつもりはないけど、もうオリエンテーリングどころじゃないよ……その場にいたペアのほとんどが、リタイア用の転移装置（ワープシステム）で学院へと戻ったんだ。僕のペアになった一次生の子も、それで学院に戻ったよ」

だからヒリングのペアがいなくて納得すると同時に、何故彼は一緒に学院へ戻らなかったのだという疑問が沸く。それをそのまま伝えると彼は神妙な顔をしながらはっきりと言った。

「その場にいなかったペアは、ここで何が起きたかなんてわからない。先生は足止めをするので精一杯で、状況を告知することができないんだ。だから僕が先生の代わりに、やってきたペアに状況を説明して、すぐさま学院に戻るよう促しているんだ。僕は治癒術師だから毒にも怪我にも、自力で対処することができるからね」

「だから残っているんですか？」

「まあね」

ヒリングは苦笑しつつも、髪と同じ色の瞳に悲観の色はない。いくら毒に対処できるとはいえ、毒が撒き散らされるようなところになって、誰だって居残りたくはないはずなのに。

「相変わらずお人よしだな、お前は」

「適材適所だよ、ギラン。ただ凶暴なだけなら前衛の子が残れただろうけど、クエレブレは口から毒を撒き散らすんだ。見回っている最中、毒のせいで動けなくなってしまったら、それこそ本末転倒だ。それにもう一人治癒術科の後輩もいたけど、後輩を残して自分が帰るわけにはいかないだろう？」

「なるほどな」

「だから君達も、素直に転移装置（ワープシステム）を使って、学院に戻ってくると嬉しいんだけどな」

最後の言葉にレイムはピタリと固まった。

そうだ、今はもうオリエンテーリングどころではない。担当の教師は身を挺して足止めをしているし、いくら魔術をかけてくれたとはいえ、レイム達も長居するのは好ましくない。

「そんな……あと一つだったのに……！」

四つの課題をこなし、ここが最後の課題となるはずだった。あと一つだったのだ。怪我を負ったわけでもなく、もう体力的に限界というわけでもないのにリタイアしなければならない。

（せっかくここまできたのに……！）

それなのにここでリタイアしなければならないというのが悔しかった。自分達の実力が劣っていたわけではないのが、それに拍車をかける。

「ここが最後だったのか……なら、悔しいだろうね……。でも、申し訳ないけど、今はそんなことを言っている場合じゃないんだ。――それはわかるよね？」

「……はい」

穏やかに尋ねるヒリングに、レイムは納得がいかないまでも、頷いた。頭ではわかっているのだ、転移装置（ワープシステム）で今すぐ帰らなければならないと。

いくら学院側が外で負った怪我は自己責任だと豪語しているといっても、生徒達を予期せぬ危険に晒すことを望んでない。

「……ヒリング。俺達が戻るとして、お前は どうするんだ？ いつまでもここにいるわけにもいかないのはお前だって同じだ。もしも全ての生徒が学院に戻ったとしても、お前はそれをどうやって知るつもりなんだ？ それに、クエブレを放置するわけにはいかねえだろう。強固な結界が張られているから学院の中は安全だろうが、このままだと、ここいら一帯の自然環境が完全に破壊される。先に戻った生徒が学院にこのことを伝えているだろうから学院側も対策を練っているだろうが、それもいつになるかわからない。違うか？」

ギランが鋭い双眸をヒリングに向けた。言葉の内容や視線は厳しいものがあるが、その厳しさの中に、ヒリングのことを心配する色が見える。

そうだ、レイム達は転移装置（ワープシステム）で戻ればそれでいい。だが、ヒリングはこのままずっとこの場所に残らなければならぬ。本人が自分でそれを選んだとしても、危険なことには変わりが無いのだ。

「……君の言うとおりにだよ、ギラン。でも仕方がないだろう？ 誰かがやらなければ生徒達を合わなくていい危険に晒してしまうことになる。足止めをしてくれている先生の努力が、無駄になってしまうんだ。――僕のことなら心配はいらないよ。悪運の強さには自信があるからね。何とかなるさ」

「だが……！」

苦笑するヒリングにギランが更に言い募ろうと、手を彼の肩に置く。細められた漆黒の瞳と茶色の瞳がお互いをまっすぐ見据えていた。

――グルァアアアアアアアア！

「！ な、何!？」

ざわりと草木が揺れるほどの絶叫が響いた。刹那、ドシンと地面が揺れる。毒が巻き散らされていても、地面が揺れるようなことはなかったのに何かがおかしい。

「まさか、先生がもう限界なんじゃ……！」

「ええええ！」

足止めをしている教師が限界ということは、クエブレが自由に動き回るということを意味する。一箇所に止まっているだけでこの被害なのに、動き出してしまったらどうになってしまうのか。考えるだけでもおぞましい。

「ヒリング、今は帰る帰らないを言ってる場合じゃねえ！ あいつのところへ急ぐぞ！」

「っ！ 仕方がない！」

「わわわわわ！」

ギランとヒリングがクエブレがいるだろう、毒素が撒かれている中心地へと向かう。レイムも二人の先輩の後を追う。するとギランがくるりとこちらを振り向いた。

「リリアーゼ、お前はくるな！ 先に学院へ戻れ！」

「え、ちょっ……！」

同時に丸い何かを投げられ思わず受け取ると、それは転移装置（ワープシステム）だった。呆然とそれを見つめてい

ると、二人の姿が視界からいなくなっている。

「ど、どうしよう……」

置いてけぼりにされたレイムは、転移装置（ワープシステム）を手にポツンと立ちつくすしかなかった。

「何だか様子がおかしい」

「ぶっ！」

最後のチェックポイントへ向かって爆走していたセズが急にピタリと止まるものだから、その後ろを走っていたトーティアは、彼の背中にぶつかってしまう。

「いたたたた……」

「見ろ、トート。植物が枯れてる」

「へ？」

間抜けな声を出しながら言われた通り周りを見渡すと、トーティアは赤茶色の瞳を大きく見開く。青々と茂っているはずの草木が、茶色く変色しはじめているではないか。

トーティアはしゃがんで近くの草木を見て、変色している一部分にそっとふれた。

「この植物……夏に花を開くはずなのに、開く前に枯れようとしてるなんて……」

「それだけじゃないぞ。ここいらにある植物、皆そうだ。オリエンテーリング前に何度か通ったときはこんなことはなかったのに……一体どうしてしまったんだろうな」

「異常気象……ではないですし……」

春が過ぎて初夏を迎えたこの頃。気温は順調に日々高くなりつつある。異常に熱いわけではなく、だからといって涼しいと言える気温でもない。例年通りだ。

そこに問題がないとするなら、他にある。植物が枯れる原因を頭の中に思い描く。そして辿り着いた答えは――

「……何か不測の事態がおきたのだとしか思えません」

植物の変色は更に奥まで続いている。悪い予感しかせず、トーティアは苦い顔で進行方向を見つめた。この先に、一体何が待っているというのか。

「まあ、行けばわかるだろ。細かいことは気にするな！」

セズは拳を頭上に突き上げ、再び走り出した。

「ちょ、せんぱっ……！ ああもう、本当に自由な人ですね！」

それが彼らしいと苦笑しながらも、沸々と沸きあがる嫌な予感が当たらなければいいとトーティアは心の中で願った。

手の上にある転移装置（ワープシステム）は対して重くないはずなのに、どこかずしりと重みを感じる。レイムは俯いていた顔を上げて前へ進もうとしては止めて、また俯いてを繰り返していた。

（先輩達を残してわたしだけが帰るなんて、できるわけじゃない……！ でも……）

転移装置（ワープシステム）はペアごとに一つ配られた。そして使えるのはたったの一度だけ。この場でレイムが使ってしまったら、ギランもまたずっとこの場に留まらなければならなくなる。そんなことができるわけがなかった。しかし、だからといって二人を援護しに行こうとする足も途中で止まってしまう。

——グルルルルルル……

クエブレの唸る声が聞こえてくる方角を行けば、二人と合流できるだろう。だがギランは、レイムにそれを望んでいない。レイムをオリエンテーリングの内容とは無関係の危険に晒したくないから、転移装置（ワープシステム）を渡してくれた。レイムが二人のもとへ行くことは、その気持ちを無碍にするということになる。それもまた嫌だった。

（どうしよう……どうすればいい？）

ぐるぐると頭に過ぎるのは帰るか助けに行くかの相反する二択。
ガサガサと近くの草叢が揺れるが、考え込んでしまっているレイムに気づく余裕はなかった。

——ジイイイイ！

「！」

間近で聞こえた妖魔の唸り声に振り向いた先にいたのは、こちらに向かって鋭い爪を振りかざそうとしているコボルト。コボルトはこの森に広く生息している。深く考え込んでしまっていたせいで隙を見せてしまった。気づくのが遅く、魔法銃（ブラスター）を取り出すのが間に合わない。

「斬！」

やってくる衝撃に耐えるために身体を強張らせると、甲高い声と共に突如、視界に銀色の光と絹のような滑らかさをもつ漆黒の長い髪が映った。

「無事か!? レイム・リリアーゼ！」

「……トーティリア」

彼女は剣を鞘に収めると同時にレイムの元へと駆け寄ってくる。ちらりとトーティリアとは反対の方向を見ると、縦に切断されたコボルトの無残な屍骸が転がっていた。

あの一瞬でコボルトの身体を一刀両断したことに対する彼女の凄みと、助かったという安堵が同時に押し寄せ、何とも言えない表情でトーティリアを見遣った。

「おお、無事だったかっほ！」

「……馬鹿力先輩」

近くの草叢からがさごそと音を立て、場にそぐわない明るい表情を浮かべたセズが現れる。レイムは一度大きく嘆息し、トーティリアの方に向き合った。

「ありがとう、トーティリア。助かった」

「.....フ、礼には及ばんさ。この天賦の剣技の才を持つトーティリア、同級生の危機に駆けつけるのは当然であろう」

「.....あー、そう」

いつもの自慢が始まり、レイムはそれを聞き流すことにした。こうなったトーティリアには何を言っても無駄だ。受け流すにかぎる。

「しっぽ、ギランはどうした？ 一緒じゃないのか？」

「そういえばそうですね.....フォトグリス先輩がお前を一人置いていくとは思えないが、どうしたのだ？」

先ほどのヒリングの立場に陥ったレイムは、新たにやってきた二人に彼から聞いた事情を説明する。クエレブレが召喚されたこと、その場に丁度居合わせていたヒリングがこの周囲を見回っていたこと、足止めをしていたはずのクエレブレの様子がおかしくなり、ギランとヒリングがそちらに向かったことを。

「事情はわかった。だがレイム・リリアーゼ、先輩が向かったというのに何故お前がここにいる？ 先輩を手助けに行こうとは思わないのか？」

「それは.....」

レイムがここにいる理由は省いたため、トーティリアの疑問はもっともなものだ。レイムは唇を噛みながら俯いた。転移装置（ワープシステム）を握る手に力が籠る。

「.....先輩がくるなって.....学院に戻って言ったから.....」

レイムはポツリと自分の今の状況を説明する。本当は言いたくはなかった。まだ自分でもどうするか決まっていないのに、やってきたばかりの事情を知らない第三者に知られたくない。だが、レイムは曖昧に濁すということが苦手であるし、咄嗟にいいウソが思いつくはずもないし、つきたくない。ギランに裏表のない誠実な人間になればいいと言われた助言が、無駄になってしまうから。

「なら、どうして学院に戻らないんだ？ しっぽが持ってるの、転移装置（ワープシステム）だろ？ それを地面に叩きつければ帰れるんだから帰ればいいじゃないか」

「.....ギラン先輩を残してわたしだけが安全な学院に戻るなんて、できませんもん.....」

「つまり、先輩の指示通り学院に戻るか、逆らって助けに行くかを悩んでいたというわけだな」

「.....そうだよ、悪い？」

言いたくないことを言ったせいか、はたまたトーティリアの上から目線な態度が癪に障ったのか、思わず苛立ち混じりな返しになってしまう。

「セズ先輩、わたくし達の転移装置（ワープシステム）は貴方が持ってらっしゃいますよね？」

「ん？ ああ、わたしが持ってるぞ」

トーティリアがセズの方を向いて尋ねる。レイムは彼女の意図がわからず訝しげにトーティリアを見遣った。

「ですから、わたくしはレイム・リリアーゼと共に学院へ戻ります。セズ先輩はフォトグリス先輩とマレイズ先輩の方へ行ってくださいますか？」

「ああ、いいぞ！」

「ちょ、ちょっと！ 何勝手に決めてんの!？」

肩をいからせてトーティリアに吼えると、彼女は涼しい顔でレイムの手から転移装置（ワープシステム）を取り上げる。

「勝手に決めたとは心外だ。どちらとも決められないお前の代わりに、決断してやったのではないか」

「それを勝手に決めたって言ってんの！ 返してよ！」

トーティリアに取られた転移装置（ワープシステム）を取り替えそうとするが、彼女が腕を伸ばして高く掲げてしまう。背丈は少しばかり彼女の方が高いし運動能力も高いため、レイムでは取り返すことができない。だが、トーティリアから取り返さなければ、このまま言葉通り転移装置（ワープシステム）を地面に落として学院へ共に戻されてしまう。それだけは阻止しなくては。

「何故そこまでむきになる、レイム・リリアーゼ。セズ先輩が変わりにフォトグリス先輩を助けに行ってくださいなのだ。もしやセズ先輩の力を疑っているわけではあるまいな？」

「誰もそんなこと言ってないじゃない！ わたしは、あんたが勝手に学院に戻ることを決めたのを怒ってるの！」

「なんだ、学院に戻りたくないのか？」

「当たり前でしょ！ 先輩だけを危険なところに残して、のこのこ帰れるわけじゃない！」

「だが、フォトグリス先輩には帰るよう言われたではないか」

「……っ！ そ、そうだけど！ でもわたしは——」

レイムは視線を落とす。確かにギランには帰れと言われた。だけどレイムは帰りたくない。残すチェックポイントがあ一つだから帰るのが惜しい？ 違う。トーティリアに勝手に決められたのが気に食わないから？ それも違う。

「——わたしは、ギラン先輩の力になりたいの！ 助けに行きたいの！ 魔法銃（ブラスター）は援護向けの武器だから、足手纏いになんて絶対ならない！」

顔を上げて思いの丈を叫ぶと、トーティリアが大きく目を開けてこちらを見た。隙ができたその姿に、レイムは素早く彼女の手自身の手を伸ばして転移装置（ワープシステム）を取り戻す。魔法指輪（マジックリング）の中にしまいながら後ろに下がって距離をとり、トーティリアに向かって指を差した。

「だからわたしは絶対戻らないから！ わかったかトーティリア！」

彼女に向かって宣言する。トーティリアは開いていた赤茶の瞳を徐に閉じると、口元に手をあて、相好を崩した。思ってもいなかった反応に、レイムはあれ？ と首を傾げた。

「なんだ、答えが出ているじゃないかしっぽ！」

「へ？」

「フッフ、全く世話の焼ける奴だ……フォトグリス先輩を助けに行きたいのなら、初めからそう言えばいいのに」

トーティリアはやれやれと言わんばかりに肩を竦める。思わずレイムはポカンと口を開けた。一体、これはどういうことだろう。

「トーティリー—うわ！」

「そうと決まれば、一緒にギラン達のところへ行くぞ！」

「ふぎゃああああ！ あた、頭！ 頭がぐるぐるまわるううう！」

がしりと大きな手が頭を掴み、ぐらんぐらんと頭が揺れる。ひとしきり頭を撫で回されると、すっかり目が回って頭がくらくらした。

「セズ先輩……だから力加減をして下さいと……」

「ハハハハハ、細かいことは気にするな！」

「す、少しは気にしてくだ、さい……」

「全く貴方は……レイム・リリアーゼ、こちらへこい。また髪が滅茶苦茶だ」

「にゅうう……」

トーティリアに髪を結び直してもらうと、それほど長い時間撫でられたわけではなかったため、すぐに気分がよくなった。それを確認したトーティリアは目線だけでセズを促し、彼はクエレブレの咆哮が響く方角へと先行する。

「行くぞ、レイム・リリアーゼ」

「う、うん！」

先に行くセズの後ろをトーティリアと共に追いかける。今度は戸惑いもなく足を踏み出せた。

「……ありがとう、トーティリア」

レイムは走りながら、ポツリとトーティリアにお礼を言った。形はどうあれ、彼女はレイムが真に望んでいることを引き出してくれた。ギランを助けに行きたいのだと。

「何、気にすることは無い。思いつめた同級生に手を差し伸べるのは、優秀なるものの務めなのだから」

「……あんた、その自画自賛する性格どうにならないの……？」

「事実を述べて何が悪い」

得意気に語るトーティリアに、レイムは脱力しそうになるのをかろうじて堪えた。やはりこいつのことは好きになれない、と改めて認識する。

「お前は難しく考えすぎなのだ。自分がしたいことをするのが、単純なお前らしい」

「どうせわたしは単純な性格だよ！ 悪い!？」

「悪いとは言っていないだろう。人の話はよく聞くべきだ」

「自分語りを始めたなら止まらなくなるトーティリアに言われたくないよ！」

凶悪な妖魔が待ち受けているところへ向かってるというのに、レイムとトーティリアは学院で繰り広げるような喧嘩を、ぎゃあぎゃあと繰り返す。

—グオオオオオオオ！

「！」

二人の口喧嘩に終止符を打ったのはクエレブレの咆哮だった。二人はピタリと互いに叫びあうのを止め、顔を強張らせながら声のする方へと走る。声が段々大きくなるにつれて、レイムの身体に緊張が走った。

「いた！ クエレブレ……！」

変色した木々の葉の隙間から体長三メートルはありそうな巨体が垣間見え、徐々にその全貌が明らかになる。

クエレブレを一言でいうならば、大きなドラゴンだった。頭部から続く長い頸部、体軀から伸びる尾。人間でいう肩甲骨の付け根から生えている体軀と同じ大きさを持つ翼。全てに砂色の無骨な鱗が覆っており、光沢はない。もしも草木のない岩場だったならば風景と同化したのだろうが、枯れてるとはいえここは草木の溢れた森の中。はっきりと周囲から浮いたその姿は、まさに招かれざる客であるという何よりの証。

「セズ！ お前も来て――リリアーゼ!?!」

「ギラン先輩！」

草木の間からセズの後に遅れて姿を現すと、太刀を持ってクエレブレと対峙していたギランがこちらに気づく。

「何故来た!? 来るなど言っただろうが！」

「す、すみません……！」

「そう言ってやるな。自分ばかり安全なところへ帰りたくないのは、ギランだけじゃない。しっぽも同じなんだ」

激昂するギランに身体を震わせると、まさかのセズがフォローに入ってくれる。そしてバシバシと大きな音を立てながらギランの背中を叩き、ぐほっ、とギランが呻いた。

「すみません、ギラン先輩。先輩がわたしの身の安全を考えて帰れと言ってくださったのは理解しています。ですが、わたしばかり安全なところへ戻りたくありません。無茶はしませんから、援護させてください！ お願いします！」

「わたくしからもお願いします、フォトグリス先輩。もしも本格的に危機に陥る事態になったそのときには、転移装置（ワープシステム）で先に帰りますから」

トーティリアまで加勢するようにレイムに続いた。三対の眼差しを受けて、ギランは一呼吸おくと仕方ない、と呟く。

「リリアーゼ、お前は援護に専念しろ！ としてももしも危険だと悟ったなら、その時点でスウェムフォードと共に学院へ戻れ！ いいな！」

「はい！ ありがとうございます！ ――リエラ！」

条件つきだが、援護をすることを許して貰えてレイムは嬉しくなる。魔法指輪（マジックリング）からリエラを取り出し、両手で抱えながらギランの太刀の刃先にいる巨軀の足元を見据えた。まるで風に揺れているような、儂い青白い魔法陣が展開しており、クエレブレの足を縫いとめている。だが、放っている光は淡く、いつ消えてもおかしくないほど弱っているように見えた。

「まだ足を止めている魔法陣は効いているんですね」

「ああ。だが先生が毒と魔力の消耗で大分弱ってきているせいで、動けはしないが攻撃してきやがった。ヒリングが今解毒と共に魔力を分け与えているが、それもどこまで――来るぞ、逃げろ！」

「！」

クエレブレの大きな口が開かれる。その口の中にある紫が混じった黒い気体を吐き出した。

ゴオオオオオオオオ！

轟音を立てながら吐き出されたのは一毒だ。視認できるほどの高濃度の毒素が撒き散らされている。

吐き出された毒を避けるため四人はそれぞれ別方向へ散った。レイムは横を大きく周り、クエブレから距離をとり、ある程度離れたところでしゃがみ込んでリエラを構えた。狙うは背中に生えている、ごつごつとした鱗に覆われた翼の根元。

ドン！

リエラから飛び出した弾は狙い通りの軌道を描き、着弾する。が――

――グルルルルルル.....

確かに着弾したはずなのに、羽の付け根にはかすり傷一つついてはいなかった。

「！ 効いてない.....！」

「こいつの鱗は頑丈だ！ 生半可な攻撃は全てはじかれるぞ！」

「えええええ！」

反対側から聞こえてくるギランの言葉にレイムは動揺した。確かに堅そうな鱗を纏っているが、まさか弾丸すらも弾いてしまうなんて。クエブレの首が徐に動き、ギョロリとした鋭い眼光がこちらを向いた。

「くっ.....！」

レイムは立ち上がりリエラを抱えて走り、近くにあった草叢の影に身を潜める。そこから僅かに顔を出して覗き込むと、先ほどまでレイムがリエラを構えていたところに毒素が吐かれ、近くの草花がしおしおと枯れていく。思わず肝がヒヤリとした。

「リリアーゼさん.....！ 結局君も来てしまったのか.....」

「あ、ヒリング・マレイズ先輩！」

突然声をかけられ振り向くと、そこにいたのは教師を抱えているヒリングの姿。彼に抱えられている教師の顔色は青白く、目を伏せ、浅い呼吸を何度も繰り返していてもではないが大丈夫とはいえない状態だった。

「すいません、先輩。わたしもじっとしてられなくて.....。それと、わたしだけでなく馬鹿力.....じゃなくてセズ・ラッカーノ先輩と、トーティリアも来てます」

「あいつも来てしまったのか.....まあ仕方ないか。ギラン一人にクエブレの相手をしてもらうのは心苦しかったし。僕もそっちに行きたくても、この状態の先生を放置することなんてできないしね」

ヒリングの手が光り、教師の身体を優しく包み込む。そして少しずつ教師の体内に吸い込まれるようにして消えた。解毒だけならもうとっくに済んでいることを考えると、ヒリング自身の魔力を分け与えているのだろう。ヒリングの顔色にも陰りがあり、あまり良いとは言えない状態だ。

「ギランには、クエブレの注意を逸らしてもらっていたんだ。先生はこの通り意識を手放してしまっている。.....それでも結界が解けないあたりは流石としか言いようがないけど、それも時間の問題だ。先生の魔力が尽きたら、その時点で

クエレブレは自由に動き回ることができるようになってしまう」

「ここもあまり安全ではないですよ。もう少し離れることはできませんか？」

「残念ながら……今の結界は先生がこの場から動いちゃっても解けてしまうほど弱っているんだ。だから動かしようがない。せめて結界を持続させるために、こうして僕が魔力を注いでいる状態だからね……」

「それは困ったなあ……あ！」

レイムはあることに気づいた。結界そのものが魔力だけの問題であるならば、それを解決できそうな存在がここにいるのではないか。

「マレイズ先輩！ わたしの魔力を先生に注ぐことってできますか!? わたしは色憑きですから、わたしの魔力を渡せば結界の力も元通り強くなるかもしれません！」

色憑きであるレイムの魔力は人並み外れている。人間一人分の魔力を満たしてもなお、余りあるだろう。期待を込めてヒリングを見遣るが、彼は申しわけなさそうに口元を歪めた。

「ごめん、リリアーゼさん。君の気持ちは嬉しいけれど、それは無理だ。色憑きである君の魔力は大きすぎて、僕には扱いきれない……。それに、もしできたとしても、大分弱ってしまっている今の先生の身体が、強大な魔力に耐えられるかどうか……」

「そう……ですか」

レイムは力なく項垂れた。自分の中に存在する膨大な魔力を初めて有効的に使うことができるのではないかと思ったのに。現実には甘かった。ただ膨大な魔力は在るだけでは何の役には立たず、どうすることもできない。

「リリアーゼさん、申しわけないけどギランをここに呼んでくれないか？ あいつのことだから毒を直接くらはいてはないと思うけど、ここいら一体は毒素が濃いからそろそろ解毒しないと身体に毒が回ってると思うんだ。それとセズとスウェムフォードさんにも、ある程度時間が経ったら解毒しにきてと伝えてほしい」

「は、はい！ わかりました！」

「うん、頼んだ」

ヒリングの頼まれごとを承知し、頭の中に過ぎた鬱屈した感情を振り払う。今はそんなことを考えているときではない。軽くヒリングに頭を下げ、レイムは身を隠してくれた草叢を離れる。

一度リエラを魔法指輪（マジックリング）の中に戻し、クエレブレの注目が自分に注がれてないことを確かめ、レイムは来た道に戻る。走ってる最中耳に届いたのはキンと弾かれるような金属音。一定の間を置いて聞こえるその音は、恐らく一撃を与えては逃げてを三人で繰り返しているのだろう。足止めを目標とする場合における、最も効果的な戦闘方法だ。

「かったいなあ、こいつ！」

セズが拳につけたナックルでクエレブレの長い首を殴りつける。しかし勢いのある重い一撃を受けても、クエレブレは微動だにしない。刹那、クエレブレの腕がセズに向かって振りかざされる。しかし彼は慌てることなく身体を捻ってクエレブレの首元を蹴り飛ばすことでそれを回避し、一回転しながら地面に着地して距離をとる。すると今度はトーティリアが反対の足元を狙い、剣を振った。当然傷をつけることは叶わず、彼女はすぐさま離れるが、赤茶色の瞳に動揺はない。まっすぐクエレブレを見据え、己の役割を理解し全うすることのみに集中している目だ。

ギランもまた二人と同じように、クエレブレを凝視している。レイムの存在に気づいていないようだった。意識をこちらに向けなければならないことに、思わずかけようとした声を飲み込んでしまうが、これは三人の身体に関わることと思いなおし、ぐっと腹に力を込めて気合いをいれた。

「先輩達！ トーティリア！ マレイズ先輩から伝言です！ そのままお聞きください！」

レイムは三人に聞こえるように声を張り上げる。ピクリと反応があるがこちらを向くことはない、だがそれでいい。

「クエブレの毒を直接受けてなくても、わたしたちはここにいるだけで濃い濃度の毒を吸い込んでしまってます！ だから一定の間隔でマレイズ先輩のところまで行って解毒してもらって下さい！ マレイズ先輩は反対の方角の草叢のところに身を潜めー」

「レイム！ 逃げろ！」

「！」

ギランの声にはっとすると、クエブレがレイムに向かって毒の霧を吐きだしていた。叫ぶことに必死になっていたレイムは反応が遅れ、上手く身体が動かない。

「っ……！」

逃げなければと逸る心とは裏腹に言うことの効かない身体。毒の塊がレイムに襲い掛かろうとしたそのとき、レイムの身体が何かに引き寄せられる。堅い板のようなものに身体を押し当てられながら頭と背中に腕が回され、背中から地面に倒れ込む。

「大丈夫かギラン！」

「ふえ……？」

打ち付けた背中 of 痛みに顔を顰めながら、視界一杯に映るのは三次生の男子学院生服だった。それがギランのものであるということに、セズの声を受けてから気づく。

「くっ……！」

「！ 先輩！」

頭の上から聞こえるギランの苦悶の声に、レイムはもぞもぞと動いて覆い被さるギランから抜け出す。そしてギランの状態を見て息を詰まらせた。

まるで孢子のような細かい粒のようなものが、制服だけでなく髪や肌にまでびっしりと纏わりついている。それはここに来るまでに見た植物についていたのと同じもの。

「せんば……っ！ わ、わたしを、庇ったから……！」

「……俺が勝手にしたことだ、気にするな」

歯を食いしばりながらギランが身体を起こす。顔色は明らかに青ざめており、毒の粒子の侵食は顔の方にまである。

これを気にするなという方が無理だ。レイムがヒリングからの伝言を伝えることのみならず、クエブレの動きにも注目していれば避ける余裕があっただろう。気づいていれば、ギランがレイムを庇うこともなかったはずだ。

「ギラン！ 今すぐヒリングのところへ行け！ でないとお前死ぬぞ！」

「……っ！ ギラン先輩、立てますか？」

セズの切羽詰った声を背中に受け、レイムはギランに立つことを促すが、ギランは苦痛に顔を歪めるだけで、なかなか立ち上がらない。手伝おうと腕を引っ張るが、レイムの力ではギランを立ち上がらせるどころか肩を貸すこともできない

だろう。

「チッ……！ しっば、わたしがギランをつれていく！ お前はトートと一緒にあいつの注意をわたし達からそらしてくれ！」

「は、はい！」

立ち上がらないギランをどうすることもできないレイムを見兼ねたのか、離れた位置からセズがこちらに向かって走り出した。

「先輩、危ない！」

しかしトーティリアの叫ぶ声でクエブレが再び狙いを定めていたことを知る。レイムでもギランでもなく、狙いは一セズだ。彼は悔しげに顔を歪め、ギランから距離をとった。反対側では、トーティリアが自分に狙いをひきつけさせようと堅い鱗に剣で斬り付けている。しかしそんなトーティリアには目もくれず、クエブレはじっとセズに狙いを定めていた。いつも明るい表情ばかり浮かべている彼の顔にも、流石に焦燥の色が走る。セズが狙われているとなると、ギランをヒリングのところへ運ぶことができない。

恐らくクエブレは理解しているのだ。四方八方から攻撃された先ほどの状況とは違い、攻撃の要である一人が自身の毒を受けて戦闘不能に陥ったことを。ならば今いる人間達の中のもう一人の攻撃の要であるセズを集中して狙うのが、一番効果的なのだということを。現にその場から動かなくなったギランとレイムを、クエブレは気にも留めていない。

(どうしよう……このままじゃギラン先輩が……！)

動き回って血の巡りが活発になっている状態では、毒の回りも速い。一刻も早く解毒しなければ命に関わってしまう。レイムはギランの背中を支えながら何か打開するための術はないかと考える。

(どうしようどうしようどうしよう……！)

しかし考えれば考えるほど頭の中が焦りでいっぱいになってしまう。クエブレがセズを狙っている以上、ギランをヒリングのところまで運ぶことなどできない。ヒリングは教師の治癒に集中しているため、動くことができずにいる。教師の張った動きを制限する魔法陣が、生命線であるから。

トーティリアも無視されている以上、レイムが魔法銃（ブラスター）で意識を逸らそうとしても同じく無視されるだろう。鱗が容易く弾いてくれる攻撃なんて、意に返す必要がない。

しかしそこでふと思う。もしもクエブレの堅い鱗を突き破れるほどの威力のものを放てば、こちらを向くのではないだろうか。

レイムにはあるではないか、同じ魔法銃（ブラスター）でも桁違いの威力を誇るものが。頸部などの急所に着弾させれば、うまくいけばそのまま倒すこともできるかもしれない。だが、それをするには犠牲（・・・）が伴う。

レイムがかつて自分のせいで失ってしまった彼女（・・・）の存在が、最後の躊躇を引き起こす。この決断は、決して使わないことを決めたうえで手に入れた彼女（・・・）への裏切りをも意味していた。

「う……！」

「先輩！ あ……！ 侵食が……！」

苦しげに顔を顰めるギランの顔のほぼ全面が粒で埋まってしまっている。レイムは力が入っていない、同じく毒素に侵食された手を強く握った。

(ギラン先輩はわたしを庇って毒を受けてしまった……なのに、どうしてわたしが迷う必要があるの)

腹は決まった。ギランをそっと寝かせてから、セズを執拗に狙っているクエレブレを紅い瞳で睨みつける。

レイムは魔法指輪（マジックリング）から臙脂色の光沢を持つ、美しい魔法銃（ブラスター）を手に取った。そしてクエレブレの攻撃を避け続けてるセズに向かって叫ぶ。

「馬鹿力先輩！ わたしが撃ったらすぐにギラン先輩をマレイズ先輩のところへ！」

「！ ああ！ わかったぞ、しっぽ！」

セズから明瞭な返事を得て、力強くグリップを握りながらレイムは駆ける。次は、諦めずにずっと剣をクエレブレに向け続けている彼女のもとへ。

「トーティリア！」

レイムはトーティリアに近づき過ぎない程度に駆け寄った。彼女は近寄ってくるレイムに気づくと、刃先をクエレブレに向けるのをやめ、チンという音と共に鞘へと収める。そしてクエレブレの動きを注視しながらバックステップで距離をとりながらレイムの下へと来てくれた。

「どうしたレイム・リリアーゼ。早くセズ先輩から意識をこちらに向けさせないとフォトグリス先輩が――」

「そのことだけど、わたしに任せてくれない？ 一つだけ策があるの。――たった一回しか使えないから、絶対失敗するわけにはいかないの」

自分よりは高めの位置にある赤茶色の瞳を、まっすぐ見つめた。

「――わかった。お前に合わせよう」

「――ありがとう」

察してすぐに頷いてくれたトーティリアに礼を述べ、今手にしている彼女を示しながら簡単に段取りを説明する。彼女は口を挟むことなくレイムの話には耳を傾けた。

「――だから、撃った後のことを頼みたいの。大丈夫？」

「フ、わたくしを誰だと思っている。学年一の剣術を誇るトーティリア・スウエムフォードだぞ。寄せられる期待に応えずしてどうする」

「……頼もしいね」

皮肉ではなく、心からそう思った。いつもは鬱陶しいその自意識過剰な台詞も、今だけは頼もしく聞こえる。彼女はこんなときにも普段通りだ。

「じゃあわたしは行くから！ あとよろしく！」

「ああ。――ちょっと待て、レイム・リリアーゼ。お前先ほど一回しか使えないと言ったが、それはもしや――」

察しのいいトーティリアは、レイムの説明を聞いて犠牲（・・・）となる存在に気づいたのだろう。レイムはピタリと立ち止まり、唇を噛んだ。

「――今はそれを気にしてる場合じゃないの！」

トーティリアに言ったというより、自分に言い聞かせるように叫ぶと、それを振り切るためにレイムは走る。覚悟は決めた。ギランを絶対に助けてみせると。しかしだからといって彼女（・・・）への罪悪感も捨て切れない。いや、捨て切れない。

だがこれは自分と彼女にしかできないのだ。それに、彼女を失うことよりも、ギランを失う方がレイムは怖い。おかしい話だ。今まで大事にしてきた彼女よりも、今日になって漸く人柄を把握することができた人物の方が大事だなんて。そんな自分に驚きつつも、決して嫌だとは思わなかった。

レイムはある地点までくると身体にブレーキをかけ、止まる。ここはヒリングのいる地点とギランのいる地点の丁度半分くらいのところ。自らに視点を向けるにはおあつらえ向きの場所。

ずっと手にしていた彼女を徐に構えた。セズを狙うクエレブレは、長い首を動かしながらセズを狙い続けている。その長い首にレイムは照準を合わせた。どの生物の共通の急所である頸部。頑丈に守っている堅い鱗に通じるかはわからない。だが、確実にクエレブレの気を引くことはできるだろう。自分に傷をつける危険分子と判断して。そうすればセズがその隙をついてギランをヒリングの所へ連れて行ってくれる。そしてこの攻撃が通じるのならば、後はトーティリアが何とかしてくれる。――大丈夫だ、自分は一人ではない。だから、今自分ができることをやろう。

「ごめん…….だけどお願い、わたしに力を貸して！ ロクサンヌ！」

レイムは魔丸の魔法銃（ブラスター）、ロクサンヌのトリガーを引いた。

遠のきそうになる意思を何とか繋ぎとめてくれている暖かな手。しかし泣きそうに顔をゆがめながら自分を見つめる彼女の姿は痛ましく、居た堪れない気持ちになった。

（そんな顔をさせたくて、お前を庇ったんじゃないんだ……）

そう口に出したくても、毒の回りは思った以上に速く、思うように口が動かない。

レイムは力があまり入らなくなった手を両手で包み込むように握ると、何か意を決した真紅の瞳をこちらに向けた。何故だろう、その腹を括ったような眼差しに胸騒ぎを覚えるのは。

そしてそれは的中する。レイムが魔法指輪（マジックリング）から取り出した魔法銃（ブラスター）は、一度だけ見せてくれた臙脂色のもの。壊してしまうからと、使うことを厭っていた魔丸の魔法銃（ブラスター）だ。この場で取り出したということは、まさか――

「馬鹿力先輩！ わたしが撃ったらすぐにギラン先輩をマレイズ先輩のところへ！」
「！」

悪い予感というものは、どうしてこうも当たるのか。

簡単に予想がついた。レイムの持つ弾丸の魔法銃（ブラスター）はクエレブレの頑丈な鱗に阻まれてしまう。しかし、それが魔丸なら話は違う。そしてレイムは色憑きだ。本人も言っていた、魔力を凝縮する機能を持つ魔法銃（ブラスター）は、たとえ使い手の魔力が常人より高くても、同じように凝縮してしまう。だから通常の魔丸とは比べ物にならない威力になると。しかしその代償は――

「やめ…….ろ」

止めるべく彼女に向かって手を伸ばす。自分が魔力のコントロールをできていないばかりに、魔法銃（ブラスター）を壊してしまったことを悲しんでいた彼女は今、自らそれをしようとしている。そしてレイムにそうさせてしまったのは、ギランのせいだ。

自分のために大事な魔法銃（ブラスター）を壊すことなどしなくていい。そう言いたいのに、言葉は繋がらず、レイムは自分と距離を置くため離れていく。

——グルォオオオオオオオオオ！

震んでいく視界は既にクエレブレの咆哮が聞こえるのみ。それすらも小さくなっていく気がすると思ったときには、完全に意識を手放していた。

——ドオン！

耳を劈くような発砲音が木霊した。一筋の光が直線を描く。その光はクエレブレの頸部へ直撃し——勢いを殺すことなく貫通した。

反動の強さのあまり後ろにひっくり返ったレイムの手には、銃口が無残に砕け散った魔法銃（ブラスター）を残して。

——グルァアアアアアアアア！

「！ やった!？」

クエレブレの絶叫を聞き、レイムは飛び起きる。視界に映ったのは、苦しげに首を大きく振り回しているクエレブレの姿。魔丸が貫通した部位から黄色の液体が滴り落ちている。あれはもしかして、血だろうか。

——グルォオオオオオオオオオ！

急所である頸部を穿たれ、クエレブレは最早セズを狙う余裕がない。これならばきっと上手く行く。後は——

「トーティリア！」

「——任せろ、レイム・リリアーゼ」

首を振り回しているクエレブレの背後に、一つのシルエットが現れる。糸のような細い髪を靡かせながら、トーティリアがクエレブレの体躯を足場に駆け上がった。

「斬！」

一閃。レイムが打ち抜いた箇所を的確に狙った剣筋は、弾かれ続けたのが嘘のようにあっさりと頸部を切断する。

もしもレイムの攻撃で鱗を傷つけることができたなら、そこを攻めれば倒すことができるかもしれない。倒すまではいわずとも、痛手を負わせられるはず。だからトーティリアに追い討ちをかけるよう頼んだ。彼女ならば暴れるであろうクエレブレの動きを躲し、確実に仕留めてくれるだろうと信じて。

トーティリアは地面に着地すると同時に、剣を鞘に収めた。その頭上では長さが半分になった首が慣性の法則で今だ動き続けている。それも切断された部分が地面に落ちる頃には、身体がぐらりと傾き、地響きと共に巨躯が倒れた。

「や……った？」

「どうやら……何とかなっただけだな」

「おーいっしょ！ ギランをヒリングのところに連れていったぞー！ もう大丈夫だ！」

倒れたクエレブレを乗り越え、セズが大きく手を振りながらこちらへやってくる。

「先輩……！」

助かったのだと、レイムは胸を撫で下ろす。

「しかしすごいなお前たち！ クエレブレを倒してしまうなんて」

「わたくしの手にかかれば当然です……とりたいところですが、今回のところはレイム・リリアーゼがクエレブレの頸部を打ち抜いてくれたおかげです。わたくしの剣は、堅い鱗に全く歯が立ちませんでしたから」

「そっか！ よく頑張ったな、っしょ！」

「ありがとうございます——って頭撫でようとししないで下さい！ 結構です！」

セズの手がレイムの頭に伸びようとしていたため、レイムはトーティリアの背中に避難する。そして行き場を失ったセズの手は、そのまま前にいるトーティリアの頭の上へと向かった。

「わ、わたくしも間に合って……！」

「遠慮するな！」

「きゃあああああ！」

レイムはセズの注意がトーティリアにいつている隙をつき、こっそりとその場から離れる。セズのことも嫌いではないが、彼は加減というものを知らない。また頭を好きに振り回されるのはごめんだ。

トーティリアに注意がいつているのをいいことに、レイムはタタタとヒリングのいる方へ向かう。そこにギランもいるはずだ。セズからもう大丈夫だと教えてもらったが、やはり助かったところを自分自身の目で直接見たい。

クエブレの遺骸の傍を駆け抜け、ヒリングがいた茂みの奥を見つける。そこには横たわる二人の人間を介抱しているヒリングの姿。勿論、横たわる一人はギランだった。

「ギラン先輩！」

「リリアーゼさん。ギランならもう大丈夫だよ。全て解毒した。肌の方はまだ痕が残ってるけど、それも次第に回復するから」

「あ、ありがとうございます！」

レイムはヒリングに深々と頭を下げた。そしてギランの様子を見る。確かに肌はまだ侵食された痕が残っているが薄くなっており、顔色もいい。

ギランの無事を自分の目で確かめることができ、レイムはへなへなとその場にしゃがみこんだ。身体から力が抜ける。自分が思っていたよりも力が入っていたらしい。

「先輩……よかつ……よかつた……！」

「ギランのことを心配してくれたんだね、ありがとう。ギランは頑丈な奴だから、多分そろそろ目を覚ますかも——」

「う……」

「あ、起きた」

ギランの双眸がゆっくりと開かれる。思わず顔を覗き込み、切れ長の漆黒の瞳にレイムの姿が映った。

「……リリアーゼ？」

「せんぱ……！」

じわりと目頭が熱くなる。込みあがる衝動に耐え切れず、レイムは身体を起こそうとするギランに勢いよく抱きついた。

「ぐお!？」

「せんぱああああああああい！ うわああああああああああん！」

「リ、リリアーゼさん!？」

ボタンとギランは再び地面に倒れることになった。レイムはギランの胸にしがみつき、わんわんと泣き叫ぶ。

「うわああああああん！」

「リリアーゼさん落ち着いて……」

「……ひとまず、どいてくれないかりリアーゼ……」

「うにゅううう……」

レイムはギランから降りて傍に座る。腕でごしごしと目を擦って涙を拭こうとするが、拭っても拭ってもまるで滝のように涙は零れ落ち続けた。

「……心配をかけたみたいだな」

「心配しました！ わたしを庇ったせいで毒を受けてしまって！ わたしは、先輩の力になりたくて追いかけてきたのに……逆に先輩の足を引っ張って！」

ギランが無事だった安堵と、自分が足を引っ張ったせいでこんな目にあわせてしまった自責の念と、そんな自分が不甲斐無く思うのがごちゃまぜになり、感情が爆発した。泣き止まなければ先輩たちが困るということはわかっているのに、高ぶる感情に理性がついていかず、ポロポロと涙が止まらない。

「……リリアーゼを庇ったのは、俺が勝手にやったことだ。だから気にしなくていい。――それよりも、俺の方がお前に謝らないとな」

「ふえ？」

レイムは目を擦るのを一旦とめ、ゆっくりと身体を起こしたギランを見上げた。レイムがギランに謝らなければならないことはあれど、彼から謝罪を受ける理由が全く思い浮かばない。

「あれだけ嫌がっていたのに、魔法銃（ブラスター）を破壊しなければならない選択をさせちゃった。その……ロクサンヌだったか？ 悪かった……すまん」

「それは……」

レイムは片手で握っていたままのロクサンヌを見下ろす。臙脂色の美しい色彩を持った魔法銃（ブラスター）は、シリンダーから先の部分が砕けてなくなった、なんとも無残な姿に成り果ててしまっている。レイムは痛ましい姿になってしまったロクサンヌを胸で抱きしめながら、ギランを見上げて首を横に振った。

「いいえ、彼女の死は先輩のせいではありません。先輩がこんな目にあったのも、わたしが未熟だからですもの。だからギラン先輩の方こそ気にしないでください。わたしは自分で選んだんだんです。躊躇しなかったわけではありませんけど、後悔はしてません。それに――」

レイムはギランの漆黒の瞳をまっすぐ見つめた。

「ロクサンヌは、きっと理解してくれたと思います。自分の代わりにギラン先輩を助けることを。彼女を失ってしまったのは確かに悲しいですが、それ以上にギラン先輩が無事でいてくれたことが嬉しかったです」

本当の気持ちを、そのままギランに伝える。この学院で、魔法銃（ブラスター）以上に大切な存在ができるなんて思っ

てなかった。それこそ両親以外、大事だと思える人すらも今までいなかったのに。

（冷たい人もいるけど、先輩みたいなあったかい人もいるんだ）

色憑きなのに魔術を使えないことを馬鹿にする人間は確かにいる。だが、全ての人間がそうなのではない。知っていたはずなのに、今までずっとそのことに目を向けようとしていなかった。

もしかしたら、自分は人に興味がないフリをして内心怖がっていたのかもしれない。色憑きなのにと落胆されたり、妖狐と馬鹿にされたりするかもしれない。本当に興味がないのなら、ギランの温かさを知っても嬉しいなんて思わなかったはずだ。トーティリアのことも嫌いになりきれないのも、やはり個として扱ってくれるのが嬉しいから。本当は、ずっと欲していたのだろう。『色憑き』ではなく『レイム・リリアーゼ』として見てくれる人。

「……そうは言っても、そこまで壊れてしまったら修復もできんだろ？ だから何か詫びをさせてくれないか？ 俺にできることなら何でもいいから言ってみてくれ」

「本当に気にしなくても……あ、それなら」

ロクサンヌのことを気にしてくれるだけでレイムは嬉しかった。心無い人ならば、無残な姿のロクサンヌを見ても「たかが魔法銃（ブラスター）だろ」と一蹴される。

ギランの優しさを再認識したレイムは、あることを思いつく。そしてにっこりと満面の笑みを浮かべた。いつの間にか涙は止まっている。

「わたしのこと、レイムって名前と呼んでください。それで全て水に流してあげます」

「は……？ って、それだけでいいのか？」

「はい。だって先輩わたしのこと家名ばかりじゃないですかー。だから名前と呼んでくださると、とても嬉しいです」

にこにこ期待を込めた眼差しでギランを見上げる。ギランは口を開けて何か言おうとするが、あー……と漏れるような声が聞こえるだけで、肝心のレイムの名前は紡がれない。そしてう、という何かが詰まったような声と共に、顔を横に逸らした。見える耳は真っ赤に染まっている。

「先輩、照れてないで早く呼んでください。それだけのことなんですからー」

「っ！ あー……その、だな」

「わたしを助けようとしてくれたときは、はっきり呼んでくれたじゃないですかー」

「そ、それは……！」

ギランに抱きすくめられる前後のことは鮮明に覚えている。彼はあのとき確かにはっきりと呼んだ。レイム、と。あのときは感慨にふける余裕はなかったが、今思うとやはり嬉しかった。危機が迫っていなければ、その場できっと喜んでいただろう。

「先輩、はーやーくー」

「……！ だあああああ、わかったから急かすな！」

漸く意を決めたのか、ギランがこちらを見た。漆黒の瞳とぱっちり目が合う。

「レ、レイム……！ どうだ、これで満足か！」

「はい、ありがとうございます」

声音だけを聞くとただ怒鳴っているようにしか聞こえなかったが、真っ赤に染まったギランの顔を見てレイムは満足した。彼は決して怒ってなどいない。極度に照れているだけだ。

「あ！ そうだギラン先輩、もう一つ手伝ってほしいことがあるんですが」

「な、何だ？」

「ロクサンヌのお墓を作りたいんです」

「……は？」

「もう彼女は修復不可能なので、せめて弔ってあげたいなと……」

「あ、ああ、成る程……」

「って、成る程じゃないよ！ 何納得してるんだ君は!？」

今までずっと黙っていたヒリングが突然会話に入り込んでくる。そういえば彼もここにいたのだということ、レイムはすっかり失念していた。

「何の材質でできてるかは知らないけど、金属を土の中に埋めるのはまずいって。ヘタをしたら土壤汚染につながってしまうよ」

「え、じゃあ作ったらだめなんですか？」

ガーンとショックを受けて思わず涙目になる。ギランを助けるために犠牲になった彼女に対するせめてもの報いになるのではと思ったのに。

「え、えっとね……あ、そうだ！ その魔法銃（ブラスター）の部品の一部を、お守りにするっていうのはどうかな？ そうすればいつまでも一緒だよな！」

「！ その手がありましたか！」

ロクサンヌの一部を常に持ち歩く。確かにそれなら彼女への贖罪にもなるし、何よりずっと一緒にいることができる。ヒリングの提案に目を輝かせると、彼は安心したように穏やかに笑い、レイムの頭へ手を伸ばした。ポンと掌が乗せられ、軽く撫でられる。どこぞの馬鹿力な先輩とは全く違った柔らかな手つきだった。

「うん、喜んでくれたようで僕も嬉しいよ」

「えへへ、ありがとうございます」

「……お前ら、俺がいること忘れてないだろうな」

不機嫌な低い声音に思わず振り向くと、つり上がっている瞳を更につり上げて、いかにも不機嫌そうなオーラをギランが纏っていた。勿論ギランのことを忘れるわけがないし、レイムには今のやり取りにギランの機嫌を損ねる原因がどこにあったのかがサッパリわからず、首を傾げた。そして本当は怖くない人だと知っていても、そのつり上がった瞳と眉間に皺が寄せられている顰めた顔は、やはり恐かった。

「わ、忘れてないです！ ギラン先輩のことは決して忘れてません！ さっきヒリング先輩のことは忘れてましたけど！」

「ちょ、リリアーゼさん、それ地味に傷つく」

必死に弁解すると、不機嫌なオーラが次第に収まっていきレイムはほっと安堵した。ギランは無視されたと思って拗ねてしまったのだろうか。照れやな性格といい、根はかわいい人なのかもしれない。

「全く君は……リリアーゼさんと少し話してたくらいで嫉妬しないでくれよ。君の顔はただでさえ怖いんだからさ」

「……るせ。でもって怖い顔ってのは余計だ！」

こそこそと先輩二人が何やら言い合っていたが、小声であったため砕けたロクサンヌを魔法指輪（マジックリング）に収めていたレイムの耳には届かなかった。

「おーい、ギラン！ 身体はもう大丈夫かー？」

大きくて明るい声の持ち主が、こちらに向かって大きく手を振りながらやってくる。その後ろにトーティリアもいた。セズはスッキリとした笑顔を浮かべているのに対し、彼女はどこか拗ねたように唇を尖らせながら、乱れに乱れている自慢の黒髪を必死に整えている。それだけで二人の間に何があったのかを悟るのは容易かった。

「おお、すっかりよくなったなギラン！ よかったなしっぽ！」

「お、おい！ セズ、やめ……！」

「いたあああああ！ 痛い痛い痛い！ 背中叩くのやめ……！」

「セズ、リリアーゼさん痛がってるよ。僕達ならともかく、リリアーゼさんは女の子なんだから、ちゃんと力加減をしてあげて」

セズにバシバシと背中を叩かれ、レイムは悲鳴をあげた。叩かれたところがじんじんと鈍い痛みを発している。

この馬鹿力、と心の中で悪態をつきながらセズを恨みがましい目で睨む。先達は敬うべしとはわかっているが、こうも容赦なく叩かれたり撫でられたりするととなると敬う気持ちは失せる。ギランやヒリングのような先輩ならば、心から尊敬できようものを。

「……お前たち、よくやってくれた」

「にゅ？ あ、先生」

自身の身長と同じ位の長さを持つ杖に寄りかかりながら、横になっていたもう一人の人間が起き上がる。ヒリングによる治癒を受けていた教師だ。張っていた結界のため魔力をほぼ使いきり、意識を失っていたはずだが、同じく目を覚ましたらしい。

「先生、あなたもまだ本調子ではありません。無理をなさらないで下さい」

「気遣いありがとう、ヒリング・マレイズ。だが大丈夫だ。自分のことは自分が一番よくわかっている」

教師の顔は真っ白でかつ青ざめているが、表情は穏やかだ。結界を張る必要がなくなったため、ギランと同じく身体が回復に専念したのだろう。教師の存在もすっかり忘れていたレイムであったが、クエレブレを倒せたのは、気絶しても張り続けてくれた足止め用の結界のおかげだ。レイムは教師に向かって深々と頭を下げる。

「先生、結界を張ってくださってありがとうございました。おかげでわたし達のような若輩でも、何とか撃退することができました」

「いや、私には足止め以上のことはできなかった。撃退できたのはまさしくお前たちの力だよ、ありが——」

突如、教師の身体がフラリと傾き、それを慌ててヒリングが支えた。レイムも思わずヒヤリとするが、ヒリングが上手く受け止めたため事なきを得る。

「先生、貴方の身体はまだ休息を必要としています。だからまだ横になって——あ、セズ、君達の持つ転移装置（ワープシステム）を貰ってもいいかい？ 先生を先に返したいんだ」

「おう、いいぞ。ほれ」

「ありがとう」

セズが魔法指輪（マジックリング）から転移装置（ワープシステム）を取り出し、ヒリングに向かって投げた。ヒリングは器用に片手でパシリとそれを受け止める。

「ヒリング・マレイズ、学院に戻るのももう少し待ってもらえないか？ 皆に告げなければならないことがある」

「告げなければならないこと？」

レイムが反復して尋ねると、教師はコクリと頷いた。

「私がお前たちに伝えなければならない言葉、それは『ン』だ」

「『ン』？」

レイムは首を傾げる。突然一文字を言われても一体それが何を示すのかさっぱりわからない。

「先生、もしやそれはチェックポイントの……？」

「あ！」

ぼさぼさにされた髪を整えたトーティリアがポツリと口にした言葉に、レイムはハッとした。そうだ、自分達は今までオリエンテーリングをしていたのではないか。クエレブレの騒ぎですっかりそのことが頭から抜け落ちてしまっていた。

「しかし先生、この騒ぎではオリエンテーリングは中止なのでは……？」

「その可能性もある。だが、中にはここを一番初めに来たペアも何組かいるのだ。そのペア達はなんの問題もなく全てをこなして学院へ戻るであろう。そうなれば、間違いなくそのペアが優勝となる」

「えええ！ でもそれじゃあ帰らざるを得なかったペアとか納得しないんじゃないか……」

クエレブレの騒ぎさえなければ、転移装置（ワープシステム）を使って戻る必要のなかったペアは大勢いたはず。どんな理由であれ、実力とは関係のないところでリタイアを強いられたペアにとって、何のトラブルもなく全てを回ることができたペアは不公平に映るだろう。実際自分の目にもそう映っている。

「何を言う、運を味方につけるのも実力のうちだ」

しかし教師のその言葉に何も言えなくなった。オリエンテーリングは自身の持つ知力と体力だけでなく、実戦力が試される。そしてもし実力が拮抗しているペア同士の順位が変わるとするならば、それは『運』の要素が強く関わることになる。薬草や妖魔を探すのにかける時間は、まさしく『運』任せだろう。

「お前たちは私の科した課題をこなしてはいないが、クエレブレを倒したことでよしとして問題ないだろう。進むも戻るもお前たち次第だ」

教師はそれだけ言うと、ヒリングに学院に戻ることを促す。ヒリングは頷いて転移装置（ワープシステム）を地面に叩きつけた。

「それじゃあ僕たちは帰るけど……ギラン、君はどうする？ 戻るか進むか」

「……ここで戻れるわけねえだろ」

ヒリングの言葉に、ギランが立ち上がる。まだ少しふらりとしているが、両足はしっかりとしていた。

「なら、四人共頑張ってね。僕は学院で待ってるから」

ヒリングは教師と共に展開した魔法陣の上のにのり、ス、と姿が消える。もう学院に辿り着いているだろう。

「ギラン先輩大丈夫ですか？ あんまり無理しないでくださいね？」

「ああ、大丈夫だ。ヒリングも言ってたろ、俺は頑丈だって」

心配するな、と言うかのようにギランの大きな手が頭に寄せられた。ごつごつとした無骨な手だが、ヒリングのときよ

りも暖かく、不思議な心地良さを感じる。セズよりも優しい手つきなのは言わずもがなだ。

「先輩、五つの文字が集まりましたね！ 早速並べ替えましょう！」

「ああ」

ちらりとトーティリア達の方を見遣ると、彼女は顎に手を当てて考えているような仕草をしていた。こちらも負けていられないと集まった文字を順に思い出してみる。

「セ、ギ、モ、イ、そしてン……」

この中に紛れているだろう偽の文字を抜かし、並べ替えることで示される言葉は――

「セイモン！」

「それだ！」

学院には東西南北それぞれ一つずつ門がある。だが、その中で一つ正門と呼ばれる残りの三つよりも大きな門が一つあった。西側の門がそれに該当する。

「ッチ、よりもよって反対側か……！」

「行くぞトート！ ギランとしっぽに遅れをとるな！」

「はい！」

「あ！」

一目散にトーティリアとセズが西に向かって走り出す。それを見てレイムとギランも慌てて追いかける。だが、走るのが得意なセズと鍛えているトーティリアに、前衛に比べたら身体能力に劣るレイムと解毒されたばかりで本調子ではないギランではどう考えても不利だ。

元々移動においては向こうに分があった。それに加えて更に不利な条件が重なり、このままでは引き離されるばかりで追いつくところではない。それは自分達の負けを意味する。

(そんなの、絶対嫌！)

せっかくここまで来たのだ。全てのチェックポイントを回り、予想外の巨大な敵も何とか倒すことができた。ならば最後は華々しく勝利を手にした。ここまで頑張ったのだからよしとするようなことは、したくない。

(ただ走るだけじゃ絶対勝てない……何か考えないと、何か……！)

みるみるうちにトーティリア達の姿は小さくなっていく。そして詰まり行く息。歩くのと違い、体力の消耗の激しい全力疾走はどんどんレイムの体力を削っていった。

「ゴホッ……！ ゲホゲホッ」

「大丈夫か!？」

咽返り思わず足が止まってしまう。それに合わせてギランも立ち止まった。レイムは乱れる呼吸を何とかしようと大きく息を吸っては吐いてを繰り返す。

「すい、すいません……！」

少しでも速く走らなければならないのに、これ以上の速さはレイムには出せなかった。前を向くと、すっかりトーティリア達の姿が見えなくなっている。

「レイム、俺に無理をするなど言う前にお前も無理はするな」

ギランが気遣うように背中をさすってくれた。嬉しいのと足を引っ張っている現実には悔しくなるのと、申し訳なさが胸中で混ざり合って複雑な感情がぐるぐると回る。そのせいで何て応えればいいのかわからなくて、首をコクコクと縦に動かすしかできない。

そして再び思い切り咳き込み、じわりと目尻に涙が溜まる。風邪を引いたときのような感覚の喉の痛みに、うー、と唸った。

(喉痛いいいい……咳って結構つら……！)

ケホコホと自身の口から飛び出す咳に、レイムはあることを思いついた。

「ギラ、ギラン先輩！ もしかしたら、トーティリア達に追いつけるかもしれません！」

「！ 本当か!？」

「はい！ ……ああでも、この場合ギラン先輩にかなり無理をしてもらわなければならなくなっちゃう……ど、どうしよう……！」

「俺のことは気にしなくていい。どうすればいいんだ？」

「あ、ありがとうございます！ えっとですね……」

レイムは喉の痛みも忘れ、ギランに思いついたことを説明した。

終

日が傾いてきた。若葉色の木々や草花が夕日の色に染まる。まるで互いの色彩の美しさを競っているかのように胸を張る草花と、真っ赤な光を一身に浴びる木々達。

そして草食性の妖魔が空腹を満たすべく生い茂った葉をむしゃむしゃと食べる姿と、その妖魔を狙う肉食の妖魔が草花に身を隠している姿が見え隠れしている。動くことのできない植物は成す術もなく食われ、草花を食う妖魔もまた、捕食者の手によってその命を脅かされつつある。しかしこの森の中では別段変わり映えのない風景。弱肉強食が成り立つ世界において、食うモノがいつ食われるモノに変わってもおかしくはない。現に食事の妖魔を狙っている肉食の妖魔も、いつか同じ危険に襲われるだろう。

ジリ、ジリりと捕食者は近寄っていく。食事の妖魔はそれに全く気づかず、呑気に草を食んでいた。一步、また一步と近づいていき――今まさに飛び掛らんと踏み込む。刹那、

ドン！ ドン！ ドオン！

予期せぬ連続する爆発音に、食事の妖魔はビクリと身体を震わせ、そして脱兎のごとくその場から逃げ出した。わけがわからぬと呆然とするのは捕食者で、獲物が逃げ出してしまったというのに何が起きたのか理解ができず、その場から動くことができない。

ピュン！

間を置かずに突風が捕食者の眼前を通過していった。身体を覆う毛が暫く同一方向へ揺れ続ける。

風が収まりポツンと残された妖魔は、獲物を逃してしまったことに気づくまで、ひたすら呆然とその場に立ち尽くしていた。

こんなに魔術を使ったのは生まれて初めてだ。こんなに何度も連続で使ったのも。その全てにおいて効果を発揮する前に爆発しているのだが、今はむしろそれを利用している。

「先輩！ 身体は大丈夫ですか!?!」

「ああ、平気だ。だから気にせず、レイムは魔術に専念している！」

「はい！」

現在レイムは、ギランに抱き抱えられた状態でひたすら魔術を放っている。

先を行くトーティア達に追いつくために考えたのがこの方法だった。レイムの魔術によって起きる爆発の爆風を利用し、推進力にする。

二人同時に進むには、ギランがレイムを担いだうえで上手く風に乗らなければならないため、とんだ難題をギランに課してしまったが、彼は嫌な顔をすることなくあっさりと頷いた。

ただ、レイムを実際担ぐことになると躊躇いを見せていたが、きっと彼の特性である『照れ屋』が発動したのだろう。

レイムの方に腕を伸ばそうとしては引っ込める。

そんなギランに痺れを切らし、レイムは自分からギランに向かって飛びついた。肩の上に顎を乗せ、フウと一息つく。

「な……！ おまっ……！」

「ギラン先輩、支えてくださると嬉しいです。この体勢結構きついで」

動揺しているギランを落ち着けるように、レイムはして貰わなければならないことを告げる。

このままでは、進むより先にトーティリア達がゴールしてしまうと思ったから。

「先輩がわたしをしっかり担いでくれないと意味がないんですってば。ギラン先輩が照れ屋さんなのはよく知ってますが、今は恥ずかしがってるときじゃありません！」

「……」

ギランも今は照れている場合ではないと悟ったのか、背中と膝の後ろに漸く腕が回され、支えられる。

「では行きます！」

それに安心してレイムは詠唱を唱え始めた。そして発動と同時に起こる爆風が絶えぬよう、短い詠唱のものを何度も繰り返す。その速さは、トーティリア達の走るスピードよりも明らかに早い。これならいけると確信した。

（問題は今トーティリア達がどこにいるかだけど……）

再び走り始めて大分経ったが、未だにトーティリア達の姿が見えない。大分離されてしまっていたのだろう。もしかしたら既にゴールしているのではという考えがよぎるが、レイムは頭を振って雑念を払った。

今は魔術を連発することに集中すべきだ。たとえ可能性が万が一だとしても、諦めたくはないのだから。

「見えた！ セズ達だ！」

「！」

レイムは振り向きたくなる衝動を抑えながら胸を躍らせる。やっと追いつくところまでやってきた。自分達はまだ負けてはいない。

「うわ！　すごいなお前たち！」

セズの妙に弾んだ声が聞こえてくる。自分達が追いついてきたことを喜んでいるとしか思えない声音に、レイムは顔を引きたらせた。距離はかなり縮まったが、それはまだ向こうも余裕があるからだろう。

「セズ先輩！　正門が見えました！」

「ようし、ラストスパートだ！　負けないぞギラン！」

「それはこっちの台詞だ！」

「ぜったい！　負けないから！」

一度だけレイムは前を向くと、彼らとの距離は数十メートルといったところだった。しかし彼らもまたぐんと一段とスピードをあげる。この速さですっと駆け抜けてきたことを末恐ろしく感じたが、ここまで来てこちらを負けてはいられない。すぐに後ろを向くと自然と早口になりながら詠唱を唱え続けた。

ドンドン、と爆発音が響く森の中を、三人が疾走する。一人は少女を抱えながらも、前を走る二人との距離はどん

どん縮まっていた。数十メートルから十数メートル、そして数メートル。数センチにまで縮まった次の瞬間、四人はほぼ同時に正門を潜っていた。

「ゴール！ セズ・ラッカーノとトーティリア・スウェムフォードペアと、ギラン・フォトグリスとレイム・リリアーゼペア！」

その声を正面から聞いたのは、後ろを向いていたレイムだけだった。全力疾走したスピードで急に止まれるはずがなく、数メートルは進んだかもしれない。

「くっ……！」

「ギラン先輩、大丈夫ですか!？」

スピードが緩むと同時に、ギランの身体からがくりと力が抜ける。だが、それでもレイムを落とすようなことはせず、しっかりとレイムの足が地面につくように下ろしてから、両手を離して手を地面につかせ、荒い呼吸を繰り返す。

「俺は……大丈夫だ。それより……」

「うーん、難しいなー。どっちかなー？」

緊張感のない間延びした声にレイムはハッとした。どちらが先にゴールをしたのか。それをまだ聞いていない。

トーティリア達もまた息を整えながら、間延びした声の持ち主の教師の方を見ている。彼らもまた全力を出し切ったのだろう。教師の方を見つめたまま動かない。

「うーん、これはもう決まりだねー」

レイムはギランの背中をさすりながら教師の方を注視する。四対の視線を一身に受けた教師は明るい笑顔を浮かべた。

「君たちは同着二位だよ！ おめでとう！」

「同、着……？」

がくりと足から力が抜ける。絶対負けたくないと思気込んでいたのに、勝てなかった。負けもしてないが、それでも勝ってはいないのだから同じこと。

「レイム・リリアーゼ」

ペタンと項垂れるレイムの元に、凜とした声の持ち主が、偉そうに腰に手を当てながらやってきた。顔をあげて、整った彼女の面立ちを見るが、彼女はレイムのように落ち込んでいる様子はない。

「結果は引き分けたが、いい勝負だったと思う。参加してくれてありがとう、レイム・リリアーゼ。おかげで張り合いがもてた。だが次はわたくしが勝つ」

そしてレイムの眼前に差し出されるトーティリアの手。胼胝がついているのに、レイムはその手を綺麗だと思った。決して口になど出さないけど、やはり自分で言うように、彼女は美しい。

「……次に勝つのはわたし、だよ！」

レイムはその手に自分の手を重ねながら立ち上がる。真紅の瞳で赤茶色の瞳をまっすぐ見据えた。

今回は引き分けたが、こうした競い合いはこの先幾つもあるだろう。ならば決着はそのときつければいい。そして次こそ、絶対自分が勝つ。

「そういえば、わたし達が二位なら一位は誰なんだ？」

トーティリアの後ろにいたセズが、ふと疑問を口にした。それにレイムはハッとする。

自分達が同着二位ということは、最も早く戻ってきた一組がいるはずだ。一体どのペアが優勝したのだろう。

「――遅かったな、お前たち」

「ゲッ……」

「おー、ネストじゃないか！」

突如、スレンダーな肢体を持つ、トーティリアと同じくさらりと流れる長髪の持ち主が現れる。長い睫に縁取られた切れ長の闇色の瞳のせいで女性に見えるが、着ている制服と低めの声は立派な男性のもの。彼の姿を見て四つん這いの体勢から膝を立てて座る体勢に変えたギランは顔をしかめ、セズはどنگりのような丸い瞳を更に丸くする。

「なあネスト、もしかしてお前が一位なのか？」

「ああ、先ほどついたばかりだ。指定の妖魔や薬草を探すのに大分手間取ったから、速くとも十組くらいはゴールしていると思っていたが、まだ誰もゴールしていないと聞いて驚いた。他のペアならまだしも、相方が燃えていたお前達私よりも遅いとは。お前たちも大分探し回ったようだな」

彼はセズの問いに軽く頷くと、意外だと言わんばかりの顔でギランとセズの方を見遣っている。

「……ネスト、お前はどの場所から回り始めた？」

「うん？ 私は東から南東の方角へ向かい、北のポイントを最後に学院へと戻ってきたが……それがどうかしたのか？」

一番初めに問題の東のチェックポイントへ行っていたのならば、クエレブレのことも何も知らないのも無理はない。レイムはギランの質問に応えたネストラートの返答を聞いて、教師の言っていた『運を味方につけるのも実力のうち』という言葉を思い出す。クエレブレの騒動に鉢合わせずに済んだのは、まさしく『運』だ。

「運も実力のうちって……こういうことを差すのかあ……」

指定された薬草や妖魔の一部をただ所持していればいいというだけではなかった。こうした不測の事態を偶然回避する能力もまたそう。どの場所から始めるかは自由なのだから、クエレブレの騒動に巻き込まれた自分達はついてなかった。ただそれだけのこと。

「……お前はまた来年、再来年あるだろ。また頑張ればいい」

落ち込むレイムにギランがぶっきらぼうだが、励ましてくれているとわかる言葉をくれる。レイムはそれだけで嬉しくなって目を細めた。

「はい、頑張ります！ ――あ、そうだ。ギラン先輩」

レイムはギランの方を向いて彼の前に膝を抱えながらしゃがみ、見上げるようにギランの漆黒の瞳を見つめた。

「もしよろしければ、これからも魔術の実戦の指導してほしいんですけど……お願いしてもいいですか？」

ギランが提案してくれた暴発を利用した戦い方。それを教えてくれたからこそ、最後の最後まで諦めずに頑張れた。だからこれから自身の新たな戦い方を身につけるところを、彼に見てもらいたい。それに――

「先輩が見てくださると、頑張ろうって気持ちが湧いてくるんです。挫けないで続けられる気がするんです。だからお願いします」

ペコリと頭を下げる。少ししてから徐に頭を上げると、ポンと頭に掌が乗せられた。

「……俺の指導は厳しいぞ。覚悟しておけ」

「はい！」

レイムは元気よく返事をする。すると背後に誰かがぬ、と近づいてきた。

「ほう。随分と親しい間柄になったではないか。オリエンテーリングが始まる前の、鬱屈とした姿がまるで嘘のようだ」
ネストラートだった。手で口元を押さえながらこちらを見下ろす眼差しは、まるで笑うのを堪えているかのよう。切れ長の瞳はニヤニヤといった表現が似合うような細め方をされている。せっかくの美貌が台無しだった。

「テメ……！ それは言うな！」

「吼えるなよギラン。私は友の進展を純粋に喜んでいるというのに……」

「どう見たって面白がってるだけじゃねえか！」

ギャアギャア、と言い合いを始めた先輩二人に挟まれ、レイムはポカンと口を開けた。ゴールしたばかりでお互い疲れているだろうに、どこに喧嘩する元気があるのだろう。

「はいはいみなさーん、元気があるのはいいことですが、まだオリエンテーリングは終わってませんよー」

教師の間延びた声に興が冷めたのか、ギランとネストラートは口論をピタリとやめ、深い嘆息と共に肩を落とす。あの声に脱力するのは自分だけではないらしい。

「大半のペアがリタイアしましたがー、まだリタイアもゴールもしてないペアはいるからねー。全ペアが戻ってきたらちゃんと受賞式はするから、それまではこっちで待っててねー」

力が抜けそうになるのを抑えながら、レイムは苦笑する。

どこか嬉しそうに手招きしている教師の後を、セズが同じく嬉々として追いかける。トーティリアがそれに続いた。ネストラートも、近くでこちらの様子を見ていたペアであろう一次生を連れ、そちらへ向かう。

「……俺達もいくか」

「はい。あ、ギラン先輩」

「何だ？」

立ち上がったギランに続いてレイムも立ち上がり、高い位置にあるギランの顔を見上げた。

「これからもよろしくお願いします」

「……ああ」

改めて伝えた言葉に、ギランは軽く頷いて前を向いて歩き始める。レイムは夕日に照らされて紅く染まった背中を見ながら、ニッコリと微笑んだ。